

母の手毬歌

柳田国男

青空文庫

この書を外国に在る人々に呈す

母の手毬歌

一、正月の遊び

皆さんは村に入って、うちに静かに暮らしているような時間は無くなったけれども、その代りには今までまるで知らずにいた色々の珍らしいことを、見たり聞いたりする場合は多くなってきた。村には前々からの生活ぶりをよく覚えていて、親切に話をしてくれる人があるものである。そういう話の中には、いつまでも役に立ち、また、^{なが}永く楽しみになるものが多い。注意して聴^きいてかえり、年をとった人々、また弟や妹たちにも御土産^{おみやげ}にしなければならぬ。その一つのお手本として、わたしがもう六十何年ものあいだ、忘れずにいたことを一つ書いて見よう。

このごろの田舎^{いなか}のお正月は、もうどういふふうに変っているか知らぬが、十年前までは

女の子の初春のあそびには、羽根^{はね}羽子^{はこ}板^{いた}と手毬^{てまり}とがあつた。この二つは、自分の手からだと思ふように動くことを知る、初めての機会であるゆえに、たいていの子どもには嬉^{うれ}しくて止^やめられず、大きくなってからも正月が来るたびに、いつも思い出すたのしい遊びであつた。ゴム毬のゴムがなくなつてしまつた淋^{さび}しき、それを南洋の人々から、わざわざ送りどけてもらつたよろこびなどは、今でも忘れずにいる人がきつと多いことと思う。ところでその、ゴムというものの日本にあらわれたのは、明治の世の中もやや後^{のち}になつてからのことで、田舎ではみなさんのおかあさまぐらいの人までが、小さいころにはまだお正月に、木綿^{もめん}糸^{いと}を巻いてこしらえた手毬を突いていたのである。白い木綿糸を、まんまに巻きあげ、その上をカガルといつて、紅^{あか}、青、黄、紫のあざやかな色の糸で、花や菱^ひ形^{がた}のうつくしい形に飾つたので、そのうつくしさを女の児^こが愛^{あい}していたために、ゴム毬になつてからのちも、なおしばらくのあいだは、そのゴム毬の上をもとの糸かがりの通りに、いゝどつて塗つたものが流行していた。木綿糸の手毬も作つて店で売つていたけれども、そういうのは中味^{はな}が綿^{わた}ばかりで、糸は少ししか巻いてないので、つぶれやすくもあり、またちつとも弾^はまなかつた。女の児^こたちが自分で作つた手毬は、できるかぎり巻きつける木綿糸を多くし、その芯^{しん}にはごく少しの綿をまるくして入れ、またよくはずむようにとい

って、^{りゅうひげ}竜の髭のみどり色の実をつつんだり、^{しじみがい}蜆貝に小さな石などをつつみ入れて、か
 すかな音のするのを喜んだりしていた。手毬に巻く木綿糸などは、もちろん長いものを使
 うのではなかった。そのころはまだ、家々で^{もめんばた}木綿機を織っていたので、その^{おりいと}織糸の端
 の方の、もうどうしても布に織れない部分、ふつうにキリシネともハタシの糸ともいつて、
 三、四寸は切つてのけるものをもらい集めて、それを一本ずつ丹念につないだものであつ
 た。一つの毬を巻きあげるにも、なかなか時間がかかった。母や祖母はその子のよろこぶ
 顔が見たさに、よその家のキリシネまでも無心をしてあるいたり、また手伝ったり^{さしず}指図を
 したりして、どこの家でも正月がくるまでに、二つか三つかの新らしい手毬ができていた。
 夜もこの新らしい手毬を枕もと^{まくら}において、もういくつ寝るとお正月と、^{ゆびお}指折りかぞえてい
 た子どもは多かつたのである。

二、手毬と木綿糸

^{てまり}手毬がこのように美しいものになったのは、^{もめんばた}木綿機が家々で織られるようになってか
 ら^{のち}後のことである。^{もめん}木綿というものの^{わがくに}我邦に知られたのは、相応に古いころからのこと

であつたようだが、木^きわたという作物^{さくもつ}を、諸^{しよ}処^{しよ}方^{ほう}々^{ぼう}の田^た畠^{はた}にうえ、それから綿^{わた}を取り糸^{いと}を紡^{つむ}いで、だれでも木綿^{きめん}の着物^{きもの}を着^きるようになったのは、江戸時代^{江戸時代}も中頃^{なかつら}から後のこ
とで、それ以前^{それ以前}には、冬^{ふゆ}も麻^{あさ}布^{ぬの}の衣服^{いふく}を着^きるのがふつうであつた。麻糸^{あさいと}はさらして真^ま白^{しろ}にすることがむつかしく、また、木綿^{きめん}のように紅^{あか}や青^{あお}のあざやかな色^{いろ}には染^{ぞめ}まらなかつた上に、これで織^{オリ}つた布^{ぬい}が長くもつので、そうたびたびは機^{はた}は立てなかつた。そればかりか、この糸^{いと}は木綿^{きめん}のようにふつくりとはしていないから、手毬^{てまり}に巻^まき掛^かけても今のゴム毬^{てまり}のように、ついてよく弾^はまなかつたのである。そのためでもあつたらうか、ちようどこの木綿糸^{きめんいと}を手毬^{てまり}に利用^{りよう}することが始^{はじ}まつたところから、だんだんと手毬^{てまり}のあそびが變^あつてきた。近いころの手毬^{てまり}はつくといつて、板^{いた}の間^まとか土^どの上^{うへ}とかに打^うちつけて、はね揚^あつてくるのをまた打^うつという、いくらか間^まの早い遊^{あそ}戯^びになつて、それを上手^{うま}につづけてつくおもしろさがまた一段と加^くわつてきたのである。

浮世^{うきよ}又^{また}平^{へい}の浮世絵^{うきよえ}などを見ても、もうあの時代^{時代}から女^{おんな}の子^こが膝^{ひざ}を突^ついて、手毬^{てまり}をつくところが描^かいてあるが、これはそのころには、まだ珍^{めづ}らしい遊^{あそ}びだつたのであろう。麻^{あさ}の機^{はた}糸^{いと}の切れはしをつなぎ合^あわせて、手毬^{てまり}に巻^まいていたということは、何^{なん}の本^{ほん}にも書^かいてないようだが、木綿糸^{きめんいと}の多^{おほ}くなる以前^{それ以前}には、それをしなかつたら手毬^{てまり}はないはずであり、

またそれがあつたゆえに、木綿糸の手毬も、だんだんに流行することになったものと思う。つまりは糸を巻く手毬は新しいものではないけれども、それが木綿の糸にかわつたために、きゆうに手毬というものは珍らしく、また女の子のあそびが以前にくらべて、ずっとおもしろいものになったことだけは争えないのである。

これは『民謡覚書』^{みんようおぼえがき}という本の中に、くわしく書いておいたから、大きくなつてから読んでごらんさい。われわれの持ち伝えている手毬歌のなかには、氣をつけて見ると二通りの種類がある。その一つは、やや間の早い^まつき毬の歌で、

とんとん叩^{たた}くは誰さんじや

とか、または

つくつくぼうしはなぜ泣くね

とかいうような、歌の言葉からもそれとわかるものがある。今ひとつのほうは揚^あげ毬^{まり}とい

つて、空に向かつて、二つまたは三つの手毬を投げあげて、手に受けてはまた揚あげるといふ動作をくり返すあそびで、このほうは毬の高たか低ひくによって、歌の節ふしを長くも短かくもするのがまたおもしろく、これならば弾まぬ手毬でも遊ぶことができた。わたしなどの小さかったころには、もうこの二通りの遊び方とはともに行なわれていたけれども、わたしの母などの楽しんで歌ったのは、主としてこの高く揚げるほうの手毬歌であつた。

三、母と手毬

わたしの母は、今いきていると百六歳ほどになるのだが、もう五十年も前になくなってしまった。男の子ばかりが八人もあつて、それを育てるのに大へんな苦勞をして、朝から夜までじつとしている時がないくらい、用の多いからだであつたのに、おまけに人の世話をすることがすきで、よくたのまれては若い者に意見をしたり、家庭のごたごたの仲裁を試みたり、とかくりくつめいた話が多く、どちらかというところの少ない人であつたが、それでいてふしぎに手毬むじようだけを無上むじように愛していた。うちには女の子はひとりもないのに、あまつた木綿糸さえ見ればきつと自分で手毬をかがつて、よその小娘にも

やれば、またうちにも置いたので、わたしたちの玩具箱おもちゃばこには、いつも二つも三つもごろごろしていた。そうして、わたしたちがたまにまついて見たりしていると、そばへ寄ってきて正月でない時にも、自分で上手じょうずにあそんで見せてくれた。しかし母のはいつでも揚げ毬まりのほうであつた。そうして、その歌が村の女の子たちの歌っているのとは、大分だいぶんにちがつていた。それをなんべんも聴きいているうちに、わざは真似ることができなかつたが、歌だけはわたしも大よそ覚えてしまったのである。

明治の御代みよのなかごろに、大和田建樹さんという国文の先生が、日本全国の手毬歌を集めて、大きな本にして出されたことがある。その時にはもう母はいなかったのだが、わたしはこの書物を読んで見るたびに、母を思い出してなつかしかった。そうしていつか一度は「母の手毬歌」というような文章を書いて見たいものと思つていた。母がうたつていた手毬歌は三通りほどあつたが、その中の二つ、

とのは丹波たんばの助三すけさぶさまよ……

というのと、

寺へさしやげててならい手習させて……

という歌とは、文句は少しずつかわつていても、日本の東にも西にもあつた。しかし、もう一つの「鎌倉かまくらの椿つばき」というのだけは、その大和田氏の『歌謡類聚かようるいじゆ』の中にも、またほかの色々な本にも、そっくり同じというものがまだ出ていない。それがわたしには非常に興味深く、今でも感ぜずにはいられないのである。

四、あれ見やれ向う見やれ

母は自分でも娘のころというものが、大へんみじかつたといつてなげ歎いていた。そうであつたろうと思うことは、たしか十四の年に兄ふたりと、つづいて母親とをうしなつて急に家がさびしくなり、父と小さな妹とを世話しつつ、貧しい家計を立てていた。二十歳でわたしの家の人になるまえに、わずか一年ほど藩はんの大きな武家ぶけへ見習奉公みならいほうこうに出て、朋輩ほうばいも多かったということだから、その正月のあそびで学んだのかも知れぬが、多分は

それよりもずっとまえ、まだ十いくつの幸福な小娘こむすめだったところに、こういう手毬歌にむちゆうになつていたことがあるのであろう。ともかくも歌の言葉があまりに古風なものだから、何処どこでもそれを知つていた女たちは皆みんないなくなつて、近年の採集にはもれたものと思われる。

長い歌だから、少しずつ切つて説明をして見よう。片仮名をもちいた部分は特に言葉を長くのばして歌うところである。揚げ手毬あてまりを高く揚げるたびに、文句にも力を入れて時間を合わせるので、それが女の子たちにはこの上もなくおもしろかつたのである。

あれ見イやれむウこう見イやれ

六まい屏風びょうぶにすウごろく

すごろオくに五オばん負けて

二イ度と打つまいかアまくら

鎌かまくウらにまアいるみイちで

つウばき一本見イつけた

屏風^{びょうぶ}とか双六盤^{すいろうばん}とかは、もとは京鎌倉^{きょうかまくら}の家々だけに在^あるもので、ひさしく名はきいて見たことのないという女や子どもが多かった。それが少しずつ田舎^{いなか}へも入ってきた始めには、このような珍らしい、だれでも見たがるものは他^{ほか}にはなかった。それで手毬の唄には、さいしよに傍^{そば}にいる者がこういうことをいって、手毬を揚げる者の眼を、ふと手毬から離れさせて、受けそこなわせようとした、たわむれの言葉であつた。それが後^{のち}にはいつとなく自分でも、そういつてこの遊びをするようになったものらしい。わたしなどの若いころまでは、村に入ってくる遊芸人^{ゆうげいにん}の群れのなかに、品玉^{しなだま}と称して、三つの手毬を高く投げ揚げて、それをたくみに受けて見せる者があつた。それにはかならずひょうげ役^{やく}というのが脇^{わき}にいて、色々おかしいことをいって、その芸をしくじらせようとしたものであつたが、それがこういう女の子の歌にも、伝わっていたものと思われる。とにかくに今ものこっている全国の手毬歌には、これと同じように「あれ見やれ」とか「向う通るは」とかいう文句をもつてはじまり、毬の落ちてくるのを見つめている子の注意を、ほかへ向けさせるようにしたものが多くのである。もとはそういう歌をそばの子供たちがうたつて、囃^{はや}したりはぐらかそうとしたりしたらしいのだが、それにはまた、双六とか六枚屏風とかいうような、珍らしいものの名を出すのがおかしかったものと思われる。古いころの双六

は今ある一枚いちまい刷りの道中どうちゆう双六すごろくなどとはちがつて、碁ごや将棋しょうぎと同じような盤ばんの上の競技であつた。そうしてその遊びをすることを打つといつていた。打つという言葉があるので、大よそこの手毬歌のはじまった時代の、そう新しいものでないことがわかつて来るのである。

五、寺と椿の花

双六すごろくの遊びには、昔の人たちは女でもことのほか熱中したもので、絵にも文学にもそういうことはよく出ている。二度と打つまい鎌倉かまくらというのは、少しく意味がはつきりしないようだが、この歌は全部を二句ずつに切つて、そのおわりの言葉をつぎの句の始めに、くり返すようにしているから、これもそのつぎの鎌倉という語を、引きあげて前のほうへつけたまでであらう。

其そのつうばきだアてのつうばき
御寺おてらへもオててそオだてた

日が照エればすウずみどオころ

あアめが降^ふウればやめどころ

にわか雨をさけて、軒^{のき}の下や大木^{たいぼく}の蔭^{かげ}に、立ちよつて晴間^{はれま}を待つことを、昔の人たちはヤメルといつていた。田舎^{いなか}では今でもそういうかも知れぬが、もう標準語ではヨケルとか何とかいうようになっていいるから、この言葉は古いのである。ダテというのは質素の反対で、今ならば「ぜいたくな」とでもいうところ、すなわち雨が降つても日が照つても、この椿^{つばき}は土地の人たちのように、ほかに出てあるくことはできないというので、椿の花のうつくしいのを、いつのまにか人のように取^{とり}扱^{あつか}っているのである。お寺はもと戦国時代といったところには、よく身分のある人の娘や小さな子の、しばらくあずけられて居るところであつた。寺の庭は広々として掃除がよくとどき、珍らしい花や植木なども多かつたので、椿を人にたとえたということはまだ心づかなくても、これだけを聴^きいても子どもには興味があつた。ただこの歌は二句ずつで話がつぎつぎと移りかわり、切れぎれの小さな絵をならべたようになっていいるので、つづき話を好む今日の人たちには、少しばかり勝手がちがうかも知れない。

古いころの文芸のなかには、こういう形のものがまだ色々あった。連歌^{れんが}というものは殊^{こと}にこれとよく似ている。あるいはこの手毬歌なども、さいしよはもつと長く、もつと連歌というものに近かったのではないかと思うが、母とわたしの覚えていたものでは、この歌はもうこれで切り上げてしまつて、そのあとにまるで縁のない、つぎのような歌がつづいているのであつた。

そのあアめに降りこめらアれて
お茶もいやいや煙草^{たばこ}もいやいや
しよんがいなア、しよんがいな
しよんがい婆^ばアばさん
こオとし九ウ十九でくウまアのへ
よオめりしよとおオしやる……

六、しよんがい婆々

このしよんがい婆ばあさんというあたりから、手毬の手はきゆうに早くなり、歌の調子もまるで變つてくるので、もとは明らかにべつべつのものであった歌を、二つつなぎ合わせたということがわかる。そうして後の方あとの歌は、ずつとおどけていて、子どもでも歌いながら笑うところであつた。シヨンガイナは今のみなさんの「しよが無いな」と同じ意味の言葉で、もう今から三百年もまえの流行唄はやりうたの囃はやしの文句であつた。宮城県などでは、伊達だて政宗さむねにはじまつたという「さんさしぐれか」という歌にもこの囃しがついている。九州のほうでは長崎県の島々にも、また鹿児島県で開聞岳かいもんだけを詠えいじたという「雲の帯してなよなよ」という歌にもこの囃しがあり、さらに南へ行つて沖縄県の八重山群島やえやまぐんとうなどにも、しよんがいをもつておわる哀れな別れの歌があつた。海上の交通が進んだために、一つの節ふしがこれだけ広く弘ひろまつたことはもちろんであるが、なお一方にはまた、ここに出てくる「しよんがい婆ばあ々さん」というような、やや滑稽こつけいなことをいう老女なども、この歌を職業にして地方をあるきまわっていたので、こういう手毬歌が女の子たちのあいだにも、行なわれることになったのかと思う。時代からいうと、鎌倉かまくらへ参路まいみちにというのよりは、また少しばかり後ののちのことだつたろうと思われる。

しいらが（白髪）三^みいすじにたアけエながかアけて

おおくば（奥歯）二^にいまいベエにかねつウけて

こおれでよおいかとお爺^じいさんに問オえば

そおれでよおいよい嫁^{よめ}入しよとらアくじや

やアまをとオおればいイばらかとオめる

かアわをとオおれば船^{せん}頭^{とう}さんがとオめる……

とあつて、そのあとまだ十句ほどつづいたように思うが、わたしはもう忘れてしまつてゐる。

手毬^{じょうず}の上^{じょうず}手^{じょうず}だつた母のような人たちは、そんな長い手毬歌がおわつても、まだ手毬は消えずにいるので、歌を止^やめるか初めへもどることはせずに、それへ勝手にまたべつの歌を、くつつけて歌つたものと思われる。そのためにいつそう歌の心^{こころ}持^{もち}が、脇^{わき}で聴^きく者にはわかりにくくなつてしまつたのである。

このおわりに近い文句のなかで、ラクジャという言葉には説明があるかも知れない。わたしなどの生まれた兵庫県の中部では、もとは東京で「することが出来る」、「してもよ

い」または「さしつかえない」といい、または東北各地で「するによい」という言葉のかわりに、シヨウトラクジャといったものである。他の地方にもまったく無いというほどではないが、わたしの故郷ではいくぶんかこれを使いすぎていた。しかしこの言葉などは、たしかに後^{のち}になつてできたもので、初めてこの手毬歌の生まれたころには、またちがつた言い方をしていたものと思う。事によるとまだ小娘^{こむすめ}であつた私の母や、その友だち仲間^{なかま}などがそう言い始めたくらいがもとであるかもしれぬ。一句一句の感じはよくわかつているものだから、歌の言葉がちつとでも古くさくなると、子どもはこうしてだんだん歌いやすいように改作してきたのかと思う。

七、伝承者ということ

近ごろの童謡^{どうよう}や童詩^{どうし}とはちがつて、手毬歌には見たこともないような遠くの土地を歌ったものがある。もともと空想の美しさを樂しもうとする歌なのだから、京都でも江戸でも、また大阪でも、その住人よりは、むしろまだ来て見たことのない村里の子どものほうが、色々と取りはやし、または少なくとも聴^きいて忘れずにいてくれたのである。もしも

鎌倉かまくらが近いころまでのような、淋さびしいただの田舎いなかになっていたならば、このような手毬歌は生まれようはずがない。だからこの歌のできたころには、まだこの土地が繁昌はんじやうしていて、あるいは今よりもつと花やかな、都についての文化の一中心であったことが考えられる。文部省から出ている『俚謡集りやうしゅう』という本の中には、たしか伊豆半島の物搗ものつき歌うたとして、鎌倉を詠えいじた民謡が三つ四つ出ており、つぎのようなおどけたものもその中にはまじっている。

鎌倉では女がないとて

猿さるに夜麦よむぎをつウかせる

猿が三びき、手杵てきねが三本

どオれも緞子どんすの前掛まえかけで

しかし、伊豆いずならば頼朝よりともの覇府はふにちかく、また北条氏ともふかい関係があつた。そこに昔なつかしい鎌倉の歌が、大事に保存せられていたとしてもふしぎはない。珍らしいと思うのはその鎌倉から、百数十里も西にへだたった、中国地方のある田舎に、いつの間に

かこんな歌がはいっていて、しかもその歌のこしらえかたが、伊豆の物搗歌などとも似通にかようていることである。京都をはじめとし、京と鎌倉との中間地帯にも、おなじ歌はまだ一つも採集せられていないが、東京のしゅういの村々のなかには、この「鎌倉の椿つばき」の歌の断片と見るべきものが、まだ二つ三つはのこり伝わっていた。しかもおたがいにまったくそれを知らず、ただ偶然にわたしが母の歌を記憶していたのだけでも、気がついて見ると一国の文化は、わたしたちの知らぬまに国じゅうに行き通うていたのであった。皆さんもこれから注意ぶかく、だんだんと見たり聞いたりしたことを積みたくわえて行かれるならば、国の昔の交通の跡あとを明らかにし、昔の人の心こころもち持もちをよく理解し、またそれを一いっし生涯ようがい、おぼえていることもらくなのである。

千駄焚き

一、地名のおこり

東京のものとまわりには西南のはしに千駄^{せんた}ガ谷^や、北に片よつて千駄木^{せんたぎ}という町があつて、ともに聞きなれぬ地名だから人が注意している。千駄ガ谷はもと郊外の農村だった。古い地誌^{ちし}にはここは広い野で、萱^{かや}が千駄も蒔れるところから、千駄萱^{せんたがや}といったのが村の名のおこりであろうと書いてある。一駄というのは駄馬^{だば}一頭に背負わせるほどの荷物のことだから、萱はかるいといつても二十貫いじようはある。それが千駄も蒔れたとすれば、大へんな広い野にちがいないが、武蔵^{むさし}・相模^{さがみ}の高原にかけて、それくらいの野は今でもまだ残っている。べつに地名にするほどの珍らしい事実ではなかった。千駄木のほうもその通りで、もとは一軒の家ですら、年に三駄五駄の木を焚^たいていたのだから、薪山^{まきやま}としてはむ

しろちつばけなものであった。

何かこういう地名の生まれるような原因が、ほかにあったのではないかと考えて見ると、日本全国を通じて、いちどに千駄の萱または木を、焚かねばならぬ場合がたった一つだけあった。それは夏の初め、農作にもつとも水の必要なころに、雨がちつとも降らぬと百姓がよわつてしまつて、いろいろ雨乞いあまごの祈禱きとうをする。その最後のものが千駄せんだ焚きだつたのである。通例はこの火は山の頂上のいちばん天に近いところに行つて焚くので、それで雲くも焼きとも雲焙くもあぶりともいう地方もあるのだが、東京の近くはたれも知る通り、一日あるいへ行つても尖とがつた山がない。それゆえに何処かやや広々とした野を見つけて、人がそこに寄つて来てこの大きな火を焚いたものとおもわれる。山の上であつては見に行くことも容易でないが、こういう平地ならば老人も女もゆき、幼い児童もまた連れて行つてもらわれたことであろう。そうして有名になつて、その野が世に知られ、のちのち開墾かいこんせられて村になつてからも、べつに新しい村名を附けるにおよばなかつたであろう。ただ近ごろは東京都の中などに、そういう雨乞いをする村がほとんとないで、どうだろうかと思ふ人があるかもしれぬが、以前ごくふつうであつた風習で、今はもうなくなつたものは、この他ほかにもいくつがある。ことに燃料がだんだん足りなくなると、このような事はせずとも、

ほかにも方法があると思うようになるのはあたりまえで、今はしないということは昔もなかったという証拠にはならぬのである。

二、雨乞いのさまざまの方法

この本を読む人は、ほうぼうの土地で生まれた人、そうでなくとも父や母が、遠くの田舎^{なか}で育ったという人が多かろうと思うから、この風習がけつして一部の地方ばかりのものでないことを明らかにすべく、こんどは成るだけ多くの実例をあげておくことにしよう。

まず名称のほうからいうと、これは千駄焚き、またはセンダキというところが、もつとも多い。しかし名まえだけではなく、じっさいにも木なり萱^{かや}なりを千把^{せんば}は焚^たくので、労力だけとしても容易なことでない。それだから、七日や十日の雨無^{あめな}しには、もつとかんたんな別の方法で雨乞いをするが、それらがどうしても効果なく、いわゆる百計つきたという時になって、思い切つてこの手段に出るのである。田植や夏^{なつもの}物の栽培にたいして、雨^{あめ}がどのくらい大事なものであったかは、こういう雨乞いの方法の何十種というほどもあるのを見てわかる。二十三夜^{にじゅうさんやまち}待^{まち}などとやや似ていたのは、立^{たちまち}待^{まち}といって氏神^{うじがみ}さまの社^{やしろ}

の前に、氏子^{うじこ}が何人か交替して立ちどおしに立っていて、そのあいだ鉦^{かね}を鳴らしつづけること、これは静岡県西部の海近くなどにもある。あるいはまた川の頼待^{せまち}として、谷の流れの上に棚をかけて、その上で神を祭り、または念仏^{とな}を唱えることもあつて、これは土佐の山村にも行なわれている。雨乞いに鉦を打ち太鼓^{たいこ}を鳴らし、それにつれて雨乞^{あまごい}踊^りをもよおすなどは常の例で、そのなかでも変つてゐるのは紀州の岩代^{いわしろ}という村などでは、昔は大きな蟹^{かに}をとらえて踊^{おどり}山^{やま}という山の峰にのぼり、その蟹を中において大いにおどり、それからまたその蟹を持出^{もちだ}して海上はるかの沖の、大きな岩の上におくと、かならず雨が降つたといつてもいる。

あるいは宮や寺の宝物^{ほうもつ}になつてゐる古い仮面^{めん}をかり、釣鐘^{つりがね}をおろし、また路傍の石^い地蔵^{しぞう}のもつとも霊験^{れいげん}のあるというのを、縄^{なわ}でぐるぐる巻きにしたりして、川の淵^{ふち}などの定^きまつた場所へしずめると雨が降るというのも多かつた。山口県の北の海岸部には、蛇^じ籠^{やかご}の祈祷^{きととう}といつて、蛇^{じゃ}を竹籠^{しや}のなかに入れて、水の底にしずめるといふ方法もあつた。もつと気味のわるい方法としては、ふだんは見ることもない牛や馬の首をきつたのを、あゝる神聖なる滝^{たき}の滝壺^{つぼ}へしずめに行くといふなども、わたしの子どもころまではあつた。これらは汚^{きた}ないことのお嫌^{きら}いな水の神を怒^{いか}らせて、大いに暴^{あば}れていただくという趣意^{しゆい}らし

く、もちろん日本に昔からあったまじないではない。そのほか硯すずり洗あらいといって家々から硯を出させ、それを一日に洗ってしまうもの、または百榼ひやくます洗あらいといって榼を数多くあつめてきて、水の神の祭つてある池で洗うというものもあつたが、雨が人間の力では自由に降らすことのできぬものであるゆえに、こうでもしたならばという試みがいろいろと考えられ、それがまた偶然に、たしかに効目ききめがあるという経験にもなっていたのである。

三、雨たもれの松明行列

千駄焚きは、いよいよそういういろいろの手段がみな無効におわり、もはやしんぼうがでないというときになって、村が大きな決意をもつて取りかかる方法となっていたが、燃料がまだゆたかで、また人の手にもあまりがあつた時代には、あるいはもつと手がるに、そういうくわだてをしたかも知れない。近いころまで、それがまだ残つていたのは、東北では岩手県とほのの遠野地方などは千駄木せんだぎ、西のほうでは長崎県しものとうひさかじまの下五島久賀島、佐賀県ではきゆうらぎ厳木の山村、大分県でも玖珠郡くすくんの村々などにこの雨乞いがあり、それをセンダキというのもあるが、これらは千駄木ではなく「千焚せんたき」であつたかもしれない。数は千とい

ほど多くても、もう束^{たば}がずっと小さく、したがってまたこれを千把焚^{せんぱた}き、もしくは千ばえ焚^{なかと}きというところが多いのである。

長門^{ながと}の見島^{みしま}という島などは、畠^{はたけ}ばかりの島だから、麦^{むぎ}稈^{わら}を千把、岡の上へもって行って焚^{なかと}き、これを千把焚^{せんぱた}きといっている。佐渡^{さど}の島などは薪^{まき}を千把、山の頂上で燃やす雨乞^{あまがひ}いがあつて、それを千把焚^{せんぱた}きといっていた。信州^{しんしゅう}は山^{やま}国^{くに}でも、もう薪^{まき}の少なくなった地方の一つだが、それでも各郡にこの千駄焚^{せんぱた}きという語はのこつていて、じつさいはただほうぼうの家から、松の枝などを持ちより、大きな火を山の上で焚^{なかと}きだけである。千駄^{せんぱた}というような莫^{ばく}大^{だい}な萱^{いんげん}や木を、集めて焚^{なかと}いたのは遠い昔のことで、今ではただ藁^{わら}や篠^{しの}雑^{ぞう}木^きなどの松^{たいまつ}明^{まつ}を多く背負^おつて、山に登^{のぼ}つてゆくのが通例のようになり、また炬^{たいまつ}火^{まつ}だから夜にはいると、とちゅうからでも火を点^{とも}して、行列をつくつて頂上に到着すると、その残り^{ひと}のものを一^{ひと}ところに集めて、焚^{なかと}いてかえるのが雨乞^{あまがひ}いになつてしまった。わたしなどの故郷では、夏のなかばの真^ま暗^{くら}な晩に、この炬火^{たいまつ}の長い行列をながめるのは、虫送りとともに美しい見ものであつた。あの二つのちがうのは、虫送りは田の中だけを廻^{めぐ}つて早くかえつてくるが、雨乞^{あまがひ}いのほうはだんだんに高くへ登^{のぼ}り、また隣の村々の火も遠くから見えたのしみは長かつたかわりに、虫送りのように、毎年ひんぴんとは実行せられなかった。

そうしておこりは一つにちがいないのだが、これはもう千焚きとも千把焚きとも、わたしの村ではいわぬようになっていたのである。昔の千駄焚きの壮観にくらべると、いくら美しくとも、これは事が小さく、思い切った手段ともいえないのであるが、しかも土地の人々は、このために祈願の力が弱くなったとは思わず、ついこのごろまで必死の場合には、この方法によるほかはないと考えていたのは、わたしには深い理由があることと思われる。それを一言^{いちごん}でいうならば、村の総員が心をあわせて、ぜひとも雨を得ようと協力することは、燃料の分量とは関係なく、昔も今も同じことだったからである。

四、村の協同

これについて思い合わされる一つの事実は、以前は越後^{えちご}では好いおしめりをもとめるために、田植のはじめ苗代^{なわしろ}のおわりころに、農^{のう}やすみの日が何日かあった。早朝に氏神^{うじがみ}さまにおまいりして、しばらくすわっているくらいがその日の勤めであって、なにも積極的に働く用はなかったらしいのだが、それでもなお、この日業^{ぎよう}を休まずに、常の仕事をしている者はひじょうに憎まれた。そういうことをする者が一人でもあると、夕立雲^{ゆうだちぐも}がお

こり雷^{かみなり}が鳴り出しても、その村だけは降らずにすぎて行くともいって、憎むというよりもむしろ怖^{おそ}れた。ただの噂^{うわさ}話^{ばなし}だったかも知れぬが、そういう不心得^{ふこころえ}な者の家には、村の若い衆たちがやってきて、屋根の萱をひきはいだものだそう。雨が降らずともよいのなら、この家に屋根は無用だろうといったともいうが、じつはこのあたりの農家はユイ組としようして、村人の協力をもつて屋根を葺^ふいていたから、そういうことも言えるのであった。雇われて働く人々にとっては、休みは一つの権利だったか知らぬが、自分の身をつかつている独立の農民には、それがまた大きな義務でもあったのである。少し手のたりないよく稼^{かせ}ぐ夫婦者などは、休みたいのは人とかわらぬが、ここでもひと区切りはかを行かせておくと、あとがつごうが好いのだがと思うことがしばしばあった。それで人の目をしてんで働いていることもあり、またそれを見つけて憎みおびやかす者もあったのである。

すなわち方式はのちにいろいろと変ってきたけれども、雨乞いもまた一つの臨時の祭りだったのである。村によつてはこの日村の神社に参集し、または一夜を拝殿のなかに明かすところもまだ多い。それを神職または重^{おも}だつた氏子^{うじこ}にまかせた場合でも、なお一同はめいめいの家に引きこもつて、つつしみの日を送らなければならなかったので、この日に常の仕事をしてはならぬというのも、古来の物忌^{ものい}みの一つの形であつたことが明らかである。

沖繩の島には、ハブという毒蛇がもとは多く、そのなかで金ハブ銀ハブというのはことに
おそろしかつたのに、島の人はそれを神さまのお使のように思っていた。どういふ人がこ
のハブに咬まれるかと聴^きいて見ると、主としてウマツリ（お祭）の日に休まず働^いいていた
者が、咬まれるというのは意外な話である。神様はただそう多数の人が合同して禱^{いの}るなら
ば、助けてやらざるまいとおぼしめしただけでなく、その合同に加担せぬ者を、お怒^{いか}
りなされるとまで信じていた人があるのである。そうしてそれがまた、古くからのお約束
でもあったかと思う。一族一村の住民のなかに、一人でもちがった感じをいだき、すべき
ことをせぬ者があるとする、たつたそれだけのためにも公共の願^いい事が、かなわぬ場合
があるかも知れぬと、古風な人々は気にしたのであった。もちろんそのためには最初から、
人心の一致を望まれぬような、小さな祈願の祭りは計画することはできなかった、そ
れで日本の神さまはいたっておおまかな、公けの大事^{おおや}にしか関与なされなかったのである。
多数の人々がともどもに熱心になつて願^いうことを、援助なされるのがわれわれの神さまで
あった。少なくとも古い人たちはそう信じていた。

五、敬神という意味

しかし皆さんは、まだそういうことを考えて見る役ではない。ただ遠からずこれを決定する人となったときのために、今のうちからもつと多くの事実を、覚えておく必要があるだけである。それがおもしろくもなんともない事柄だったら、おぼえているのもご苦労なわけであるが、村ではこういうことが珍らしくまた新らしいものであり、村にはいつていと見まい聞くまいとしても、気がつかずにいられぬことばかりなのである。そうしてまたこういうことをよく理解するのが、土地に住む人々と、心をひとつにする途^{みち}なのだから、まことに好^よい機会だと思つてよいのである。

村の祭りに一人の例外もなく協力し得るということは、もう大分^{だいぶん}ひさしい前から望み^うがたいことになつてゐる。今日は氏^{うじ}神^{かみ}氏^{うじ}子の範圍がひろげられ、その地に生まれた者はみな、氏神の子と呼ばれているけれども、なお家々のお嫁さんいがいにも、よそで生まれた人が数多くはいつて住んでおり、それが何年住めば氏子になるというきまりもなく、また皆さんのように今に還^{かえ}つてしまふことのわかつてゐる人もたくさんゐる。人の願^{ねが}いごとがみな一致するということも、またそう多くの人^{ひと}が一致して願^{ねが}い望^{のぞ}むようなことも、だんだんと少なくなつてきた。それで第二段の私たちの努力としては、そういうなかでもできる

かぎり多くの人数を協力させること、さらにまた、わたしなどのように、遠くに住んでいる、めったにそんな祈願に出あわなくても、なお村の人の心持^{こころもち}だけはよく解^{わか}っているという者を、これでもできるだけ多くすることが考えられるのである。

この二つの中の第一のほうは、しいて引っぱりこんでも、じつはねうちが少ない。これに反して、後のほうは、わたしたちの注意によりまた理解によって、まだまだうんと進めることができそうなのである。非常時になるとはじめて顕^{あら}われるような女の人たちの心掛けのように、今まで知りようのなかったものは是非がないが、何によらず田舎^{いなか}の事といえ、ただむつかしくて、説明のしようもないようにきめていた人が多かったのは不注意な話である。

だから、皆さんは先ず最初に敬神^まということとは、たとえばどういうのかを注意して見るとよい。これは皇室をはじめ奉^{たてまつ}り、下々^{しもしも}としても大事なことで、これをどうだつてよいと思っている者はあり得ない。ところが文字のほうから物を学ぶ人たちは、これをただ神のお社^{やしろ}を敬うことだとばかり思つて、お社^{やしろ}いがいの祭りは振り向いて見ようとしないのみか、氏子がめいめいの神さまを拝む心持が、どのようなかをさえも考えようとはしない。敬神という言葉は大昔から、いろいろの書いたものに用いられているが、

それを見くらべてもはつきりとわかるように、神を敬うのはもとほありがたいと思うから、また多くの者がありがたがっていることをよく知っているからであつた。そうしてこのありがたいは、ただの感謝とはちがうのである。そのはじめの心持は、ありがたいという言葉葉がしめす通り、ほかにはまったくあり得ないもの、人間の思慮のおよばぬところということであつた。それを数千年間の経験だけによつて、知つてよく覺えているのが信心というものであつた。自分ではもう信心をすることのできぬ者があつても、これはいたしかたがない。ただ人の信心をかるんじたり、または何でもないことのように思つて、深い奥底のあることを認めようとせぬだけはあやまつている。

六、千燈籠と千本幟

人が多くの同志者と共に、同じ祭りをつかえまつる心づよさは、今では田舎いなかの住人じゆうにんばかりがよく知つていて、都会ではだんだんとわからなくなりにかけている。田舎では土地にただ一つの神のお社の祭典やしろに、不熱心な者のあるのをきらうのみでなく、どうしてもその統一が保ちがたいと感じはじめると、べつに少数の仲間だけで申しあわせて、庚申かのさるのゝね甲子

等のいろいろの講、あるいは二十三夜講のようなものを組織し、また継続して、その講中だけは一人も脱け落ちず、我人おなじ心に信心をやしなうて行こうとしているのである。都会もそのひつようは田舎よりは大きいのだから、以前はこの講がことに盛んだったのだが、何分各人の願い望みがまちまちであるために、今では名ばかりのこつて、一年にどの物詣りにつき合うだけ、またはほうぼうから集まってくるのみで、あの人はいったいどんな心願があるのだろうか、たがいに知らぬ者が、ただおりおり顔を合わせるこゝとなつてゐる。その結果としては祈願がますます小さく、またはなはだしく公けでない、身勝手なものになつてしまつたのである。

そうしてその以前の痕跡だけは、まだかすかに残つてゐるのである。たとえば町でも年一どの大祭の日だけは、軒なみにそろいの提灯を入口へ下げさせる。これは雨乞いの岳登りに、百炬火、千束柴を持つて出たのと同じものにちがいないのだが、今では美観が主になつて、何のわけもわからずに、ただ祭りの景気だの、お祭り気分だのという人ばかり多い。昔も平重盛が千の燈籠をとまさせて、燈籠の大臣と呼ばれたという話のように、一人の資力によつてたくさんの人を使い、何か自分だけの心願のために、数の燈火を神にあげるといふところもあるが、もとはこれも土地土地の協同であつた。肥

前五島ぜんごとうの小値賀島おちかの千燈籠などは、これもまた一部落の雨乞いのためであつて、今は子どもが主になつて岡の上で大きな火を焚き、あとでそれを松明たいまつにうつして下ってくるのであつた。各戸が協力し、またどういふことが願わしいのかを、はつきりと胸に持っているものでなければ、この大がかりな願望もじつはただの慰みにすぎぬのであつたが、それまで考えている者は、はたして町にもあるかどうか、よつぽど不確かなものになっている。それからまた東京の附近などにも、つい近ごろまでは千本幟せんぼんのぼりといふものがあつた。半紙はんしを八つほどに剪つたのを糊のりで竹のくしに貼りつけ、それに拝みに行く神さまの名と月日などを書いて、参詣路さんけいみちの左右に刺すもので、ひと目でその神の信者の多いことがわかり、いわゆる景氣のよいものではあるが、その代りには祭りの幟のぼりとは似ても似つかない、そまつな簡略な紙の小幟このぼりばかりであつた。これも現在は平重盛の千燈籠のように、ただひとりの者が、なにか願掛けがんかをするときに、そういう約束を神さまにむかつてする者が多くなっているようだが、村々のほうでは、もとは千度参りせんどもいと称して、たくさんの人が言いあわせて、新たなる大きい祈願をする時だけ立てたもので、千人がそろふということはいふつかしくとも、できるだけは一村各家から総出そうでをして、一どに一本ずつ持ってきて立てるのが本意であつた。時とわずかな費用とさえかければ、一人でならば何時なんどきだつてこう

いう事はできる。ただそれが神さまのおぼしめしにもかかうと思つたのは、言わばやや勘^か定^{んじよう}ずくな、いやしい、また新らしい迷信だつたことは否めないのである。

七、祭礼と幟

幟^{のぼり}は夏の初め秋のなかば、村にはいつて行く者の氣づかずにはいられない、もつともさわやかなところよい印象をあたるよい見ものであるが、これを祭りの日に立てるようになったおこりは、まだ考えて見た人がないらしい。わたしの意見では、さいしょ一つの高い木の柱を立てる習慣があつて、夜はそのでつぺんで火をともし、昼はまた目じるしの白い布をつけたのが、のちのちあの大きな二幅^{はふ}三幅^{さんぷ}の豎^{たて}旗^{はた}となり、その布の上に天下^{てんか}太平^{たいへい}だの、国土^{こくど}安全^{あんぜん}だのの文字を書くことになってから、それがよく読めるように、片がわに乳^ちをつけ綱をとおし、ついにいま見る形になつたものと思われる。近ごろはそとに出た人の家の前などに、何本となく立てる風習もはじまつたが、もともとは定まつた場所に、一本または二本ならんで立つのがきまりで、たぶんは神前の幣^{へい}串^{くし}とおなじく、これを中心に祭る人々のところを、統一せしめるのが趣意であつたのである。それを千本幟の

ように数ばかり多く、ちようど千駄焚きが炬火にかわったごとく、めいめいべつべつに持つものにしたことが、すでに変遷であつた。まして一人の手でこのようなことをするのは、ただ外観のためとしか思われない。それをお喜びなされるのは、昔からの神とはいふことができない。人の心の集合と統一とが、こんなものからはほとんど期し得られぬからである。

ところが田舎のほうには、これよりもひとつ前に、日ひのほり幟しほさんといって、ただ一本の大きな幟を、多くの村人が集まつてきて、一日のうちに作つて立てるならわしがあつた。伯耆うきの大山だいせんの麓ふもとの村里などでは、その日は正月下旬のある一日、または秋の収穫がすんでからのちに、一日のうちに木綿もめん綿わたから糸を引き、機はたにこしらえて織りあげたものを、ただちに村はずれの路傍みちばたにもつて行つて幟に立てた。それは容易なことではないためだろうが、近年は糸だけは前もつてしたくし、機はたこしらえからはじめる村もあり、または綿布までよそで買ひととのえて置いて、幟に縫うことからはじめる村さえできたということである。佐賀県の綾部八幡あやべはちまんというお社やしろには、もとは六月十五日、今は七月のおなじ日に、旗はたあ上げ旗はたあろ下しという神事がある。古来十三歳になる女の子をひとりきめて、一日のうち

にその旗の麻を織つて旗に仕あげさせ、これを日旗ひばたと呼んでいた。十三歳の者でなくとも、

ひとりの娘の子にはそれはむつかしい事であつた。ゆえに物なれた老女が世話をやり、今ではまた老女にたのんで織つてもらうようになつてゐる。この旗は、ふつうの幟よりも小さいものらしいが、それにしてもこの一日仕事に参与する者は、とてもひとりの老女だけではすむまいと思う。越後の七ふしぎの一つなる弘智法印の寺などでも、毎年四月八日の御衣おころもがえという日に、もとは海べ七浦の姥子うばこたち、おのおの一つかみずつの苧おを持ちよつて、一日のうちに紡み績つむぎ織り縫つて、法印の像に着せ申したのを、日中機ひじゅうばたといつたということが、二百何十年かまえの『行脚文集あんぎやぶんしゅう』に見えている。今ではもうやめているかも知れぬが、これなどもおこりだけはこの日幟ひじゅうばたさんと同じものであつた。

八、日中機

この協同はだんだんと形をかえて、今ではひとりの願いごとを助けるような習わしになろうとしている。たとえば同じ日中機ひじゅうばたでも、壹岐いぎの島でそういうのは、ある家の幼児ちのみの乳呑歯ちのみはが下のほうから生えずに上から生えるのを、よくないことと恐れ、これには七なな機はた一いっ反たんの着物を着せるか、またはこの日中機を織つて着せなければならぬといつてゐる。

七機一反はむつかしい言葉だが、七カ所の機で織った布をもらいあつめ、それを継ぎあわせて着物に縫うことで、これをまたナナトコギレともいい、そういう着物を着せて子どもが丈夫にそだつという地方に多く、それとおなじにまた七軒もらいとしようして、七戸の家から米をすこしずつもらつてきて、粥に炊いて食べると、夏負をせぬとも、あるいは病いがなおるともいい、あるいは七雑炊といつて、正月七日の午前、七つになる児をつれて七軒をまわり、この日の雑炊を少しずつ乞い受けて食べさせると、丈夫な児になると信じて、今でもそうしているところが多い。七つはただ好い数というまでで、つまりはこうして多くの力を集めることが、本人の身の上にたのもしい効果をおよぼすということを経験して、村に住む人たちが久しいあいだ、たがいに助け合つていた点は皆にている。その七機一反のかわりになるのだから、日中機のほうもまた多くの親しい女たちが集まつて、綜たり織ったり縫ったりすることを、手つだつていたにちがいないのである。

九州でも宮崎県の西南部、霧島山麓の村々などでは、こういう場合に織つて着せる布を、ヒゲノノと呼んでいる。これも近所の女たちがよつてきて、一日のうちに機にかけて織つて縫つて、その児に着せたのち、それを藁人形に着せたまま川に流したりする。ヒゲノノというのは日返り布、すなわち一日のうちに織つて縫つて着せて、流してしまう

からそういうのかもしれないが、壱岐いぎから遠くない五島ごとうの島々が、日返り機ひがえはたというのなどは、流すというのではなくて、やはり一日のうちに織つて縫つて着せる。そうして逆齒さかばの生えるみどり児ごの全部でなく、丙午ひのえうまの年に生まれた児にそうするといい、または赤ん坊が夜なきをしてこまるときにも、この日返り機を織つて着せる村があつた。最初はかならずしも一つの場合にかぎらず、なにか気になるようなことのあるさいは、こういう着物を着せて神をおがませたのではないかと思う。

これらはいずれもぜひ一日のうちに、こしらえ上げねばならぬものではないのだから、むしろ衆人の力を集めているという点に、なにかわたしたちの、もう忘れた大きな意味があつたのである。今日こんにちでは人はそう毎日たのめないから、一日で片づけようとするのだと解する者も多かるうが、屋根も一日で葺ふき、味噌みそも一日で仕込むしこのみならず、蚊帳かやなどもかならず一日で縫つてしまふべきものと、きめている家が京大阪にもある。香川県のある村では、お産の前に死んだ若い婦人のために、洗いざらしという五、六尺の布切れぬのぎを、路みちのそばの地蔵さんの前などに張つておいて、通行の人に水をそそぎかけてもらふことは、ほかの地方も同じであるが、この布をまた一夜機いちやばたとして、朝から糸を繰くり機に立てて織ることにしている。鹿児島県南海の奄美大島あまみおおしまでは、十三歳になる女の子には十

三 袴さんかはま といつて、叔母おばさんから赤い腰巻をやることになっている。これも全国どこにもあることだが、この島のは特に一日のうちに織つて染めて縫つてやることになっていた。すなわち、その叔母さんも一人だけではできぬことなのである。

九、子どもの欲しい家

旗のぼりや幟のぼりについて、なお二つ三つのかわつた話をわたしは知っている。一つは鳥取県のある山村だけで聴きいたことだが、蓆むしろ旗はたといつて五月の節供せつくのまえの晩、子どもが欲しいのに産むまれないうち家むしろの前に、若者連わかものれんじゅう中なかつがこつそりとやってきて、きまつた方式むしろのとおり蓆むしろの旗を立てるときつと子どもができる。その家の者が知つていてはききめがない。その方式というのは、まずこの家より上のほうに男の児をもつた家の屋むねの棟なわに繩むねをゆわえつけ、つぎにその繩うしがみを氏神うぢがみさんの社やしろに引き、さらに子どものほしい家の外庭そとにわまで引いてきて、蓆旗さおを立てた竿さおのさきにむすびつないでおくのである。繩むねがとちゅうで地についたり、切れたりしてはいけないうち。またこの法によつて男の子の生まれた家からは、繩むねを引いてこぬという。繩むねと蓆むしろはあとでこの家がもらい受けるというが、ともかくも相応

の長い縄がいるであろうのに、それを当人たちには知らせずに、ひそかに用意をするというのは大きな好意であり、それをまた、うじがみしや氏神社につなぐというのも、信心の一つのあらわれであつた。村に丈夫じやうぶな男の子の増加することは、神さまばかりか村民にも望ましいことで、いぜんには東北地方で年切りねんきという行事のように、果樹をたたいて千なれ万なれと、とな唱えごことをしていた正月十五日の晩、同時に若い嫁たちのお尻を、産めうめといって、打つまじないもあつたというが、今ではもうたのまれもせぬのに、そんな事までする者は村にもおらぬであろう。しかし村がまだ淋さびしく弱かつたころには、時をちがえてたがいにこういう助け合いをするまでに、村の人たちの団結心はつよかつたのである。

それからもう一つ、信州の南部から美濃みののほうにかけて、つい近いころまで、送り旗というおもしろい風習があつた。これは旗とはいふが幟やしろのことらしく、人がある遠くのお社やしろを信仰して、幟を一つさしあげたいが参詣さんけいに行かれぬという場合に、それを作りあげて何里かは自分で持ちはこび、路のかたわらに立てかけてもどつてくる。そうすると通行人のなかから、荷物はなくて信心しんこうの志のある者が、二里でも三里でもお社の方角へ送つて行くのである。その協力がつもりもつて、しまいには志したところまでとどいたというのは、たれがしたとも知れないだけに、まことにゆかしい我わが邦くにの美風であつた。あるいは

また地蔵送りといって、石の地蔵を造つて、この方法で遠くへはこぶことが、一時はやつたという話もある。これなどは荷馬車が多くなつた時代に、主として馬^{うま}方^{かた}が篤志^{とくし}ではこんだといふことで、これにもやはり行くさきが書いてあるのを、読める人がもう多くなつたお蔭^{かげ}であつた。わたしなども今から二十年ほどまえに、奈良の二月堂^{にがつどう}に献上するといふ青竹^{たば}の束^{たば}が、あの交通の多い街道の片脇^{かたわき}に、いくらかがしてあるのを見たことがある。川すじや海の上では材木に大きく伊勢^{いせ}木^ぎと書いて、山から流したものがよく浮いている。あるいは酒樽^{さかだる}に奉納^{ほうのうすみよしだいみょうじん}住吉大明神^{みずか}、または金毘羅^{こんびらだいごんげんほうぜん}大権現^{だいごんげん}宝前^{ほうぜん}と書いたのを、海で船頭がひろい上げることもある。いずれも自ら行けない信心者が、おなじ志の者の多いことを信じて、だれともなしにたのみを掛けるので、人ともどもに神を祭ることを、大きな力と思つていた社会でないと、じつさいは思い切つてやれぬことであつた。

一〇、神社合祀

この協同の信心といふことは、もとは村かぎりの小さい氏^{うじ}神^{がみ}の社^{やしろ}において生まれ、後^{のち}においおいと国の大神^{おおかみ}の、たがい知らぬ信徒のあいだにも拡^{ひろ}がったものと思うのだが、

それにしては、その本元ほんもとの村や大字おおあざにおいて、やや結合のゆるみ始めたのが、少し早過ぎるように思われるのは残念である。しかし、そうなった原因には、同情しなければならぬ点がいくつもある。その一つは、村で産土うぶすなとも、また氏神ともいうお社がきゆうに大きくなつてきて、これをお祭り申す人員が増加し、なかまがいくぶんか雑駁ざつぱくになつたことである。それはかならずしも明治の御代みよのおわりに近く、政府の手で行なわれた神じんじ社合祀やごうしによつて、始まつたことではない。がんらい産土うぶすなというのはもとどころ（本居ほんきよ）、自分の生まれた土地というだけの意味であつて、そこには氏うじごとに、一族ごとに、それぞれがちがつた氏神を祭つていたのを、故郷ふるさとが一つで共に出て働いておりながら、めいめいその本居の神がちがうのはこまるという考えがおこつて、だんだんとこれを一つにするほうへ進んできたものらしい。村にとどまつている人々の中でも、隣の氏神祭りは、人数が多くて、にぎわしく楽しそうなのに、こちらは集まる者がすくなくて心ぼそいという感じがして、時によつては合同してもう一つあらたに御社を建てた。たとえば近くに有力な寺などがあつて、そこに祭つている鎮守ちんじゆの神の祭りに、住民が参加することになつたなどはそれであり、また外ほかからきた人に勧められて、とおくの尊おおかみとい大神をお迎え申したのもそれであつた。しかしそういうことはしなくとも、村はおのずから産土さまとし

て共同に祭つてもよい大きな氏神が一つあったのである。我邦では、どんな小さな部落でも、大ていは三つ五つの氏が連合して住んでいる。そうしてたがいに縁組をして、血のつながりは、かえつて一門よりも濃くなつたものが多い。こういう人たちが相談をして、村にただ一つの大きな神社を維持しようということになつたのだから、話はまとまりやすかつたはずである。書いたものにはなっていないくとも、この歴史はまだ記憶する者がある。いくつかある氏々の氏神の中でも、いちばん家数^{いえかず}が多く、またしつかりとした人のいる氏の神さまを立てて、そこを中心の神社とし、一同がそこで同じ日に祭りをするることになつてゐるのがふつうのようで、もとよりそのためにほかの氏々の神を廃したのではなく、みんなその場処^{ばしょ}に集めたものと解してゐたのではあろうが、こうなつてくるとそれぞれの氏族の、慣例や利害の差がすこしずつ現われて、古来定まつた常の祭りのほかは、おりおりは一同の一致することのできぬ場合が生ずることをまぬかれなかつたのである。

氏を同じくする一族の結合を、今日ではマキという地方が多いが、そのマキの内でも、気持のちがうことはまったく無いとは言えないが、その総本家^{そうほんけ}の権能はひじょうに古くからのもので、これに楯突^{たてつ}くことは世間からも許さないが、多くの氏々の連合にはそういう中心の力がよわい。それを統一するためにまわり神主^{かんぬし}、または宮座頭屋^{みやざとうや}というかたい

約束がむすばれ、あるいは世襲神職の家筋というものが定められたのであるが、これがまた二つとも、あたらしい時代になって取りつづけて行かれない事情があらわれた。外からきて一時寄留する人の多いためでなく、村のなかでも大分まえから、この点についてはいさしこまっていたのである。

一一、個人祈願ということ

わたしたちのいう個人祈願、一人かぎりの願いごとを神さまに申しあげることが、日本の神道にもはじまつてきたのはこの結果であつた。仏法のほうでも国家のため、または少なくとも一つの郷土のために、祈願をするのがふるい教えであつたのだが、中古以来そのほうはすたれてしまつて、ただ誰かのために何事かを禱るものばかり多くなつていた。それを朝晩見なれているのだから、神のお社に向かつて一人願いをするのも、格別あやしいこととは思わなかつたけれども、これは我邦の昔の世にはないことであり、おそらくは神さまにも御意外なことであつたろう。神仏のさかい目というものが、このためにいよいよはつきりとしなくなつた。村では毎日のように参詣をしにくる人、そうでなくとも

月の三日は、かかさず社頭を拝する人と、例祭の日のほかは一ぺんも顔を出さず、または祭りにすらいそがしいと出てこぬ者があるようになり、家々としても老人か主婦かが代表して、一人はかならず参っている家と、まったく知らぬ顔をしているのができて、神かみし信心しんじんの差等が日に増しいちじるしくなってきた。そういう冷淡な人と仲間になつて、祭りをいとなんでも心願しんがんがかなうだろうかと、あやぶむ者の多くなつたのも自然である。そこで一村のなかにもまた特に敬神の念の深い者ばかりの、共同ということがはじまつてきた。神社が合祀ごうしせられ氏子うじこが多くなると、そういう小さい団体はかずを増して、たがいに相手の心持こころもちが通ぜず、思いおもいなことをするようになったのである。

信心という言葉の意味が、これにともなつてだんだんと變つてきて、のちにはかえつて迷いの多い者、大小さまざまの村の外の神々にも、または神にも仏にも、そちこち、わずかずつ祈願をかけてあるくような者を、信心深い人ということになつたのは、考えて見るとへんな話である。もちろんそういう人は外ほかからは笑われる。そうして神信心という言葉までが、そのためにかかるがしく見られるようになったのは悲しいことであつた。しかし村には決してそういう新しい信心者ばかりがいるわけでない。今でもまだ人のもつとも大きな災厄さいやく危難きなんをすくつてくださるのは先祖代々いつの世からとも知れず、お祭りもう

している村の神さまよりほかにはないということを、信じてうたがわぬ者は半数以上で、それあるがために、国に大きな事件のあるさいにも、なお国民は向うところを失わずにいられたのである。神のご威力とおぼしめしとを信ずるのは、理論ではなくして経験であった。親々がみずから体験して、それを最愛の子や孫に語りついだものがよく記憶せられ、その方式のとおりに今も祭りをしてさえいれば、いつでも、わたしたちは安心していることができる。これに反して少しでも、以前の条件とはちがっていることに気がつく、口には出さずともそれが不安の種^{たね}になって、何かその代りになる補充になるものを探し出そうとする。小さな色々の堂^{どう}や祠^{ほこら}、またはあたらしい講や教団の現われたのもまったくそのためであつた。

一一一、千垢離

たつた一軒の家のうれしいや悩みでも、それが村人のひとりであるかぎり、けつして神さまは打ち棄^すてて置かれなかつたことは、まえに紹介しておいた^{むしろばた}蓆^{うしがみしゃ}旗^{さかば}の繩を、氏神社から子の欲しい家へ、引いてきているのを見てもわかり、または逆齒^{さかば}の生えた幼児のため

に、村の人が集まつて日中機ひじゅうばたを織るのを見てもかんがえられる。こういう信心のもつとも明らかにあらわれているのは、村で大事な氏子うじこが大たい病びょうにかかつて命のあやういときに、多くの人が出て祈願をする千度参りせんどもい、または数参りかずまい、度参りたびまいともいうものであるが、これなども最初はもつとひろく、村に何事か大きな憂うれい事がある場合、ことに五月六月におしめりがなくて、田が植えられなくて苦しむときなどのほうが多かった。女や子どもまでを加えても、村では千人という人はなかなかそろわない。たぶんはめいめいが二度も三度も、かえつてはまたお参りに行くので、千というのは精確でなくとも、じつさいは千度せんたびよりも多く、一日の内に神さまの前に出て、口々に同じ言葉を申しあげて、神さまを動かそうとしたことと思う。わたしたちが見てさえ感動せずにはいられないのは、漁船が沖へ出ているのに暴風雨が起こつて、船がつぎの日までも帰つてこぬ場合などに、母とか妻とか姉妹とか小さな児童などがあつまつて、この千度参りせんどもいをするありさまである。隠岐島おきのしまの海士村あまむらなどでは、この日の祈願にさきだつて、浜の小石を千個だけひろいよせて、めいめいがそれを一つずつ手に持つて、お参りしては拝殿はいでんに置いてくるそうである。人がこれだけ一心になると、たとえば船がよその港ににげこみ、または嵐と入れちがつて無事に帰つてきたとすれば、それを千度参りの力だと思い、また神さまのお助けと信ぜず

にはいられなかつたはずである。

そうしてこの浜の小石というのは、本来はただの数取り^{かずと}ではなかつたのである。すなわち海の潮^{うしお}をもつて、まず身と心を潔^{きよ}くしてから、祈りを神に申すという意味があつた。海から遠くはなれた山奥の村々でも、雨乞いその他の切なる願いがある場合に、やはり川の流れにひたつて一つずつ小石をひろい、それを手に持つてぬれたままで参^{まゐ}ることが多い。それを千度垢離^{せんどごり}とも千願垢離^{せんがんごり}ともいうのは、多くの人がかわわり、また数多く参^{まゐ}るからでもあるが、もとは瀬垢離^{せごり}であつたと見えて、これをまたセンゴリという村も少なくない。三河^{みかわ}の山村ではこういうさいに、七カ所で水を浴びるので七瀬垢離^{ななせごり}といい、遠州^{けたかわ}の気多川^{きたがわ}すじではまた五十瀬百瀬などといって、だんだん上流のほうへ場所を変えて、水垢離^{みずごり}を取つてお参りをする者もあるということである。垢離^{ごり}を取るといふのは妙な言葉で、どうしてこんな文字を書くのか、まだはつきりとしていないが、ともかくも以前は神を拝する人々が、いずれも全身に水を浴びてから、はじめて神前に近づくのがふつうであつた。今でも古いお社のそばには御手洗川^{みたらしがわ}が流れており、またそれをもっとも簡略にしたのが、多くの社頭に見られる銅や石の手水鉢^{ちようずばち}である。近ごろではここで手を洗わぬ人さえ多くなり、いわゆる垢離もいっぱんに手がるになつてしまつたが、なお特別の切なる祈願だけには、

真冬まふゆでもこれをしている人があるのである。

一三、見舞参り

村々の年をとった女の人たちが、わが子わが夫おつとの安否を気づかうのあまり、ふたたび昔の本式の潔斎けっさいをしている者は、近いころは非常に多くなっていたようであるが、土地の住民が集まってきて、同じ神さまに共同の祈願をするために、千垢離せんごりをとる場合はだいたいに少なくなった。そうしてふしぎにただ一つだけが、まだほうぼうに残っている。それはある一軒の家に重い病人がある場合で、これには身内みうちや出入の者だけでなく、組合または部落総体から、一戸一人ずつがでて千度詣せんどまいりをする風習が、しばしばこの千垢離をともなっているのである。これを見舞参りみまいまいというところもあるのを見れば、今では半分は世の中の義理、前には自分の家も同じようにして助けられたとか、いつかは此方こちらもそうした世話になるのだからとか、村の附合つきあいということが根になつているのだろうが、これが氏神の御心になつて、危篤な病人を恢復かいふくさせる力になるという事を信じていなかったら、単なる社交だけでは、これまでの協力をなしあう者はなかったらうと思う。つまりは

願い事があまりにむつかしく、個人の智恵や技術だけでは成^{じようじゆ}就^{しゆ}の望みがないと思う場合でも、これがただ一つの家だけの私の利益ではなくして、村^{むらびと}人多数のともに切望するところでありますということを明らかにすれば、それならば助けて見ようというおぼし召^めしが神にもあつて、お蔭^{かげ}を被^{こうむ}ることが多いということを、久しくわたしたちの祖先は経験していたのである。村に住む者が吉凶禍福、常にたがいに助け合わねばならぬという考えかたが、たまたまその信仰と結びついたものとわたしは思う。この千度参りを村の人にしてみてもらつて、危^{あぶ}ない命を取りとめたという者の話なども、注意しておれば折り折りは聞くことができる。土地によつては千度参りの人たちは、社^{やしろ}の前に立つて大きな鬨^{とき}の声をあげる。それが病人の枕^{まくら}もとまで聴^きこえてくることもしばしばある。あるいは参詣^{さんぎ}の人たちが垢離^{こり}を取った姿のままで、帰りにどやどやとその家に寄つて行くこともある。こういう声を聴くと、たとえようもなく心丈夫^{こころじようぶ}になり、また元氣がつくものだそうである。あるいはこういうところにも共同の祈願の隠れたる効果があるのかもしれない。

ところがこの千度参りの人の数というものは、じつさいはだんだんに少なくなつてきている。ことに交際のかぎられた都会の人々などはお百度^{ひゃくど}はただ一人で踏むものと思ひ、なんべんも同じところへ行くことを、お百度を踏むという諺^{ことわざ}さえある。大きなお社の鳥居

の脇にはお百度石という石が立っていて、手に数取りの紙縹や竹の串をもつて、脇目も振らずにそこと社殿とのあいだを、往き返りする人を毎度見かける。これも病人のためか、または遠いところにいる旅人のための、切なる願い事であることは同じなのだが、今ではそれがもう純然たる個人祈願になってしまっているのである。

一四、千社参り

一つの神さまのお社へ、百度二百度のお参りをする代りに、つづけて数多くの宮を巡つてあるくという風も、大分前からはじまっている。ちかごろではこれもきゆうに盛んになったが、以前も春と秋の時候のよいころに、または田植のあとの休み日などに、仲間を何人もこしらえて百社参り、千社参りをするのも神信心のうちに算えられていた。京都は大きな神社の数多い土地であり、朝廷でもなにか事があると、一時に全国諸社の奉幣を遊ばすので、なにか一つの社だけに願掛けをすることが、他をおろそかにするように感じられたのであろう。この風習の起こりは都方であった。最初はもっぱら祈願のためだったかも知れぬが、こうして季節をえらみ休日を待ち、または好い同行をさそい合わせる

ようになると、半分は遠足やハイキングに近い。江戸ではもう二百年近くも前から天愚^{てんぐこ}孔平^{うへい}という人がやり出して、千社札^{せんしゃふだ}ということがはじまった。これなどはただ自分の名をいろいろと小札^{こふだ}に印刷して、それをできるだけ多くの堂宮^{どうみや}の戸や柱にはつてあるくだけで、刷毛^{はけ}のついた継竿^{つぎざお}などを用意して、手のとどかぬような高いところにはり付けるのを手柄^{てがら}にしていた。その札が今でも思いがけず、とおい村里のお社の軒にも見られるのは、まだそういうことをする人が少しはあるのである。それにくらべると近ごろの千社参りなどは、大ていは外にいる者のためであつて、ただじつとしては居りにくいような心^{こころ}持^{もち}から、そうしてあるく者が多いように思われるけれども、これまでなんの縁も親しみもなかった他処^{よそ}のお社に、そう数多く願いをかけて見たところで、それが集まって一つの大きなお助け^{たす}になるとまで考えることもできず、むしろ念力^{ねんりき}の分散に帰することはわかつているはずで、言わばただ一つのまじないだから試みにそうしてみる、みんながするのを見れば効果があるのかも知れないというような、淡いかすかな望みから出たもので、これもたがいに祈願のすじをよく理解した、よい協力者の得られなくなったためだとすれば、同情しまた深く考えて見ねばならぬことである。

人が独り^{ひと}の力ではどうすることもできぬことでも、多数^{しゅうさう}の志を集めるならば何とかなる

ということ、千人針せんになはりというものはよくみとめている。しかしそこには人間以上の高くすぐれたお力があって、われわれの願いに応じてくださるという信頼はないのだから、これもなおまじないの一種でしかない。日本人のかつてしっかりと持っていた信心は、けっしてそんなものではなかった。一つの願い事が公けのものであり、村を同じくしてともに住む者の、ひとしく願わしいものであるときまると、たった一人の村民をい活かしておきたい、またはたった一人の赤子あかごを増加したいというような小さな願望にも加担して、その一軒の家を助けて、というよりもむしろそれに代って、協同の祈禱きとうに熱中したのであった。それ等とくらべると何千万倍とも知れないほどの大きな願い事は、今やわたしたちの心の中に燃えあがっているのである。そうしてその願いの筋には、各人寸分の差異もない。それを一つにまとめて貫徹させる意気ごみだけが、欠けていつまでも備わらずにいるわけはないと思う。

一五、勢祈禱

岡山県の各郡などでは、村々の氏神社うじがみしゃで行うこの協同の祈願祭を、総参そうまいりといい、

またせい参り、せい祈祷ともいつている。このセイももとは千垢離せんごりなどの千だったかも知れぬが、今いる人たちは皆いきおいのセイと心得て、勢参りせいまい勢祈祷せいきとうと、字にも書いている。これはもつともなことだから私たちもそういう言葉を使おうとおもう。勢祈祷も近ごろは病人などのためばかりだから、だんだんと人数が少なくなっているが、この大きな総国そうこくの祈願を機会として、できるならあるだけの人が参加し得るような、かんたんな式を設けたいものである。ふつうの勢参りでは、まず神前にうやうやしく拝をしてのちに、帰りに一同がウワーと高い声をあげる。これを鬨ときの声ともまた総そうの声ともいった。他の府県の千度詣りせんどまいにもこれはよくあることで、あるいはエイエイと力のこもった大声を出すので、これをエイエイ祝詞のりとという土地もある。もとは年越としこしその他の定例の祭りにも、氏子じこが集まってこの総の声、またはエイエイ祝詞をあげるお社やしろがあつたそうである。古いむつかしい文章で、祭りの目的をくわしく申しのべる必要は少しもない。神さまは赤子あかこの初はつみやまい宮参りの日から、もう氏子をごぞんじであつて、それが心に何を願っているかもよく知つていられるものと、昔からわたしたちは教えられていたのである。ただ必要なことは諸し人の熱意が満ちあふれ、しかもみな揃そろいであることを明らかにすることであつた。それが明らかにすると祈る人々みずからに、神は聴きき受けたまうべしという信仰が生じたので

ある。この必要は多数の国民の必要である。少しでも人の熱意を冷しきまするようなことは、如何なる立場にある者でも、ともどもにこれを慎まなければならない。

親棄山

一、有名な昔話

都会で育った人たちは物わかりが早く、思いやりのある人が多いのだが、周囲がいそがしくて、ゆつくりと話をして聴^きかせる者がすくないので、なにも考えずに大きくなるというようなこともないとは言えない。こんどはちがった土地で年を迎えて、見ることも聞くことが皆あたらしく珍らしく、それだけにまたこちらにもよく注意をするので、かえってきからの話の種はどつさりできることと思う。そういう中でもためになりまた楽しみになるものを、ついうっかりと聴き流してしまわぬように、わたしなどが若いころから聴きためて、だんだんと深い意味のわかつてきたいろいろの昔話のなかで、親棄山^{おやすてやま}というかわつた話を一つして見よう。

親棄山とはけしからぬ話、聴くも耳のけがれと思う人もあろうが、これはそういう驚くような話題をだして、まず聴く者の注意をひき寄せようとする手だてであつて、じつさいは人に孝行をすすめる話なのである。人によつてはまた棄老国きろうこくともいうが、この名称は外国からきている。昔々、いつのころとも知れない遠い昔、そうしてまた何処にあるかもはつきりしない、ある一つの国に、親が六十歳になると、山へ棄ててこなければならぬという、とんでもない習わしがあつた。それが一人のよい子ども、もしくは心のやさしい者の行いによつて、もう永久にそんな事をする者がなくなつたという話、その話し方がまた變つていておもしろいのであつた。

この話は日本全国にいつてもよいほど、ひろくほうぼうの土地に行われていた。もとはおそらくは誰でも一度、大きくなるまでにはかならず聴いたものと思うが、今日はもう知らぬ子が多い。そればかりか地方によりまた家によつて、その話し方がよほどちがつていて、一人で二通りの話を知っている者はまずないから、ここと他処よそとではどういふ風ふうにちがうかということに、気がつかずにいるのがふつうである。わたしはよほど久しい前から採集を重ねているので、大よそはその土地土地の変化を語ることができる。それがこれからの人にも、好よい参考になるだろうと思うのである。

二、四通りの話しかた

話を親棄山おやすてやまということは同じで、事がらのかなりはつきりとちがっているのが、私のしっているだけでも四種はある。そうしてその二つは、明らかに外国から採用したものの、他の二つはたぶん我邦わがくにに、よほど古いころからあったものである。試みいたれか話の好きな老人にたずねてごらんさない。事によるとまだ私も知らぬような、また別な珍らしいのを覚えているかも知れない。それからまた次にわたしのいう話を二つ以上、つなぎ合わせて一つにしているかも知れない。どうしてそういうようになるかということも話してみたいが、その前にざつとその四通りの話をくらべて見よう。

第一種の話というのは、ある男が六十になった親をもつこ畚あじかとか簣あじかとかに入れて、小さい息子むすこに片棒をかつがせて、山の奥へ棄てに行く。やがて簣も棒もそこに置いてかえつてこようとする、その孫が父にむかつて、これは家へ持つてかえりましょう。今にまたいることが有るからといった。それを聴いた男はああそうだったと心づき、親を棄すてることを止やめて、またつれてもどつたというので、この話はよほど古いころから、支那で有名な話だつ

たということ、いろいろの本にも絵にも彫刻にもなっている。本によってはその孫の子が、わざとこういうことを言いだして、父の不孝の行いを諫めたのだから、孝行者の手本だといっているが、それならば父についてわざわざ山奥まで出かけるまえに、そう言ってもよさそうに思われる。日本の話では、少年がただむじやきにそんな事を言い出したので、父がびつくりしてなるほどそうだったと思い、善心に立ちかえって棄ててかえるのを止めたと話すものが多いが、いずれにしたところで、これはいささか感心しない利己主義であつた。東北地方に行われる一つの例では、その息子が父にむかつて、わたしにはとてもそんな事はできぬと言つて泣いたので、それに感動してふたたび老人を、つれもどることになったという風に話しているものもあるが、ともかくも孫の少年の言葉によつて、親を山に棄てるといふような悪い行いを、止めたという点まではどれも皆同じである。

三、老人の智恵

第二種の話し方は、これよりも今すこしこみ入つていて興味がある。むかしむかしある国の王が、年寄りはいらぬものだから皆棄ててしまえという命令を出して、それにそむい

た者は嚴罰を受けることになっていたさいに、一人の孝行者がどうしても棄てることができず、親を床の下とか土手の陰とかにかくして置いて、そつと毎日の食物をはこんで養っていた。そのうちに敵の国から、こちらの人の智慧をためそうと思つて、むつかしい問題を出してきた。これに答えぬと恥でもあり、また賢い人がないと知つて、攻めてこられるにちがいないので、誰かこの難題を解く者があつたら、望みしだいの褒美をくださるということになった。親をかくしていた孝行なせがれがその話を親にすると、そんな事はないでもない。こうすればよいのだとかんたんに教えてくれた。それを王さまのところへ申し出て、賞与の代りには親を棄てなかつた罪をゆるしてくださいというと、王もはじめて老人は賢いものだということに心づき、かつは息子のやさしい心掛けにかんしんして、約束の褒美をあたえると共に、さつそくそんなまちがった命令を取消したという話で、これも我邦へは支那からはいつてきたらしいが、もとの起りは印度であり、『雑宝藏經』という仏法の經文のなかに、出ているということまで今日ではもうわかつている。

しかし、この話の日本にきたのも古いことで、人によつてはこれをこの国であつたことのように思っている者もあるくらいに、今なおほうぼうの農村において語り伝えられてい

る。年を取った人たちには深い智恵があつて、それに教えてもらえば敵の国のあなどりを防ぎ、またはたくさんの方を受け取れることもできる。だから大事にしなければならぬ、棄てたりなんかするのは損だというのは、考えて見ると誠に^{まこと}いやな話で、とても日本人などのもつともだとは思えないくらいであるが、それとは関係なしに、この昔話のおもしろかったのは、話のなかに出てくるいくつかの試験問題というのが、いずれもちよつと聴^きけば不可能のようで、よく聴いてみればなるほどそうだなと思うような、智恵の練習になるものばかりだったからで、親を棄てるなんていうことがあるのかと思う子どもたちでも、このほうには耳をかたむけずにはいられなかったのである。村で昔話のじょうずと言われる老人などが、おどけまじりにこの話をして、だから年^{とし}よりは大事にせねばならぬということなどと、氣がるに笑つていたようすが目に見えるような氣がする。

四、七曲の玉の緒 その他

そこで一体どういう種類のめずらしい難問題が、老人の力でなくてはとくことができなかつたと語り伝えられていたかということ、少しくわしく話して見ると、日本ではそれ

が七つほどあつて、どれもこれも相応にひろくそちこちに行われている。この七つのうち、五つはすくなくとも外国からはいつてきたものであつた。ただし我邦わがくにでは印度いんどのように、敵の国がこちらの智恵をためしにくるなどということはないのです、それをごくかんたんに殿さまの懸賞けんしょうで、これができた者には一万両の御褒美ごほうびなどというように、翻訳してゐるのが多いのである。

いちばん有名なのは七曲ななわたの玉の緒お、一名を蟻通ありとおしという話、これは今から千年も昔、紀貫之きのつらゆきの時代よりも前の事とさえ言われている。大きな玉に穴がとおつていて、その穴がなかで七つも曲つてゐる。これへ緒をつらぬいて見せてくださいという敵方てきがたの望みである。これにはだれもよい考えがなく、なんと返事をしてものかと困つてゐると、老人がそれを聴きいてそんな事はなんでもない。蜜みつを一方の口の穴に塗つておき、蟻ありの足に絹糸きぬいとをゆわえて、こつちの穴から入れてやれば、蜜の香かに引かれてきつといっぽうへ抜けて出る。その糸をだんだん太くすればよいと教えてくれた。このためにもちろん親を棄すてずにいた罪はゆるされたのみか、のちに神にまつて、蟻通ありとお明神みょうじんというのがそれだといふことになっている。その話は古い書物に書いてあるばかりでなく、今も国民の口から耳へ、切れ間まもなく語りつがれているが、村々の子供には玉というもの、それに七曲ななまがりの

穴を通したものだということとは考えにくいので、信州の南のほうではこれを法螺ほらの貝に緒を通すといい、加賀の江沼郡えぬまなどでは榮螺さざえの殻からの底に穴をあけて、蟻をはわせて見よと、いったことにもなっている。そうしてこの話をかんしんして聴く者は、大ていはそれがそのような遠い昔から、日本にあつた話だということを知らずにいるのである。

それから次には木の本もと、および親子馬おやこうまという話があつて、二つともに八百何十年もまえの、『今昔物語こんじやくものがたり』という本に出ている。なにか珍らしい三尺ばかりの木の棒

の、同じ太さにけずつたものを持つてきて、これはどちらが先のほうで、どちらが根元ねもとかあてて見てくださいと、言つてこられたので困つてしまった。孝行な息子がそつとかくしていた父にたずねてみると、それは何でもない。水に流して見てやや沈むほう、または川か下になるほうがその木の根もとだと教えてくれた。また毛色のよく似た同じくらいの馬を二匹ひいてきて、これは親子ですがどちらが親ですかきめて下さいといった。これも年とし寄りの智慧によつて、秣まぐさをあたえて見て、まず食べるほうが子馬の大きくなったのであり、それを見ていてゆつくり後あとから食べにかかるのが親だと教えられ、その通りに見たら果してすぐにわかった。動物でも親の愛情は深いものだということを、この老人が知つていたのである。

五、外国で作った昔話

それから^{これ}是とやや似た問題で、二つの蛇^{へび}を持ってきて雌雄^{めお}をくべつして見よといったこと、これは印度^{いんど}でできたという『雜宝藏經^{ぞうほうぞうきよう}』にも出ている。すべすべとして絹^{きぬ}の敷^{しき}物のうえに、二ひきの蛇^{めすへび}をのせて見ると、さわいではいまわるほうが雄蛇^{おすへび}であり、じつと静かにしているのは雌蛇^{めすへび}ということを知っていたので、これもかんとんに答えることができた。今一つは大きな象^{ぞう}を引^ひぱつてきて、この象の重さは何千貫かという問いで、これも相応な難題だが、支那の古い本に出ている。日本では象の重さといっても子どもには考えにくいので、それをでっかい牡牛^{おうし}という話にしている。支那のほうでは賢い子どもがあつて、それを考え出したことになっているのだが、我^{わが}邦^{くに}ではやはり親を棄^すていた時代に、棄てることを悲しんでかくして置いた老いた父の智慧ということになっている。船を水に浮かべてその上にこの牛をのせ、どこまで沈んだかをしるして置いて、あとでその印^{しるし}のところまで数多い石を積み、その重さを加^{くわ}え算^{ざん}すれば、わけなく牛の目方^{めかた}がわかるというのである。今の子どもならそうむづかしい問題でもないか知らぬが、以前はそれを

聴^きいてなるほどそうだったと思う者が多かったらしいのである。

この以外にもう二つ、老人のおかげで答えられたという難題があつて、これだけは日本で昔話をする人たちが、思いついた趣向だったように思われる。その一つは灰繩^{あくなわ}千束^{せんたば}を献上せよ、今ひとつは「打たぬ太鼓^{たいこ}の鳴る太鼓」を持つてこい。どちらもただ人を困らせるだけの命令であつて、どうしてそのような無理をいったのかと思うようであるが、もともとこれは「殿さまの難題^{なんだい}」という別の話のなかにあつたものを、借りてきてここに使つていたので、つまりは外国から持つてきた話の種では、じゅうぶんに日本の子どもを樂しませることができないから、だれかが取りかえてこれを年寄^{としよ}りの考え深かつた例にもちいたものと思う。灰で繩^{なわ}をなうということはできる事でない。どうしたらよかうかと^{しあんなげくび}思案投首^{しあんなげくび}をしているのを見て、繩を千束ないあげてから、それをそっくり焼いて灰にして、献上すればよいじゃないかと、注意してくれたのがその父であつた。それでは崩^{くず}れてしまふと思つたものが、塩水^{しおみず}によく浸^{ひた}してから焼くようにと教えたという話しかたもある。「打たぬ太鼓の鳴る太鼓」などは何処^{どこ}にもない。さてさて困つたと困り抜いていると、それもなんでもない事だと小さい太鼓の革^{かわ}をはがして、その中へたくさんの蜂^{はち}を入れ^{びよう}、鉦^{びよう}を打ちなおしてむりな殿さまのところへ持参させた。最後にその蜂がぶんぶんと飛び出し

て、殿さまや家来を整けらいしたので、もうこらえてくれとあやまった、などという笑いの結末にもなっている。

六、接穂と台木

少し長たらしかったが、これまでが親棄山の第二種の話であつて、日本にも流行し、また少しずつの作りかえもあつたとは言いながら、本来は支那または印度いんどにはじまつた昔話である。老人はかんがえ深く、またいろいろの好い経験よも積みたくわえていて、なんか困ったことがあると助けてくれる。それだから大切にしなければならぬと言うのでは、親孝行もなんだかかんじようずくになつて、われわれの心こころもち持とは、一致しない。これがただおもしろいから外国から採用したものであつたのは、むしろそうなくてはならぬことのように思われる。

しかし、こういった外国の昔話が、千年も八百年もまえに、もう我邦わがくにの人たちに覚えられていたということは、こちらにもそれと半分以上似かようなものがあつたためだと見ることはできないであろうか。果樹や花の木の新種というものは、実をもいで来て播まいて

生やすよりは、台木だいぎを見つけてそれに接穂つぎほをするほうが早く成長する。そしてその台木には大ていは同種の木が用いられる。親棄山の昔話にも、そういう台木になるものが前々から、日本にはすであつたのではなからうか、わたしは今それを考えているのである。

そう思つて氣をつけていると、この二通りの話し方がいいに、日本にまたべつの親棄山があり、和歌で有名になつている信州更級さらしなの姨捨山おばすてやまなども、その一つの残りの形であるような氣がする。姨捨山の話も中世の書物に多くあらわれ、ことには『大和物語やまとものがたり』という本にあるのが、よく人に知られている。この文学のなかでは、棄すてられた人が親ではなくて、伯母おばだつたということになつている。これはたぶん母親を山へ棄てたというのを、あんまりな話と思つてかえたのかも知れぬが、小さい時に母をうしなつて、親代りおやがわにそだててくれた伯母だつたというから、おだやかでないことは同じである。古い日本語ではウバは姥うばと書き、母でもだれでも尊敬すべき婦人は皆ウバであつた。母をウバまたはウマ・アツパなどという言葉が、田舎いなかにはまだ行われている。京都だけには母をウバと呼ぶ習わしが早くからなかつたので、これを伯母を棄てた話にあらためることが容易だったらしいのである。そうしてこの話は和歌を愛した人々のあいだでは、よほど以前から話しかたが大分だいぶんちがつていて、本を読む人の数が多くなるとともに、こればかりがひろく知ら

れることになったものかと思う。そのもとの形かと思られる話が、まださいわいに田舎には今でものこっている。それとくらべて見ると新旧のちがいがよくわかり、本に出ているからそれが最初からの話だったと、言うことのできない証拠にもなるのである。

七、日本でできた昔話

このことをあまり強くいうと議論になり、みなさんの読み物にはむかないから、ここにはただざつと姨捨山おはすてやまとよく似た話が、今でも東北地方にはあるということを述べて、どこまで似ているかを考えて見ることにしよう。前にあげておいた二通りの親棄山、すなわち孫の言葉と老人の智恵才さいかく覚さくと、二つの外国で昔話とちがっている点が、こちらの二つの話、すなわち姨捨山と親棄山おやすてやまとはたがいによく似ている。たとえば親が六十になると棄すてなければならぬという、法律ほうりつがあつたということはこちらでは言わない。それから今一つは男は心がやさしく、いつでも孝養したいと思うのだけれども、その女にようぼ房うがはなはだよくない女で、年寄りをうるさがって棄すててしまいなさいと始終すすめる。あまりいろいろというので男もついに負けて、姥うばをだまして山へつれて行くことになる。

この二つの点は外国からきた二種の話にはなく、こちらの話では二つとも同じである。ただ『大和物語』などに書いてあるのは、その晩はちょうど好い月夜で、じつと山を眺めていると悲しくなった。それで男は、

我が心なぐさめかねつ 更級やおぼすて山に照る月を見て

という一首の歌を詠んで、またふたび老女をむかえに行つたということになつていて、その後どうしたかをくわしくは語っていないのに、いっぽうの奥羽地方などに行われていた話は、その悪い女房が罰せられたという点がちがうのである。これは日本ばかりにかぎらぬことだが、昔話には舌切雀のおもい葛籠の婆のように、または花咲爺のとなりの慾深爺のように、善人がしあわせをしたという話には、かならず悪い人が悪い報いを受けたということがついている。たぶんは聴く者にはつきりとひびくように、また話を長くおもしろくするために、裏と表と両面から、ていねいに説く習わしがあつたのである。そうしてこの民間の親棄山においても、やはり棄てられた老女のふしぎな幸福を語るために、こんなありそうにもない悪い女房を、引っぱってくる必要があつたものかと思

う。

この話は今のところ、わたしの知っているのが五つか六つあるが、土地によって話し方がすこしずつちがっている。しかしだいたいは皆おなじ結果で、老母は常日つねひごろ心掛こころがけのよい人だったゆえに、山の神さまのめぐみを受け、またはふしぎの幸運によつて、思うことのなんでもかなう打出小槌うちでのこづちという宝物たからものを手に入れる。それで地をたたいて、まず食べ物や着物を打ち出し、つぎに自分が若くまた美しくなり、それからその山さん中ちゆうを大きな町にして、りっぱな家をその中央に出現させて、店を開いたともいえば、酒屋になったともいつている。悪い女房はその噂うわさを聴いて、うらやましくてたまらなかった。それでこんどは男にたのんで、自分を山のなかに棄てさせたが、あてにしていた宝物は手に入らず、ひどい難儀をして死んでしまったという話で、もちろんわが心なぐさめかねつというような、あわれな三十一文字みそひともしなどは残つてもいないのであつた。

八、昔話と和歌

古いころの昔話には、和歌をとまなうものが、このほかにもいくつかあつた。なかには

歌だけが前からあつて、それを説明するために話を取つてつけたものもある。姨捨山おばすてやまな

どはその方であろうという人もあるが、大ていの場合には話をする人が、作つたものと見てよいのである。もともと実際にそういうことがあつたわけではなく、いずれだれかがこしらえて、語りはじめたものであらうから、歌もその時からできていたとも考えられようが、それにしては少しばかり合点がてんのゆかぬのは、同じ一つの話がほうぼうの土地にあつて、あるところでは歌がつき、またあるところでは歌なしにその話をしている。ことに外国に似たような話のある場合などは、言葉がちがうから歌までは持つてくることができない。それでわたしなどは昔話の聴きき手、すなわち人の話すのを聴いて心をうごかした者が、後におぼえていてつぎの人に伝えるさいに、新たに歌だけをつけ添えることが、しばしばあつたものと想像しているのである。その一つの好い例として、ちようど第四種の親棄山おやすてやま、これも我邦わがくにに古くからあつたもう一つの話を紹介して見よう。それがまたわたしの最初からの目的でもあつたのである。

その第四の昔話というのは、前の三つのどれよりも、かんたんでまた古風こふうであつた。あまりかんたんなためにこの頃では、後先あとさきにおまけのついたものが多い。どうして親を棄てることになつたか、もとは明らかになつていなかったらしいのを、このごろでは外国風

の棄^{きろうこく}老国にならつて、そういう法令が出ていたやうにいう話もまれでないが、それではこの話の感動は少しうすくなるのである。最初はただ何かよくよくの理由があつて、どうしても親を山の奥へ送つて行くことになり、親もしょうちの上で子の背に負われ、山にはいつて行つたという話だつたかと思われる。老人の智恵という話が多くは父親であるに反して、このほうは母親だつたというのがふつうである。その母が子の背に負われていて、路々^{みちみち}左右の木の小枝を折つてゆく。または草をまるめて棄てて行つたとも、あるいはけしの種子^{たね}を少しづつ播^まいたともいうところがある。どうしてそのようなことをなさるか息子^{むすこ}がたずねると、おまえがかえつて行くのに路に迷わぬやうに、葉^{しおり}をして置いてやるのだと答えたので、親の慈愛に深く感動してしまつて、何がなんであらうとも、この親を山にはのこして置けないと、ふたたびその場からつれてもどつて以前にもまさる孝行をしたという、いたつてみじかい話だつたやうである。けしの種子を撒^まいて行くという話の、まちがいであつたことはだれにでもわかる。そんなものを撒いて置いても、息子のかえり路の役には立たぬからで、これはお銀^{ぎんこぎん}小銀というやうなまたべつの昔話で、妹が春になつてから、けしの花の咲く路をたどつて、姉をたずねてくるやうにこの種子を蒔^まくという話をつぎ合わせたもので、もとからの話ではなかつたのである。

九、母の愛情

それよりも現代行われている各地の話には、この後へもってきて木の^{もとすえ}本末や^{おやこうま}親子馬、または^{あくなわせんぞく}灰繩千束などをつけたしたものが多く、そのためにまた負われたのを父親とし、その親が^よ詠んだという和歌までを取りかえているものがある。こんどは日本の南の端の一例をあげてみると、鹿児島県の^{こしきじま}甑島などでは、その父が^{むすこ}息子の背に負われて木の小枝をお^{しおり}つて栞とし、わけを問われるとこういう歌を詠んだ。

道すがら^{しおり}枝折々と^お折り柴はわが身^み見棄てて帰る子のため

それで同行していた孫がその歌に感動して、父を説きつけて祖父^{そふ}をつれもどったという点は、第一種の^{もっこ}畚をもつてかえろうといった話であり、それから家にかくして置くうちに祖父の智慧によって、蛇の^{めすおす}雌雄と木の^{もと}本末とを見わけよという敵国の難題をといった第二種の話とを、^つ継ぎたしているのである。話としては外国から輸入したもののほうが、あたら

しくまた珍しいのだから、それが流行したのはやむを得ないが、そういう中にもなお昔からの、もつともかんな話と和歌とが、遠い島々にはまだ痕跡をとどめていたのである。

大体からいって、昔話はだんだんと興味深くなり、笑って聴くようなものが多くなってきた。おもしろいと思って聴く者がふえてきたかわりには、心からこれに感じいつて、一生わすれずにまた次の代の若い人たちへ、話しておこうとするような者はすくなくなっていくように思う。甕島の老人が詠んだという道すがらの歌なども、古く伝わっているのはもつとよい歌であった。そうして女の歌であり、また涙をこぼして感動した母親の歌でもあった。

奥山おくやまにしおる葉しおりたれは誰のため身をかき分けて生める子のため

これをまた「我が身を分けて」と言い伝えている人もあるが、それでは力がずっと弱くなる。身をかき分けてという歌言葉は、母の口くちずからでないと出てこない言葉であった。わたしの想像するところでは、はじめて和歌を添えてこの昔話をしたひとは、ある一人の

母であつた。若いころは心のやさしい娘であつて、かつてしみじみとこの昔話を聴いて、一生のあいだおぼえていたのである。それを年とってから娘たちに、またはかわいい孫たちにして聴かせる時に、思わず知らずこういう歌が心に浮かんで、それを山に棄てられにゆく老女の作のようにして、高い声を出して歌つたので、じつと聴いていた若い女たちも、親のありがたさをじんと胸にひびかせて、おそらくは皆涙ぐんだことだろうと思う。わたしは母にわかれてからもう五十年にもなるが、それでもこの歌を聴くと思ひ出して、いつも孝行の足りなかつたことを悔み^{くや}歎^{なげ}かずにはいられない。

マハツブの話

一、遊戯と観察

マハツブってなんだろう。そういう人はきつと多いと思うが、それを承知の上でわたしはこの話をする。めずらしい名まえは一ぺん聴きくと、いつまでも覚えているものだからである。

マハツブはまたマノハチブともいう人がある。奥羽おうう地方もずっと北のほうで、子どもたちのよく知っている一種の植物に、そういう名のものである。本名はイガホオズキ、またオニホオズキともいうそうで、皆もよく知っている酸漿ほおずきとともに、茄子科なすかに属する草なのである。日本では北から南のはしまで、どこに行っても見られる野生やせいの草だというが、自分などはまだこのおかしい昔話を聴いていなかったもので、見たことはあるだろうが実は

もう覚えていない。それでこんどはまず皆さんのために、マハツブの話をして見ようと思うのである。

その前に一つ考えておきたいことは、このごろの酸漿は人が栽培して売りにくるので、実も大きく色も美しく、遊びかたもだんだんとかわって、名は近くても毬酸漿いがほおずきという草の実と、あんまりよくは似ていない二種のものになった。しかし丹波酸漿たんばほおずきを畠で作り出したのは後のことで、店や縁えん日にちで売ようになったのは、都会でもそう古くからではないのである。以前の村々の少女たちは、酸漿もやはり野や路みちばたに生えているのを、採って遊戯にもちいたのであった。酸漿の遊びかたはあのよく熟した実をもんで、ネヤマノネホズキという芯しんを抜き出し、袋にしてかんで鳴らすことがその一つで、これは多分ずっと前からもあったろうが、丹波酸漿の口にいっぱいになるようなのが出てから、この遊びがことにおもしろく、ほかのあそびかたは忘れてしまうようになった。千成酸漿せんなりほおずきだけはまだ採ってくる児こもあるが、ただの毬酸漿などはかえりみる者がなくなったのである。

それからなお一つ、毬酸漿では遊べない古い遊びかたがあった。それはこの二種の酸漿のもつともいちじるしいちがいきっているもので、昔の子どもにはまた注意せずにはいられぬことであつた。ふつうの酸漿の他ほかのものとかわっている点は、うてなが実の成熟に

つれてだんだんと伸びてきて、しまいには繋が^{つな}がつて袋のように縫^ぬい合わされ、そっくりあの紅^{あか}い実をつつんでしまつて、蠅^{はえ}や小蜂^{こばち}に吸^すい枯^からされることを防ぐことである。毬酸漿^{とすず}のうてなも茄子^{なす}などと同じに、実とともにだんだんと大きくなつては行くが、それが中途^とで止ま^とつて、実のぜんたいをおおい隠すまでにはならない。酸漿^{なが}だけは完全な袋になつてしまふから、永^{なが}く木につけておくと袋の表^{おもて}皮^{かわ}がはげ、繊維だけが蚊帳^{かや}のようにのこつて、紅^{あか}い提^{ちよう}灯^{ちん}だといつて持つて遊ぶことができたけれども、毬酸漿^{おにほおずき}のほうにはそういう遊びがない。イガホオズキまたは鬼酸漿^{おにほおずき}という名まえは、茎^{くき}に刺毛^{とげ}があるところからつけられたのだが、それよりも小さい天然観察者たちには、この点がもっと注意を引いていたのである。そうしてマハツブという東北の方言なども、あるいはこういう点にもどづくものではないかと、わたしは想像している。少なくともわれわれの一つの昔話だけは、たれが始めたものか、この点を説明しているのである。

二、苧績^{とす}み宿の夜

そこでいよいよマハツブの話になるが、昔の昔の大昔、酸漿^{ほおずき}とマハツブとは姉と妹、

二人の同胞であつたという。この二人が相談をして、めいめい一枚の麻のきものをこしらえようということにきめ、苧の糸を績みはじめた。苧糸を績むということは、もう見たことも聴いたこともない子どもが多くなっているが、麻の皮をはいで蒸して乾してよくさらして、白くきれいな部分だけを、爪の先で細かくわって、つないで撚りをあたえて一すじの糸にして行くことで、蚕のはく糸の細いものを五つ七つと合わせて行くのとは、仕事がるで反対になっている。それで同じひとつかみの麻の苧でも、細くさけば糸が長く、したがって長い布が織れるが、下手にあらあらしく太く取ってしまうと、地の厚い布はできても寸尺は足りなくなるのである。木綿が日本にふきゆうするまでは、麻布を着ぬ日本人は一人もなく、苧を績み布を織らぬ女も皆無にちかかった。それでこういう事柄はみな常識となつて、わざわざ言い教える人もなく、今となつてはかえつてこのめずらしい昔話の心持を、わかりにくいものにしてしているのである。

話は土地によつて少しずつちがつているようだから、これからもまだ数多く、たずね集めて見るひつようがある。青森県の東の端八戸市の附近の村里では、こんな話になっている。二人の女兄弟が苧を績んで着物を織つたが、姉さんのほうはたんねんな辛抱づよい氣質で、できるだけ糸をほそくして、じゅうぶんな布を織りあげたから、とつ

ぷりと頭から爪さきまで、身をつつむような着物を縫いあげることができた。ところが妹はせっかちで仕事があらいので、苧糸が太過ぎて一反の布になるだけは取れず、それで衣装をしたたら腰までしかなくて、丸いおしりが丸出しになってしまった。その姉というのが今の酸漿であり、妹はマハツブとなつて今でもお尻を出しているという。

マハツブとホオズキとどこがちがうかを、小さいころから見知っている娘たちは、はじめてこの話を聴いてぶつと吹き出し、またはおなかの皮の痛くなるほど、笑いこけぬ者はなかつたことと思う。睡いさかりの人たちは独りではとても夜なべはできない。そのためばかりとも言えないが、冬の夜長になると五、六人以上、じゅんまわりに朋輩の家にあつまつてきて、いろいろ話などをしながらにぎやかに苧を績んだ。夜がふけて睡気さすようになると、たれか年上の者がおかしい昔話をしだして、みんなを笑わせようとしたこともふつうであつた。しかし、この話の本来の目的は、ただ苧績み宿の睡気をおい払うためだけではなかつたかもしれぬ。少なくとも結果において、もつと大きな役に立っていたのである。まさかマハツブのようならなぼうな苧の績みかたはせぬまでも、常から糸が太いと小言をいわれ、また自分でも気にしていた女ならば、この話をただ笑つてばかりは聴かれず、なにか気がとがめて自分が笑われてでもいるように感じ、むりにも忍耐して

糸のわりようを細かくしようとしたことであろうし、また細い糸を引くことのできる娘ならば、いよいよ安心して友だちにおくれぬように、日ごろの熟練に磨き^{みが}をかけるようにしたことを思う。

三、農家と麻布

この一つの笑い話が、そう古くからあったものでないことは、その話の中からもうかがうことができる。麻^{あさ}布^{ぬの}の糸の細さ太さは、以前はこれほど大きな問題ではなかったのである。麻は農家がめいめいの畠に栽培し、入用があれば多く作るから、さまで原料の節約をするにはおよばず、いっぽう働く人たちの衣類としては、むしろ太い糸で厚^{あつ}々と、丈^じようぶ^ぶ夫に織りあげる必要もあつたくらいで、ただ朝^{ちよう}廷^{てい}への貢^{みつ}ぎもの、または領主への年々の献^{けん}上^{じよう}品^{ひん}だけが、上^{じよう}布^ふといつて、精巧な布でなければならなかったのだが、その分量はぜんたいの上からいうと知れたもので、これには一人か二人の特に技術のすぐれた者を、雇うて織らせてもよかつたのである。ところが中央の文化がすすんでから、優良な麻布を織りだすので名高くなつた土地がほうぼうにできて、これを租税の代りにまたは商

品として、有利な生産をするふうがはじまり、紡織の手わざはまずそういった地方において、おいおいと発達してきたのである。冬はやわらかな絹織物きぬおりものや真綿まわたをもちいる人たちが多くなつて、麻布が主として夏のものとなると、もちろん糸の細いかるい布がよるこばれ、ついにこのごろ見る蟬せみの羽のようなものばかりが、麻の上布だと思われるようになってたのである。しかし奥羽地方おううの人たちは、つい近ごろまで冬も麻を着ていた。そうしてこれらの手織りておには、そんな薄い布は入用がなかった。それよりも地のよくつんだ丈夫向きの、ちつとやそつとの荒仕事あらしごとでは、すぐに糸が片寄ってしまわぬようなのを賞美したのだが、それでも女の子は聴きいて知っているので、やはり糸の細く目方めかたのかるいのを、織り出すことを手柄てがらとするようになって、今いったマハツブの笑い話などが、生まれてくることにもなったのである。

秋田・岩手二県の境さかい、鹿角かづののある村に行われている話などは、これから考えると今少し古いものかも知れぬが、衣服の好みがもう変つてきたので、話が少しばかりわかりにくくなっている。これも酸漿ほおずきとマハツブとは、姉と妹か友だちかであつたようだが、二人が日を切つてめいめいの着物を織り上げることになった時に、酸漿はどんなでもよいからと大いそぎで仕上げたゆえに、今でもあの通りがさがさとした目の荒い着物だが、ともかく

全身をつつむことができた。これに反していっぽうの毬酸漿いがほおずきは、あまり念入りにていねいに、こしらえようとしたので時間が足らず、着物はぴったりと身にあつていても、長さが短くてお尻しりが出ているというような話になっている。これでは双方どちらもおかしくていやだから、どうすればよかうかと娘たちは考えたことであろうが、酸漿のごとくくぶくした、地の透すくような布を織る気になれず、やはりマハツブのごとくひきしまった布を、精出せいだして織つてお尻の出ぬように、手ばやく仕上げるのがよいということになったろうと思う。すなわちこのほうの話は上手下手じょうずへたというかわりに、努力と勤勉とをすすめる教訓に、もちいられていたらしいのである。

四、かせ掛け蚯蚓

昔は機織はたおりが全国の女性の仕事であつたように、これとよく似た昔話も、ひろく日本のすみずみに行われていた。マハツブの話というのは、あるいは東北地方だけにしかないのかも知れぬが、この鹿角かづのの例ともっとも近くて、さらに今一段とおかしいものが、ここからもっとも遠くへだたつた九州のほうにも、二つまでもう採集せられているのである。そ

の一つは長崎県^{けんか}下、壱岐島^{いきのしま}のある村に行われていたもの、自分はかりにこれをカセ掛け^か蚯蚓^{みみず}と呼ぶことにしている。カセという言葉も、今日でははや説明が必要になった。カセは布を織る経糸^{たていと}を束ねたもので、その糸を枹^{かせわく}枹^{わく}というやや大ぶりな枹^{わく}にとつてから、染めたり色を合わせたり綜^へたりするので、糸のかんじようにつごうのよいように、長さのちやんときまつた大きい輪になつていた。それを枹^{かせわく}からはずしてのち、曲^まげて捻^{ねじ}つて紺屋^{こうや}などにも持つて行くのだが、以前は機^{はた}を織る女がそのまま首に掛けていることもあつたらしく、それが大きな蚯蚓の首に白い輪のあるものと似ているので、こんな笑い話もそちこちに伝わつたのである。

むかしむかし、二人の女が近いところに住んで、二人ともよく布を織つていた。その一人は仕事が早くあらく、今いっぽうの女は念入りなかわりにおそかつた。市^{いち}の日がきたのに、こちらはまだ機にもかからず、となりの女は糸の太い、目の荒い布を織りあげて、もうそれを着物にして市へ着て出かけた。こちらは間^まにあわぬので、白い枹^{かせい}枹^{とく}糸を頸^{くび}にかけ、大きな甕^{かめ}にはいつて夫^{おつと}の背に負われ、市の見物に出かけた。その途^{みち}でとなりの女のあたらしい着物であるくの見かけ、くやしいものだから甕^{かめ}の中から悪口^{あくぐち}をいう。その問^{もん}答^{どう}を島の言葉でこういうふうにいつたと『壱岐島昔話集^{いきのしまむかしばなししゅう}』には出ている。

「あすけにや（かしこ彼処には）糸太いとぶとが行くばい、あり見ろあり見ろ」

といっぱうがいうと、相手も負けてはおらずに、

「糸太でも着てこそよからう。甕かめう打ち割わればからだは裸はだか」

と笑いかえした。女房を負うていた亭主は、この口いさかいを聴きいてはずかしくてたまらぬので、その甕を土の上にほうり出すと、甕は割れて杵かせを頸にかけたはだかの女房がころげ出したが、多勢おおぜいに見られるのがつらくて、土のなかにもぐりこみ、とうとうこの蚯蚓になつたという話である。だれが考えだした話かは知らぬが、機にねっしんだつた昔の世の娘たちには、このくらいおかしい話もちよつと類るいがなく、頸に白い輪のある大きな蚯蚓を見るたびに、いつでも思い出して、つぎつぎと小さい女の子に、話して聴かせたことと思ふ。

五、女の工芸

しかしこの昔話だけでは、仕事がめんみつで、ただ手のおそいという女が、かわいそうな気もするが、いっぱうのいわゆる糸太いとぶととても、けっして同情せられていたわけでもな

いのである。だから大分県の山間の村などでは、これがまたよっぽどちがって、ひき蟪とみ蚯蚓みずとの前の生まえの話ともなっているのである。

むかしむかし、バツクン（蟪）と蚯蚓は友だちであつた。二人の女は相談をして、めいめい着物をこしらえようということになった。蚯蚓はほそい糸でなるだけ美しいきものを作りたいというし、蟪のほうは「わしやもう大けな糸でん、早く作ろう」といった。それであらい布の着物だが、蟪のほうは大そう早くでき、蚯蚓はあんまり細い糸で織ろうとしたので、もつれてしまつて手が付けられぬようになって、いつまでもあの通り、かせを頸くびにかけたまんまでいる。そうして蟪の方の着物はまにあつたというばかりで、今でもあんなにきたないなりをしているのだといっている。

布を織る女の技芸は、工場や大機械のもちいられるようになる前も、永い間にはだんだんと改良せられていた。わたしはくわしくその歴史を皆さんに語ることはできぬが、沖縄県などの遠い島々に行つて見ると、今でもまだカセというものを作らずに、小さな糸いと巻まきからすぐに機はた糸いとを綜へている女が多い。糸を染めてから機はたにかけるといふことは、縞しまが流なが行かし木綿もめんがさかんに織られるようになってから後の事だつたと思われる。頸くびに女が白い袴か糸いとをかけてあるくなどということは、今から考えるとみような風俗のようだが、あれで

も梓かせわくの新たにはじまった当座には、そうしてあるくことも一つの見えであり、また一つの楽しみでもあったので、それでこのような笑話わらわが、新たにかれらのあいだにもてはやされたのではないだろうか。

もしもそうだったとすると、今一つ、やはり同じころの若い娘たちのあいだに、おかしくおもしろい話が生まれていたのであった。これは目的が直接にこの技芸を奨励しょうれいするものではないが、それでも比較的人のよく知っている昔話だから、このついでにぎつとそれもおきたい。以前は若い人たちの教育に、昔話というものがなかなかよく働いていた。それを知るのにはちようどよい例だからである。

六、孝行な雀の昔話

その話はわれわれのあいだでは、雀すずめ孝行こうこうという名で知られている。むかしむかし雀すずめと燕つばめまたは雀と啄木鳥きつぎとは、姉と妹であった。あるいはそのいっぽうを鵯かもめといい、南の島では魚狗かわせみだともいうが、かたいっぽうはかならず雀ときまっている。この二人の母親が病氣あぶをして、もう危ないという通知がきたときに、二人の女はちようどお化粧をしてい

た、という話が地方には多い。燕・啄木鳥または魚狗はおしやれだから、色とりどりの着物や帯を出して、どれにしようかなどと考えているうちに、おかれてしまって親の死目^{しにめ}に会えなかった。雀だけはちようどお齒黒^{はぐろ}をつけかけていたところで、知らせを受けてすぐに飛んで行ったから、間^まにあつて母をよろこばせることができた。今でも雀の頬^ほつぺたに黒いものについているのは、そのお齒黒のよけれど、孝行の徳によって一生のあいだ、米を食べて暮らすことができるのはんして、燕はおめかしをして家にかえるのがおそくなつた罰に、土や虫を食つて口をしぶくしているといい、啄木鳥も衣裳だけは美しいが、一日木をつついているので夜になると、くちばしが病^やめるといつて啼^なく、などというようなおかしい話が多く、もとは大ていの子どもはいちどはこの話を聴^きいたものであつた。

ところが娘が嫁^{よめ}になり母になるころに齒黒めをする風習は、五十年ほど前からなくなつて、まだそういう事を聴いていない人があり、あの雀の頬^ほの黒い斑^{まだら}が、鍍漿^{かね}のよけれどという話をして、笑いたくならぬ者がだんだんと多くなつてきた。しかもこの鍍漿^かづけの風習は、京・江戸・大阪をはじめ、大ていの土地の良い家庭には行われていたのだけれども、それでも日本全国を見渡すと、まだすみずみには最初から、そういうことを知らぬ女たちがいくらかも住んでいて、この雀のほつぺたの黒いわけなどは、それらの土地でも通用

しないのであった。

しかしお齒黒というものをつけることを知らない土地にも、やっぱり雀孝行の昔話はあった。そうして姉妹二人の小鳥が、ちようどお化粧をしていたときにかわりに、その二人も酸漿ほおずきとマハツブのように、めいめいの着物を織ろうとしていたという話になっているのである。たぶんはこのほうが一つ前のもので、のちに齒黒の風習がひろく流行してきてから、それが珍らしいのでこの点だけを、話しかえることにしたのだと思う。そうにちがいないとまでは言えないが、ともかく自分の今知っている三つの実例をならべて、この話をおわることになしよう。

七、島の女性と労働

その一つは鹿児島県の南の島、奄美大島あまみおおしまで採集せられたもの、雀すずめと啄木鳥きつつきとの姉妹は奉公ほうこうに出ていて、家に年とった親をのこしていた。ふたりが相談して飛白かすりを織って着ようと、そのしたくをしていると、親の大病を知らせてきた。啄木鳥はその緋かすりのきものを織りあげて着てかえろうといい、雀はまだ染めない柶かせい糸いとを頸くびにかけたままで飛んでかえつ

た。そのために雀だけは親の死目しにめにあつてよろこばれ、啄木鳥はどうとう間にあわなかつたので、今でも飛白の好い着物は着ているが、いつも枯木かれきをつついて食べ物を見つけるのに苦労をしなければならぬ。雀は孝行を神にめでられて、自由に米が食べられるのだが、そのかわりには頸に栲糸をかけたままで、いまでも雀の首のまわりは白いのだという。

これとだいたい同じ話が、奄美大島のとなりの喜界島きかいじまという島にもあつた。ただしここでは啄木鳥の代りに、いっぽうを魚狗かわせみだつたといっている。魚狗の羽には飛白がないので、ただ糸を染めてきれいな着物をこしらえるためにおそくなり、雀ばかりが染めない栲糸をかけて、いそいで飛びかえつたから、今でも首のまわりが白いのだと言われている。

それからこの二つの島からずつとはなれた、瀬戸内海の志々島ししじまという島にもおなじ昔話があるが、ここでは不孝な姉のほうを鵜かもめだつたといっている。鵜は器量よしだから、髪をなでついたり化粧をしたりしてから、ゆつくりしてかえつたので親の生前せいぜんにあうことが出来ず、その罰で今も日に三どずつ生水なまみずを吐いて、ひもじい思いをしているが、雀は機はたごしらえをしていた苧栲おがせを首にかけたまま、いそいで飛んできたという話になっている。志々島の若い女たちは、お齒黒はぐろというものをむろん知っていたのだが、まだあのほつぺたの黒い斑まだらが、お齒黒のよこれだという話を聴きいていなかったで、なお以前の栲掛かせかけ雀すずめ

の話をもち伝えているものかと思われる。男は海に出るので島の女たちは、畠の耕作を一手にひき受けるのみでなく、なお、おりおり浜の手つだいもしなければならぬのだが、そういう間にも少しの時を見つけては、苧棒を頸にかけて布ぬのはた機のしたくをしたのであった。町に出てきて反物たんものを買いもとめたり、または仕立屋したてやに縫ぬってもらうなどということは、こういう昔話に笑い興じた娘たちの、夢にも予想し得ないことであつた。それで雀であるが蚯蚓みみずであろうが、すべてこの世の女性はみな布の糸を棒にして、首にかけてあるいたという話が通用したのである。今日はそれにはんして、大ていの女の人の着物は、お金をはらつて買うものとなつてしまった。それだからこういう昔話にも、説明があるようになったのである。つまりは世の中が變つたのである。

三角は飛ぶ

一、屋根の形

今から十七、八年まえに、我^{わが}邦^{くに}にきていたフランスの全権大使^{ぜんけんたいし}、ポウル・クロウデルという人は名のきこえた詩人であった。この人が国へかえろうとするにさきだつて、日本^{えい}を詠じた一篇の詩をつくつて、世に公けにした。その文句はもうだれも覚えておらぬだろうが、各節のおわりの一行に、

ああ 三^{さん}角^{かく}は飛ぶよ

という言葉のあつたのを、どういう意味であろうかと、あの当時のひとはひょうばんにし

たものである。

のちになって考えて見ると、それはべつにむつかしい謎ではなかつたようである。東京は大正十二年九月の大震災にあって、目ぬきの大通りの町屋は、ほとんどみな焼けくずれて、その跡へはまるで以前のものとはちがつた、屋根の平たい堂々たる、ビルというものが建ちならぼうとしていた。すなわち三角はもう飛んでしまったのである。帝都以外の大きな都会でも、家を建てなおす場合には、たいていはこの形をまねて、屋上に庭園があり、運動場のあるような家をつくることができないと、建築家でないように思う者が多くなつた。高いところなどにのぼつて見ると、町の形がまるでかわつて、日本にいるような感じがしなくなりかけていた。それをクロウデルが惜しいことだと思つたのである。

しかし日本の屋根の三角は、けつしてまだ飛び去つてしまつてはいない。田舎はもちろんのこと、大きな都会でも、あたらしい平屋根が目につき出したというだけで、われわれの住んでいる家は、たいていは三角にとがつたままである。ただその三角の形が、だんだんにかわり、またそのちがつた三角が、ひどく入りまじつて、おそろいではなくなつた。それがやつぱり古い美しさの消えて行くすがたとして、惜しいといえ惜しいのである。美しいとみにくいとは、そうかたんには、わたしたちではきめられないが、それよりも

さきに知っておいてよいのは、どうしてこのように日本の屋根の形が、だんだん変って行くのかということ、およびこれからもなお変って入りまじって行くだろうかということであろう。

二、三角の二つの種類

汽車の窓から見れば、だれにでもすぐわかるように、屋根の三角の角度はゆくさきざきでかわっているが、それはたいいは屋根を葺く材料のちがいにもなうもので、同じ草屋根でも土地によつて、すこしは傾斜がちがうけれども、そのちがいは、じつはわずかなものなので、それが板屋根となると、三角のとがりがきゆうに目に見えてかわつてくるのである。中央線というならば、山梨県は小仏のトンネルからはじまり、向うは日野春と富士見の二つの停車場のなかほどでおわるのだが、見て行くうちに屋根の形がいつの間にかまるでかわってしまう。それというのが東のはんぶんは萱で葺いた家ばかりであり、西から西北へかけて長野県に近づくにつれて、板屋根がおいおいと多くなってくるからである。小仏から笹子のトンネルまでのあいだは、甲州では郡内という名をもつて

知られている。郡内の萱屋かやは、山からこちらの東京都西部の民家みんかとは、だいぶん形がちがつていて、横に長い家はだんだんすくなく、二階のある高い家が多くなっているが、それでも三角の角度だけは、両方がおおよそ同じくらいである。これにはんして釜無川かまなしがわの岸にちかい信州境しんしゅうざかいの農家は、粉板そぎいたをもつて葺くものだから、東の郡内やそのつづきにくらべると、屋根がずっと扁ひらたくなっているのである。同じ日本の屋根にも、このいちじるしい形の差のあることは、山梨県だけをとおつて見ても、注意する人にはすぐわかるのである。

そうしてまた、この理由ほど、かんたんなものとはそうほかにはない。板屋根を葺くのは粉板すぎといつて、もとは杉すぎだの檜ひのきだのの柁目まさめのよくとおったふとい材木を、鉋なたのような刃物はものでそぎわつたうすい板であつた。これを釘くぎで打ちつけるとひびがはいりやすく、またそこから腐りやすかつたので、板屋根には釘くぎをつかうことを非常にきらつた。その代りには、たくさん重ねた粉板のうえを、枝のある木でおさえたり、または石をのせたりして、その板の風に吹きとばされることを防がなければならなかつたのである。屋根の斜面を急にして、あの三角をとがらせておくと、石や材木がすべり落ちるかもしれない。それで板屋根だけはどうしても、できるだけ平たくする必要があつたのである。

三、板葺きの変化

これとは反対に、萱^{かや}で葺^ふく屋根のほうは、あまり平べったくしておくとか雨の水がよく流れず、萱の茎^{くき}のあいだに湿気をもつて、やわらかくなり、また早くくさって、葺きかえをしなければならなくなるので、どこか地方に行っても、葺くのにさしかえのなにかぎりは、なるだけあの三角を尖^{とが}らせようとしている。それがこの二つの種類の屋根の形が、だれにも気がつくほど、はつきりとちがっている理由である。

そこでわたしたちの、つぎに知りたいと思うことはこの萱屋根と板葺きの屋根と、二つの葺きかたは二つとも、昔から日本にあったものか、ただしはどちらかが後からはじまつて、他のいっぽうの前からあったものを、変えあらためたのかということであるが、それをまだはつきりと答えられるまでに、日本の屋根の歴史は明らかにはなっていないけれども、まずよつぽど古いころ、今から一千年も千五百年もまえに、もう両方ともあったということは言える。そうしてどちらもだんだん変ってきたという中でも、板葺きのほうは少しずつ後へさがり、萱葺きはつい近ごろまで、数も多くなり、また技術も進んでいた、

ということが言えるようである。

どうしてまた、そうなったのであろうか。その理由も皆さんがすこし考えて見ればわかる。一言いちごんでいうならば、うすく割つて屋根葺き板にするような、大きな素性すじょうの良い木材が、おいおいにとぼしくなってきたからである。日本はめずらしく山によい木の多い国であつたが、国が栄え、人の数がふえるにつれて、家具にも家の柱や梁うつばりにも、使い途みちがますます増加してきて、りっぱな木をそいで屋根などに葺くことが、なんだかもつたいないように考えられはじめた。それで山間の樹木の多い村々までが、大きなものはみな世間へ送り出すようにして、自分たちの屋根葺きには、なるだけ小さいので間に合わせるようになった。以前の粉板そぎいたの大きな型のものになくなって、寸法のごくみじかいこけら板うらこというものを、たくさん用いることになつたのである。コケラというのは魚うおなどの鱗うろこのことであつたらしい。これも上手じょうずに重ねて葺けば、なかなか見ごとな屋根ができたが、それには、遠くから専門の職人をたのんでこななければならぬ。ゆえにたいていはかんたんな葺き方になり、毎年毎年損じたこけら板だけをさしかえて、多くの小石を載せておさえておき、またはとんとん葺きなどと称して、かまわず釘くぎで打ちつけるような、そまつな葺き方はじまつたのである。

四、一種のピラミッド

屋根を葺く材料の種類は、我邦では思いのほか数多いのだが、だいたい今でもこれを二つにわかつことができる。その一つは板葺き一派の三角のゆるい扁たいもので、ささ板やこけら板で葺いたのから、檜はだ、杉皮の屋根まであり、現在さかんに建っている瓦葺きもその中にふくめてよい。いっぽうはまた萱屋根だけでなく、藁やその他の植物で葺いたものがいろいろあつて、それはいずれもみな三角がうんと尖っている。北陸地方へ行くと、前のほうを総称してシユク屋というが、この名はもと、宿駅の家ということで、街道往還の左右の家だけは、なるべくこういう屋根ばかりを、葺かせることにしたのである。これに対して、他のいっぽうの総称は、草屋根またはクズ屋というところが多い。草屋根はもと萱で葺くのがおもであつたからかも知れぬが、クズ屋というのはどういう意味であらうか。わたしの想像では、やはりありあわせの屑物を利用したということ、さいしよはただ臨時の小屋、または貧しい人たちの住居だけに、こういう屋根を葺いていたものとおもう。愛知県の日間賀島などでは、もとは大小をとわず、すべての草

屋根をイホリといていた。すなわち秋の田のかりほ苧穂のいほも同じで、かりの建物たてものばかりに萱や藁、その他の不用品をつかつていたので、こんな名が今ものこっているのかと思う。ところがこの草屋根の葺きかたは、中世からこのかたひじょうに進歩した。よその民族の田舎家いなかやとくらべても、または素人しろうとの仮小屋かりこやなどくらべて見てもすぐにわかるが、日本の萱葺きには、たいへんな手のかかった見ごとなものがすくなくない。専門の職工には、技術のすぐれた者が多く、鋏はさみとか、槌つちとか、こて板とか、その他いろいろの道具の使い方をかんがえ出して、二尺三尺の厚さにはしを切りそろえ、あの美しい屋根の形をつくりだしたのは、空中の彫刻といってもよく、これとくらべあわせると、板葺きはむしろ単調に見える。

東京都下でも多摩川たまがわ上流の山村、千葉茨城二県の沼しやうたく沢地方、または奥羽おううや越後えちごの一部などにも、りっぱな作品がいくつとなくのこっている。建物の大きさからいっても、住す心地みこちの上からいっても、また保存年限の長さから見ても、こういうのは、もうけつして苧穂かりほのいほではない。屑屋くずやどころか材料にえらい費用がかかっている。つまりわたしたち日本人は、あの小さなぼやぼやとした草小屋から、だんだんと工夫くふうをかさねて、色といいまた形といい、今までまるで見られなかった美しいものを築きあげて、それを全国にふき

ゆうさせたのであって、だれの力ということがたずね難く、また毎日見なれてしまったゆえに、これをあたりまえのように思う者ばかり多くなったが、人が集まって大きな事業をなしとげ、かつ生活を改良したという点から見れば、これもまた民族の一つの記念、一種のピラミッドであつたと言うことができる。

五、ユイに屋根葺く

しかも大震災のような、意外の激変もなく、また西洋文化の影響もなく、ただ眼の前のなんでもない原因から、この草屋根の三角も、やがて飛び去ろうとしているのである。みなさんが親になり、祖父母になるころには、もう日本の子どもたちは、絵や写真で見るか、または山奥へでも入って見ぬ限り、この見ごとな大きくず屋というものは、眺めることがむつかしくなるであろう。物がなくなつてしまえば説明もよくはできず、また説明をもとめる者もすくなくかもしれぬ。それだから今のうちに、もっと注意をはらい、またわたしのするような話を聴いておくひつようがあるのである。

どうして草屋根の、あの三角は飛ぼうとしているか。これもすこし考えて見ればわかる

ことで、つまりは材料の萱かやがもうないのである。萱にはいくつかの種類があるが、まず東京でいう薄尾花すすきおばなのことで、郊外のわたしの家の狭い庭でも、お月見つきみに挿さすくらいなら、栽うえなくとも自然に生える。しかしそれを苅かりあつめて一軒の屋根を葺かくには、萱野かやのというものが近くになればならぬ。大きな家ならば、五年三年の前から心がけて苅かりためておくか、また遠くへ人をやつて、えらい入費をかけて集めてこなければならぬ。厚く丈じょう夫ぶに葺いた萱屋根は、三十年以上はもち、たくみに挿さぎをすれば、五十年は葺きかえをせずともよいと言われている。その代りには、さあ葺くべしとなると、ちつとやそつとの萱野では追い付かぬのであつた。それで本家とか旧家きゅうかとかいうような、もつとも念入りの葺きかたをしていた家から、最初にこれをやめて瓦屋かわらやになろうとしている。

もう少し小さい家々では、この草屋根をつづけて行つたために、ユイという団結をつくつていた。ユイは土地によつて萱講かやこうとも、また萱無尽かやむじんともいう者があるが、その目的はできるだけ少ない萱野から、組じゅうの屋根の萱を得ようというにあつた。屋根は天気を見さだめて一日のうちに葺くから、手伝いもいるし、縄なわや竹も集めねばならぬが、それだけならば傭やといも買ふことができる。萱ばかりはなんとにしても、ユイの共同によるのほかはなかつたのである。

ユイのじつさいを今すこしくわしく言つて見ると、たとえばここに三町歩^{ちやうぶ}とか四町歩とか、ちやうどふつうの家の屋根が二戸^こ葺けるだけの、萱の生える共有地があるとする。それを家々から勝手にでて苅るならば、一戸はさておき半分の用にもたらぬほどの萱も、持つてくることができぬであろう。よく葺いた萱屋根は、大よそ三十年ぐらいはもつとすれば、順番をこしらえて、ある家はいくぶんか早めに、またある家はなんとかして少し長くしんぼうすると、五十軒以上の農家が、たったこれだけの萱野によって、つぎつぎに屋根を葺いて行くことができるのみか、仲間が助け合つて、五十束^{そく}七十束と苅りあつめてくれて、苅り時をおくらすしんぱいもないのである。萱が野山にいくらでもあつた時代にも、こういう助け合いはひつようであつたが、萱野が狭くなつてくると、いよいよこのユイを親密にしなければならぬわけである。

六、藁の一つ屋

村についた共有の萱野というものは、広くなる場合などはひとつもなく、狭め^{せば}られる原因はいくつもあった。第一に土地がはんじようして、働く人が多く、食べる人が多くなれ

ば、だれしもこういう野原をひらいて、なんか作つたらという気になる。ことに瓦で屋根を葺いた家が、何軒でも新築せられるようになる、萱野などはなにかもつとよい利用の途がありそうなものだという考えが起こりやすく、以前の手近なところの萱野はなくなつて、だんだんとべんりの悪い、遠い山の上などに苅りに行かねばならぬことになる。家をぜひと萱葺きにしておりたい人は、自分の持地のなかに生やして置けばよいのだが、それをするは大へんな地面の費えだから、やはり多くの仲間のユイによつて、材料を集めてくるひつようがあり、そういう希望者が少なくなれば、たとえ自分ひとりほどのように萱屋根をつづけたくとも、しまいに断念するのほかはないのである。

村に生まれて萱葺きの家にそだつた者は、年を取ると、みようにこの住心地の恋しくなるものである。ことに都会のさわがしい音につかれて、なんとかして今一ど、しずかな葺屋の雨の音をきいて睡りたいと、思っている人はぞんがいに多く、げんにわたしなどもその一人であつた。ところが今から三十年まえ、まだ東京の郊外が武蔵野であつたところに、今の多摩墓地のすこし東のほうに、たった一軒だけこの萱葺きの家を新築した人があつた。そのじぶんには、まだ武蔵野は薄だらけであつたが、つぎの葺きかえの時のことを考えたものか、この家では周囲を広々とかこいこんで、いちめんに萱を生やしていた。おもしろ

い考えだなど思つて、散歩のついでにはおりおり通つて見たが、どうも長くは住みつづけていなかったようである。このようなことをすれば、出入りに不便で、さびしくてしかたがなく、第一に火の用心がわるい。地面が安ければあそばせて置いてもよいようなものだが、いくら萱野^{かやの}でも、管理にはやはり手数をようする。春はいちどか二度火を入れなければならぬし、秋はまたすっかり刈り取つてしまわねばならぬ。それをおこたると古株^{ふるかぶ}はすぐ弱つて、ほかの地へ出店^{でみせ}を出してしまうからで、いつでも葺^ふき萱^{かや}を得られるようにするには、やはりユイの協力は欠くべからざるものであつた。むりに一人でこういう家を維持しようとする者は、金にこまらぬ人のなかにはまだあるかも知らぬが、それらはびつくりするような高い価^{あたい}を、以前は無代^{むだい}であつた萱^{かや}のためにはらっている。ふつうの農家ではとてもそのまねはできない。だから今日でもまだまったくなくなつてはいないというだけで、萱野はもう一つのおごりになりかけている。それを以前のままになお持ちつづけてこられたのは、一つは改革のそうたやすすくないためと、今ひとつは我^{わが}邦^{くに}に発達した、ユイという団結のおかげであつた。

七、古代瓦と今瓦

日本の畠^{はたさく}作農業の進歩、ことに稲いがいの穀物の栽培は、二百年このかた、ひじょうにさかんになってきている。萱の生産地のせばまり、または遠くなったことも、けつして近年にはいつてはじまったことでない。ただそれが屋根の三角の角度を、こんなに扁^{ひら}たしたの新しいことで、手みじかにいうと、瓦^{かわら}がわたしたちの手にはいりやすくなった結果なのである。

瓦をもつて屋根を葺く習わしは古いが、もとはその利用者がかぎられていた。寺を瓦^{かわら}葺きといった言葉が伊勢神宮^{いせじんぐう}にもあつて、宮^{きゆうでん}殿や神のお社^{やしろ}でさえも、さいしよは瓦をつかつてはいなかった。それがおいおいと広く行われるようになってからも、ふつうの人民には許さなかつた地方は多く、たとえ許されても、人はそういう目に立つことはしなかつた。それが明治の維新を境^{さか}いにし、だれが瓦で屋根を葺いても、すこしもかわぬことになったのである。土のなかから出てくる古代の瓦にくらべると、堅さも重さも、また大きさも、ともに大ちがいな安物ではあるけれども、安いだけに人がもとめるに手がるであり、これを遠くへはこぶことは、損じやすくて不便であつたゆえに、かえつて村々に小さな瓦を焼く竈^{かまど}が数多くできて、いつそうそのふきゆうを早くした。わたしなどの若い

ころには、どの地方へ旅行して見ても、瓦を焼くけむりの見られないところはなかった。燃料はたいいてい松の枯枝かれえだで、土はそこいらの粘土ねんどを持ってきて、水でこねて型かたにとった。瓦の型などもこのさいに大いにかわり、雌瓦めがわら雄瓦おがわらを一つにした、浪型なみがたのものばかり多くなったようである。瓦屋根の葺き方もおどろくほどかんたんになった。もとは板屋いたやの上に土をうんとおせて、それを瓦で覆うようにしていたので、その重みがかかり、よつぽど丈夫な柱じようぶやつかをもつて支えなければならず、したがって屋根の三角もとくべつの形でなければならなかったが、のちには材木を儉約して、むしろこのようなかるい瓦をよろこび、土もあんまり使わずに、そつとおせて置くようになって、屋根の形は板葺いたぶききとひじょうに近くなった。そうして握り拳にぎこぶしでたたいて、何枚わたたというような瓦なのだから、火事にあつても、また寒さに凍こおつてもすぐくだけで、火の用心にはあまりならなかった。そうしてまだ昔の瓦屋かわらやのじぶんの安全感だけが、のこっているらしいのは少々あぶない。火事の話もみなさんのためになるのだが、直接に三角とは関係がないからあとまわしにして、ここにはまず草屋根の角度が、すこしずつ変ってきたことを話して見よう。萱野かやのの萱がだんだんと足りなくなつてきて、木材ももう少ないのだから、ふたたび板葺きにもどることもできず、瓦はまだそう容易には手にはいらぬという時代には、ふつうの日本人は

いろいろと、ほかの材料をかわりに使う工夫をした。青森県の十三潟じゅうさんがたのような、広いあさい沼ぬまのほとりに住む村々では、細い一種の蘆あしを茹ゆつてきて、葉をむしり棄すててそれで屋根を葺ふいている。栃木県の西部のように、麻あさを多くつくる地方では、その麻あさがら稗こぞをもつて葺く風習がはじまった。その以外にも、ごく細い篠竹しのだけ、紙を製するところでは楮こうぞの小枝、養蚕ようさんのさかんな土地で桑くわの枝、または笹ささの葉で葺ふいている例もわたしは知っているが、そういうのは全国いっばんということができないであろう。これに対して藁わら葺ふすなわち藁わら葺ふきの家というのは、今やすでにどの府県に行っても、見られぬところはないというまでに広がっている。そうしてこの藁わら葺ふの三角は、また少しばかり萱う葺ふきとちがわずにいられなかったのである。

八、新式の藁屋

藁屋わらやという言葉は、古くから我邦わがくににあつた。

世の中はともかくともありぬべし

みやも藁屋も限りなければ

こういう歌もわたしたちは記憶している。しかしそれだからいまのような藁葺きが、昔もあつたろうと思うのはあやまりである。昔の藁屋は仮小屋で、それにいつまでも住んでいなければならぬのは、よっぽど貧しい人だけであつた。その点は、さいしよの藁葺きでも同じだったかもしれないが、これがいったん発達して、専門のよい職工が出て国々をまわつてあるき、ついに今見るような大きなみごとな草屋根を、たくさんにのこして置いてくれた後に、こんどは材料の萱の不足ということがはじまって、何かかわりのものを使わねばならぬようになり、あらためてその技術をあらたな藁葺きに伝授したのである。昔ふうな藁の仮葺きは、今もまだそちこちに見られるが、それとこの新しい藁屋とのちがいは、誰の目にもはつきりとしている。皆さんはただ注意して見ればよいのである。

新旧二つの相異は、いろいろとあるが、一番よくわかるのは葺き草の方向である。今でも年々あらたにする屋敷神の祠、または山小屋や積み物の雨覆いなどは、たいていは藁の穂先のほうを外へ出すことにしている。あの秋の田の苧穂のいほなども、多分はこれと同じかつたろう。これをまた苦葺きとも呼ぶのは、舟の苦などもこの葺き方だったからで、田舎ではまた逆さ藁ともいって、ふつうの住居にはきらつてこうは葺かず、ちようどその反対に根本のほうを軒先に向けて、はしをきれいに鋏で剪りそろえている。それか

ら今一つ、ひと目で氣のつくちがいは三角の頂点、すなわち屋棟^{やのむね}の葺き合わせかたが、近ごろの藁屋ではひじように複雑になっている。もとはかんとんに四方から葺きあげて中央にまとめ、上へ一束^{ひとつたば}の藁をひろげてのせてもよく、またはしまいの藁を折り曲げても置いたか知らぬが、こんな事では長くはもっていない。それでどうすれば、ここから雨や雪が入ってこぬようになるか、これには永い間、家を建てる者がみな苦心したかと思われる。いろいろの考案が萱葺きの盛んだったところから、この点については試みられている。たとえば竹や木をわたした上に土をのせ、その土が流れてしまわぬように、根の強い植物をうえたのが関東地方には多く、東北のほうではまた野芝^{のしば}を土とともに切ってきて、屋の棟^{むね}にかぶせて置くものがあつて、ときどきはそこに百合^{ゆり}の花が咲き、または小松^{こまつ}などの生えているのを見かける。あるいは箱棟^{はこむね}といって、舟の形をした木をさかさに伏せ、もしくは瓦をもつてこの部分だけをつつんだものもあるが、日本全国を通じてもっとも多いのは、やはり萱とか藁とかの同じ材料と、多量の竹木^{たけき}とを利用して、横に枕のように棟の上をおおうたもので、いちいちくわしくは話していることができぬが、これにも土地よつての幾つもの種類がある。写真にとつてくらべて見てもおもしろい。だいたいここは風あたりが強くてそんじやすく、またそうたびたびは登って行きにくいところだから、もつ

とも念入りに丈夫じょうぶに、かつ遠くから見た目も好ましいように、作りあげようとした努力がよく現われている。屋根屋やねやという専門の職人の、腕をふるう領域はますます多くなり、これまで久しい間農民の持ちつたえた技術は、これと反比例に、おいおいと隠れてしまったのである。

九、天井と鼠

家も食べ物や衣類と同じように、以前は皆めいめいの手製であつた。国の文化が大いに栄えてからのちも、都の宮殿とか、神のお社やしろとか城とか寺とかには、遠国の職人をよび寄せて働かせたが、それは全体からいうとわずかなことで、その他の建築はみな土地かぎり、結ゆいでたすけ合い、また手伝たでいにきて、なんとか安楽に住めるようなものを作りあげていたのである。大工だいくを番匠ばんしょうというのは徴用ちようよう工こうという意味であつた。壁をぬる人をシヤカン（左官）というのは、その補佐役ほさやくということであつた。それで地方によっては屋根葺ききのことを、左官と呼ぶところもあるわけである。その番匠と左官とが、たくさんの弟子を取り、大きな工事ならば皆出てはたらき、ご用がすんでしまつて手があまると、それぞ

れ縁故のある土地にかえつて、おいおいにふつうの人の家も造ることになったのだが、それでも飛驒ひだの白川しろかわのような辺鄙へんぴな土地では、たった一人の大工だいくがきて棟上げむねあまですむと、あとは村の人にまかせてかえったそうである。土佐の山村でも、隅葺すみふきさんというただ一人の屋根葺き職を頼み、隅すみのむつかしい仕事だけを引受けてもらうことにしていた。だから土地土地の昔からの葺き方などが、しだいに改良せられつつも、なお久しく残り伝わることでできたのである。

専門の職人には職人氣質といって、なるたけ手の込んだ見ごとなものを作りたという念がつよい。それからまた腕に自信があるので、土地の者の経験をかるく見ようとするかたむきもあつた。そうして思わぬ失敗をした場合もないとはいわれぬのである。そのおかしい一つの例をあげるならば、萱葺き藁葺きの家には、もとは板天井いたてんじょうというものがなかった。家にはいると屋根裏の見えるものが多く、そうでなくともツシという竹や木の棒をわたしただけの二階で、風が吹く日には、すき間まからごみが落ちてきた。板をびっしりと張はつたほうが見たところもよいので、大工にすすめられると、たいていは板天井をつけ、ことにしたが、草屋根のためには、これは損なことだった。こういう家では、よほど大きな破風はふの窓を開いて風通しをつけないと、家のなかのしめった空気が上に滞とどつて、屋根

のいたみが早いだけでなく、炉の煙をじかにあてて燻^{いぶ}して、防腐をすることもできなくなる。もつとこまったことには、天井は鼠^{ねずみ}の牧場となり、猫^{ねこ}をたびたび征伐^{せいばつ}につかわさぬかぎり、鼠^{ねずみさん}算^{さん}といったたちまち繁殖してしまふ。それをまた狙^{ねら}つて青大将^{あおだいしょう}という蛇^{へび}がそこから入ってくるのだが、この蛇は屋通^{やどお}しという別名もあるくらいで、しばしば屋根の萱や藁のわずかなすき間から出入りして、飛んでもない大きな穴を明けるのであつた。そうして草屋根の保存年限が、三十年のものなら二十何年しかもたなくすることを、板天井を張る大工たちには、氣づかぬ者もあり、または氣にしない者もあつたのである。

一〇、昔の屋根縫い

草屋根が次の葺^ふきかえまで、何十何年ほど持つかということとは、労力のうえから見ても農家には重要なことであつた。それに入用な人の手は、ユイによつてたやすく得られるにしても、耕作のあい間^まにそれだけの労力を、村としては余分に出さねばならず、保存の年限がみじくなればユイは小さくなり、したがって一人がたくさんに出て働くことになるからである。萱野の萱がたりなければ、いくらでも藁を代りに使えばよいと、いうことの

できなかった理由もそこにある。藁のなかでは小麦稈こむぎからのよくすぐったのがいちばん萱に近かったが、それでもいっぽうの三分の一も持たない。大麦や裸麦はだかむぎは藁のたけもみじかく、且かつぶよぶよしているのもっと早く腐れる。稲の藁は、日本でこれほどいろいろの役に立つものはないのだが、屋根葺き材料だけにはまったく向かない。しかしこういう不適當な代用品でも、萱が手にはいらぬときまれば使って見るほかはない。幸いなことは、農業には藁類の堆肥たいひがひとつであつて、三種の麦稈などは、刈かった年のものを積み肥ごえにするよりも、さんざんに雨に打たせ煙にいぶして、もろくくだけやすくなったもののほうがよかつた。そこで農家では鼻の穴をまつ黒にして、八年十年というみじかい期間に、たびたび屋根をおろしては葺きかえたのである。こうなつてくるとむろん人の手がたりない。家の者やごくしたい人は働かずにはいられないが、その他の労力は外からくる者を雇ってくる。関東地方では茨城県の筑波つくばとか、遠くは福島県の会津あいづ地方のような、田畠がすくないか、または秋の農作のはやく片づく村から、群れをなしてその屋根葺き職の者が出てきて、大よそけんとうをつけ、または前の年からやくそくをして、今年葺きかえる家々を廻っていた。すなわち彼らもまた農民の片商かたしょうばい売なのだが、数をかけているのかんたんな技術をおぼえ、また道具をそろえていて、ふつうの人よりは仕事がはやく、手ぎ

わもよく葺きあげたのである。ただそのためにユイという一つの労働組織はくずれたのみならず、わたしのいう手製建築法の、さいごの部分までがほろび去ったのはやむを得なかった。

伊豆の八丈島などでは、屋根葺きおわりの日の祝宴をニイトメ祝いといっているが、これが縫いとめであることはもう気づかぬ人が多くなった。むかしは草屋根も菅笠などとおなじく、葺くことを縫うといっていたのである。屋根の三角の斜面には、まず何十本の木竹をくくりつけて、それをヌイボクといった。それから竿のさきに穴のあいたものへ縄をとおして、助手が下からさし出すのを、上にいる葺き手が取りあげて、それをもつて萱藁を縫いぼくにむすびつけるのが、ちょうど着物を縫うのと同じだった。それでその長い竿を針といい、今でも沖縄などではこの助手の役を針刺しとよんでいる。爺は屋根にあがり婆は下から針をさしたということは、昔話ではまだ語られているが、今日の屋根屋は葺藁をふかく積みかさね、要所要所を手持ちの縄でくくるだけで、もう一針ずつはこんで行くような悠長なことはしない。

一一、新らしい三角

屋根の三角は萱葺きが藁にかわつてから、自然にすこしずつがって来ぬわけには行かない。わたしの生まれた家なども小麦の稈からをもちいて、かなりじょうずに葺いてあつたが、その角度は関東の古い大きな萱屋かやとくらべると、気づかずにいられぬほどの鋭角であつた。全国をくらべてみると、佐賀県の北海岸地方から、壱岐いぎその他の島々が、ことにとがっているように思うが、ここはあるいは大麦の稈を、つかっているのではないかと思う。斜面が急になれば棟むねも高く、のぼつて葺くのは不便が多いのだけれども、すこしでも長くその屋根をもたせようとするには、こうして雨水を早く流し、藁のあいだに湿気をふくませぬようにすることが必要であつた。島では全体にとがった屋根が多いようである。鹿児島県南方の島々などは、萱をまだ葺くものもあるかと思うのに、家が小さなわりに高くどがり、その上に、屋敷に小屋のかずが多いので、高くから見るとかわった印象を受ける。これもわたしは雨が多く湿気が強いから、こうして水を切るひつようが一層大きいのかと思つている。今後建築の材料が一変してしまわぬ以上、この三角などはなかなか飛んで行つてしまわぬであらう。

あるいはまた屋根の角度はあまりかえないで、材料の加減で保存をよくしようとする試

みも、職業屋根葺きになつてから、いろいろと実行せられるようになった。たとえば、南に面したよくかわく側は小麦藁、日陰になるほうは萱とか、丁の字形の屋根の谷になる部分には木や瓦を当てるとか、場所によつて使うものをちがえ、または始めから材料を混合して、萱は半分三分の一というのもあり、または上葺きを萱にして、下の厚みは藁その他のものでつけるというようなものもある。むろんこういう巧者なことは素人にはできない。職人はまた腕前をしめすべく、棟や軒の端の切りそろえに、藁とか篠竹とかの切り口を、順序よくならべて見せている。関東東部の田舎をあるく人は、すこし気をつけていれば、この例がよく見られる。

石川県の東部を汽車で通ると、笹の葉をたくさん葺きこんだくず屋が大部分ある。これなどもただ材料の不足をおぎなうためだけでなく、こうすればいくぶんか屋根のもちが良いのであろう。奈良県の東半分から京都府の一部へかけての、屋根の葺きかたには特色がある。これは稲藁を材料に使つたほとんどただ一つの例で、遠くからながめた白っぽい色もかわつてゐるし、家の形もめずらしく、三角がかなり急であるが、これなどは萱の欠乏をおぎなう目的で、はじまつたものではなさそうで、下にじゅうぶんな萱を葺いた上に、うすく稲藁が覆うてあるのだから、美観を主としたもののようにな思われる。屋根の形も四

ほうきでなく、切妻きりづまと称して前まえ後うしろは壁になったものが多い。こういう形の家がかず多くあつまって、建っていた時代の風景は美しかったにちがいないが、今日はもはやさまざまなものが入りまじって、何かただわたしたちの理解を困難にしているようにしか見えない。

一一、江戸の三角

都会も最初のうちは、屋根の形や葺ふきかたがおそろいであつたらしいことは、火事にあわないいくつかの小さな町の、家並やなみを見ても大よそは想像し得られる。それが、あとからあとからと人がはいつてきて、今のように大きな市街になると、とても統一は取れなくなってしまうのである。そういう中でも、土蔵造りどそうづくりという瓦葺かわらぶきなどは新らしいもので、大きな商人の多量の財貨をかかえた者でないと、必要もなく、また持ちこたえることができない。しかし火災に対して少しでも安全なのは、このほかにはなく、ことに市民の半分は借家人しゃくやにんであつたために、家は焼けるものと始めからきめてしまつて、火事があると身のまわりの物を持つて、さつさとにげて立退たちのくさんだんばかりしていた。これが東京

などの大都会に、大火の多かった原因の一つで、そうしてまた屋根の三角が、いよいよ不揃いなものになる種でもあった。

東京はその地勢からいうと、木がすくなく萱や葦が周囲に多く、自然にまかせて置けば草屋根の大きなものが、幾らでも立ちつづくべき御城下であった。『慶長見聞集』という本を読んで見ると、今から三百四十年ほど前の、慶長六年霜月二日、江戸丸焼けという大火があつたのち、幕府は命令をだして草葺きをあらためさせ、新築はなるべく板屋根にするようにと指図した。火事の用心に板葺きというのはおかしいが、その板の上には蠣の殻を多くのせて、火の子の燃えつくのを防がせることにしたのであった。蠣殻はこの海岸の一带に多く産し、瓦はまだふつうの人が利用するまでに、普及していなかつたからである。この際に大通りの本町二丁目に、滝山弥次兵衛という金持があつて、家を新築するのに町に面した屋根だけを瓦で葺き、棟から裏のほうは板葺きにした。それがめずらしいといつて遠くから見物に来る人が多く、半瓦の弥次兵衛という綽名がつけられて、大評判であつたという逸話も伝わっている。

皆さんが多分おどろかれるだろうと思うのは、この慶長の大火事のころまでは、江戸の市中には棟の高い大きな家が多く、そのてっぺんには鳶だの鷺だの、また鶴の鳥だの、

巢をくつたのが見られたということである。板葺きの三角は平たいから、どんなに大きくてもそう棟が高くならない。またこの時分は二階屋というものも少なかった。だからそういう鳥の巢のあったのは、萱屋根の上に棟押えの木を組んでのせたもので、現在奥多摩の山村などにある農家よりも、今一かき偉大なものが、昔の東京市内には立っていたので、それがこの大火に焼けて、もうふたたび造られなくなったのである。しかし萱葺き藁葺きの家が、これを限りに全くなくなったのではないこともろんである。現にこの時から百二十年の後、享保十二年の大火事の翌年にも、藁葺きの新築は禁止するというお触れがでており、そのまた次の年には、なるべく下地総塗りの家作、すなわち今いう土蔵造りを建てよという命令も発せられた。それにつけくわえて、「但し土留め迄に蠣殻さし置き候分は勝手次第」とあるから、屋根はまだ瓦ではなく、ただ板の上に土をのせて、火の用心にしていたのである。『塵塚談』という書物は、ちようどこれから少し後に生まれた老人の、若いころの見聞をしるしたものだが、これには目抜きの大通りだけでなく、山の手端ばしの武家町家ともに、こけら葺きに蠣殻をのせた屋根がふつうだったと出ているから、ところどころには、まだ小さな藁屋だけはのこっていたのである。

一三、經驗と実験

蠣^{かき}の貝殻^{かいがら}をのせた板屋根は、海近くの村へあそびに行つて、見たことがあるという人は多かるう。あんなみすばらしいものはないと、わたしなどは思っているのだが、それがこの東京都の、もつとも本式な屋根であつた時代も一度はあり、さらにその一つ前には、これすらめずらしかつた時代さえあるのである。やはり江戸の初期にできた『老人雑話^{ろうじんざつわ}』という本には、「昔は江戸中に蠣^{かき}殻^{がら}葺^ぶき四、五軒のみ。近年は大方^{おおかた}蠣^{かき}殻^{がら}葺^ぶきに成り、これも火の用心よろし」とある。萱藁^{かゐら}で葺いたり、板ばかりをのせたりした家よりは、なるほど燃えつきかたが少しはおそいかも知れぬが、あんまり安心のできないことは、これから後にもおそろしい大火が、何十回もあつたのを見てわかる。それで最後には瓦ならよかるう、または瓦に限ることになつたことと思うが、これとても屋根にたくさん土を置いて、それが雨の水に流れぬように、すきまなく覆いをするならよいが、それにはまた、じゅうぶんな重みを支えるように、今よりも何倍か丈夫^{じやうぶ}な木柱^{きばしら}を使うひつようがあつた。ところが材木は遠くから持ちはこぶので、成るだけ儉約するために屋根の上を軽くし、ついに今日のような見たところばかりの、屋上制限^{おくじやうせいげん}というものがなり立つ

たのである。あるいは板屋根の上に土や土留めつちどめをのせるといことが、はじめから無理だったのかも知れない。蠣殻はさいしよこの附近に多く取れたというだけでなく、石のちつともない地方だから、これも藁葺わらぶきと同様に、その代りに用いはじめたものらしく、石よりはかるくて都合のよいこともあったが、石にはもと防火の目的はなく、ただ屋根板やねいたの風に吹き飛ばされるのを、押えようというだけの趣意であつて、火事にはむしろこの石のおちてくるのがあぶなく、早くにげ出すひつようさえあつた。それで近頃はただの丸石をころがしておく代りに、うすくて幅広い、よく剥はげる石のある地方では、これを採つてきて、いちめんに敷きつめ、又は桎まさ板いたにまじえて直接に屋根を葺いているものも多くなつたのである。わたしたち日本人の生活は、かんがえて見ると、毎日の改良であつた。以前これは便利だつごうがよいといつて採用した技術で、そのまゝいつまでも使つていられるものは少ない。また最初の通りだと思つていて、知らぬ間に中味のちがつてきてしまつたものも多い。ことに住宅などはまだその改良の半途はんとであり、敵の空襲というような、前にはかんがえて置くことのできなかつた危険と不安とが、大きいから小さいのまで、いくつもあるということがよく判わかつてきたのである。新たにこれに応ずる改良を、しなければならぬ人は皆さんである。どこに親たちの苦心した点があるかを知ると共に、べつにまたどの

部分がまだ十分でなかったかを、見きわめるだけの目と判断とを自ら養うように心がけなければならぬ。

一四、帝都の美観と安全

そこでもう一つだけ古い書物を引いて見ると、これは今からわずか九十年ほど前に、大阪から出てきて江戸を見た人の『こうとごすい皇都午睡』という本のなかに、こういうことが書いてある。江戸は年々ねんねんさいさい歳の御触出おふれだしあるがゆえに、通り筋すじと間筋あいすじは大方おおかた瓦葺かわらぶきとなつたが、はしばしにはたたき屋根が多い。風吹きに屋根板の散らぬように、細い竹を伏せて手ごろの石か瓦のわれをのせて置くところある。すなわちかき蟻からの殻はもう使っていないので、たたき屋根というのは、釘くぎをもつて板を打ちつけた屋根のことである。それからまた、中くらいの場所は表おもて側がわだけ瓦葺きで、いわゆる半瓦はんかわらの家はめずらしくなく、まして場ば末すえには瓦一枚もつかぬ家ばかりであつたが、わずか四、五年をへだてて二度目くだに下つて見ると、もう瓦葺きがよほど多くなつていたから、のちには京大阪の市中と同様になるであらうともいつている。すなわち上方かみがたの二つの大都會では、この時もう瓦屋根がふつう

になつていたのである。

しかし、火事は江戸の花などといって、とくに江戸のほうに多かったのはそのためでもなかつたらしい。あれから瓦葺きが急激に増加してきたけれども、なお明治のなかば過ぎまでは、二千三千というような大きな延焼えんしょうが、毎年のようにつづいていた。一つにはきゅうりよう

丘陵のあいだが狭くて風の道がとおり、また冬分の風がつよいからとも言われていたが、それが近年になつてから、回数はずっと同じでも、焼ける家かずがめつきりと少なくなつたのは、まったく消防の技術の進みといつてよい。その技術というなかには、隊の組織や報知機関の完備、機械の精巧さとか、消火栓しょうかせんの配置とか、道路のとりひろげとか、なおいろいろの要件がふくまれているが、屋根の葺きかたや諸材料の改良が、その一つにかぞえられるかどうかはまだ疑問である。ただ、戦国時代の城下じょうかの町のように、民家は焼けるもの、火がくれば家財をかかえて、逃げればよいものというような考えかたがだんだんと消えて、ここは一国の大切な都だみやこ、これを美しくし、また安全な場所にしよう、焼いてはあいすまぬという共同の念慮が、日増しに強くなつてきているということだけは、想像することができるのである。ただし、そのためには、災害が目の前にせまってから、これとひつしに闘うというだけではまだ足りない。どうすれば日本の国土に相応し、風景

と調和し、無事の日にはこころよい住心地すみごちと、たのしい安全感とをあたえるような住宅の群れを作りあげて、いよいよわたしたちの愛惜あいせきの念を、深くかつ切なるものにし得るかを考えなければならぬ。こういう大きな任務が、これから成長してゆく若い国民にゆだねられている。それはむづかしいことだ、できない望みだということは、まだ皆さんは言い切ることができない。何となれば皆さんは今まで、ちつとも屋根の歴史というものを調べたことがないからである。今まで知らなかったことを少しでも多く知って、それを友だちと共にかんがえて見る必要がある。雨のよく降る日本では、三角は恐らく飛んでしまわないであろう。ただその三角をどういうふうに組みたてたら、いちばん安全であり、また見た目にも美しいかを、きめてくれる人を我邦わがくには待っているのである。

三度の食事

一、人生の宿題

この戦争のはじまる前、二食主義にじきしゆぎといつて、お昼の食事をしない人が、東京などにはかなり多くいた。一体に朝が農村よりはずつとおそいので、仕事に取りかかつて程もなく、やつと身がはいる頃にもう十二時になる。そこでまた一時間ばかりも、息を抜くいぎぬのが何だか惜しい。消化のためにはもしがまんができるなら、あいだを長くするほうがよいというのが、主たる理由のようであつたが、なおその以外にも昔の日本人は、朝と夕の二度の食事ですませていた、これを三度にしたのは新しい習慣だから、もう一ぺん古い方式にもどつたほうがよいという、歴史を重んずる考えも働いていたかと思う。歴史がわたしたちの将来の生活をきめて行く上に、大きな参考になることは疑つて見るまでもない。ただそ

の知識はじゅうぶんに精確なものではないと、何かの折にはまよいが起こつて、うごかない判断の根拠にはならぬのである。われわれの知つておきたいことは、できるかぎり歴史の全体でありたい。すなわち昔は朝晩の二度だけしか、食事をしなかつたというのが、ほんとうであるかどうかをたしかめるだけでなく、そんならまた如何なる理由と事情とで、このごろのように三度三度の食事といい、二度しか食べない子どもを欠食^{けつしょくじどう}児童などというまでに、それがふつうの習わしになつてしまつたか、この点もあやまりなく答えられるような、歴史を学ばなければならぬ。そういうことまでを説明した書物は、まだ出ていないようであり、仮^{かり}にこういうわけだろうと言つた人があつたところで、たしかだと思ふことができれば役には立たぬ。しかし皆さんがなるほどそれは大切な歴史だ、どうかしてその点を明らかにして後^{のち}に、これから二食^{じき}にしてもよいか悪いかを、決したいものだと思ふようになれば、今にかならずその答えは出てくるであろう。どうしても判^{わか}らぬというほどの、秘密な事件でもないからである。私たちが知つておきたいと思わなかつたばかりに、まだ知らずにいる事柄は、食事の問題以外にもいくらかもある。さあ入用だという時になつて、あわててたずねまわつてもそう急にはわからない。

二、お昼とは何か

だから若い人々は、これから必要がおこるであろうと思う歴史を、今のうちにおぼえて置こうとしているのであるが、それを片端^{かたっぱし}からみな覚えるというわけには行かない。何か機会があつて、これはおもしろいと思つたことから、つぎへつぎへと注意して見るのがよい。興味をもつて見たり聴^きいたりしたことは、そんなに骨を折らずとも、いつまでも覚えておられるものだからである。食事の習慣が皆さんのと非常にちがった村々に、しばらく住んでいるということは一つの機会である。わたしがこういう話をしなくとも、氣のつくことはきつと多い。ただ他の土地ではどうかということだけを、つけ加えて一ぺん話して見るのである。

お昼を食べない家は、現在はもうなくなっている。わざわざ朝晩の二食^{しよく}にしようときめた人でも、家の者をのこらずその流儀にさせることは、ちよつとできそうにもない。それほどにも一日三食ということが、今ではもうあたりまえになっているのである。しかし氣をつけて見ると、そのお昼の食べかたというのが、土地により人によりまた仕事の種類によつて、思ひのほかまちまちになつていようである。家に入つて畳^{たたみ}の上に坐^{すわ}つて、お膳^{ぜん}

を出して朝飯あさめし夕飯ゆうめしと同じに、食事をする者は上流の家、または都会に住む人のところでも、決して全部とはいわれぬのである。かず多くの農村漁村はいうにおよばず、町の人たちにも外そとへ出て食べる者はひじょうに多い。食堂とか飲食店とかのできたのはもちろん近い世のことで、その前はみな家から食事を持ってきて、仕事場しごとばの片わきでお昼を食べるのが、今とても働く人たちのふつうの習いである。そうして以前の日本人の仕事は、屋外のものをもっとも多く、日に中ちゆうも家にいて膳ぜんで食事のできるような人は、男はもとより女や年寄りとしよにも、ほんのわずかな数だけであつた。お昼と朝晩の食事とのちがいは、ちよつと考えて見てもいくつかある。第一に家族が順序よく一列にならんで、同じ時刻に同じ物を分けて食べるということがない。次には食事の器うつわもの物が、持つてあるくようにできたもので、家で食べる時とまったく別であり、同時にまた分ぶん量りやうも前からきまつていて、なんでも勝手に食べてよいという品かずがはなはだ少ない。べんとうという言葉はいつごろからあるか、またどういふわけでこんな名をつけたか、わたしなどにはまだわからないが、田舎いなかではこれをモチビルという人が多い。一つの飯櫃めしびつや鍋なべの物を、みんなして共々に食べるのでなく、前からめいめいに分けあたえられて、一人一人が自由に食べるという点は、なるほど餅もちとよく似ている。餅をモチというのも多分はこれと同じく、「持つ」と

いう語から出たものであろう。

三、ケドキは飯時

だから三度の食事というなかでも、ひるめし昼飯だけはよほど形がちがっているの、それが三度ともほぼ同じことになったのは、朝から晩まで家にいられる職業、たとえば小売商の自分でみせばん店番する者、またはしたてや仕立屋などのように家で仕事をする者が、多くなってから後のことである。村にもこのごろはそういう人ができてきたが、もとは市街地だけにしないことであつた。お昼を包んで家のそとへ持つて出て、べつべつに食べるのも食事のうちに入れるとすると、昔は二食じきであつたということがよつぽど疑わしい。たしかにそうだつたとは、今はまだいうことができないのである。

そればかりではなく、現代は食事が三度になつたということも、国の全体からいうと事実にはんする。お昼と朝晩とのようにまるでちがつた食べかた、場所もなかま仲間も分量もうつわ器物ものも、共に變つてゐるものも皆食事だとすれば、村では三度ではなく四度か五度、まれには六度以上も食べてゐる家があるのである。中華民國をはじめ、アジアの南方の国々は

どうなっているか、くらべて見たいと思つてまだできずにいるが、少なくとも日本の歴史においては、この二通りの食事は最初からべつべつのものであった。これから後のちもやはりわけて考えるほうがつごうがよいと思う。そうしてこの家の外そとで食べる分をべつにすると、以前はたしかに二食じきであり、近ごろはまたいろいろの新しい理由から、三食じきの人がしだいに多くなつて行こうとしているのである。

朝と夕との本式の食事を、古い日本語ではケといつていたらしい。今でも朝げ夕げという名を使う人がすこしはあり、また神さまにさし上げるお膳ぜんは、朝あさみけ夕ゆうみけと昔から敬語をそえてとなえている。お昼の食事ひるも昼ひるげということになったのは、なんか特別に日に中ちゅうにこのお膳ぜんをこしらえる場合だけに、限ったことだったろうと、わたしは思っているが、のちのち外へ持つて行くべんとうまでも、昼ひるげだと思ふ人が多くなつてきて、そのケという語の意味が、はつきりとせぬようになったのである。最初の起おきこりは膳ぜん碗わんのような、きまつた食器がケであつて、それで食べる食事だけを、朝け夕けといつたらしいことは、

家にあればケに盛る飯いを草まくら旅にしあれば椎しの葉に盛る

という有名な古歌からも想像し得られるが、いっぽうにはまた家庭生活、日常生活のこともケといっているから、あるいはかえってこちらがさきかも知れない。近畿地方の一部、または中部地方のそちここに、飯時めしどきをケドキという言葉がある。岐阜県の南のほうなどでは、このケドキにたいして、そとでする食事をお茶時ちやどきといつてくべつしている。

四、飯時と茶時

めし時という言葉は東京などでもよく使うが、これもケドキと同様に、家のなかでの食事のことであつた。田の畔あぜにこしかけて黄粉きなこ握飯むすびなどを食べている人に、路みちをたずねたりするときには、よくわたしたちも飯時めしどきに失礼などというが、これは誤りでないまでも一種のたわむれで、むこうでも大ていにつこりとする。メシは本来「きこしめす」また「めしあがる」のメスから出た語であつて、ちやうど「賜たまわる」から出たタベルに相對する敬語であつた。今はクウという語が失敬になつて、そのかわりにひろく用いられているが、もとは目上めうえの人に向かつていったものですなわちお給きゆうじ仕をする者のある食事がメシであつた。戸外の労働にともなう午食ごしょくが午餐ごさんでなく、したがつてメシと呼ぶべきものでな

かつたことは明らかである。この心持こころもちからいつて見ると、一日五度も六度もある農民の食事は、これを飯時またケドキと、そうでないものの二つに分けることができるので、お茶時ちやどきという名は古いものでなくとも、今ならば他の一方をそう呼ぶのがもつとも適している。

このお茶時が以前の世にくらべると、おいおいと回数も多くなり、また欠くべからざるものになってきたことはまずたしかである。最初のケドキすなわち朝飯と晩飯との時刻は、朝日の豊さとよか昇りのぼりと夕日のくだち、日の出と日の入りとを本式としていたことは、神を祭祀のりと申す祝詞というものの中に、そういう文句のあるのを見てもわかる。しかし、これではその中間が約十二時間で、なにも食わずにはとてもしんぼうがでなかつたろうと、今の人の心持では、そう思わずにはいられないようであるが、これにはまたわたしたちの忘れかけている一つのことがあつた。それは体質のちがいと言おうよりも、むしろ今と昔との習慣の差であつたかも知らぬ。以前は一度にうんと物を食つておいて、そのあと一日も二日も食わずにいられる人、またはながい間飲まず食わずに、平気でいられる人がずいぶんと多かつたのである。近世になつてからでも、血氣さかなな壮年の中には、まれにそういう男があつて、溜食ためじきと称して、これも武芸の一つのように、評判にもすればじまんに

もしていた。じつさいまた戦国の時代には、急な使いに遠くへやられるとか、もしくは敵の中にひそみかくれているとか、この特技のひつような場合が毎度あった。こんどの大戦でもおそらく経験したことであろうが、なにか食わぬとすぐに弱ってしまうようなのは、活躍する者にとつてかなり不便だということが、昔は一般の常識であつたゆえに、この溜^ため^め食^くのできる人は重んぜられ、またわざわざその練習をする者も、少しずつはあつたのである。もつともこれによつて食料の儉約などはできず、したがつてまた栄養の低下ということもなかつた。こんなことのできる人は、むしろ大ていは大食いであつた。

五、臨時食物のある日

人が生命をつなぎ養つて行くための食物と、人のよろこび楽しみを深くするための食物と、二つははじめから二通りのものであつたかと、わたしなどは考えている。これがなくては活^いきていられぬことは、そうほう少しも甲乙がないにしても、一方はとにかくに毎日の事であるにたいして、こちらは日が定まり季節があり、またその食べかたやこしらへかたに、一つ一つの特徴があつた。だいたい日時と手数のかかつたためずらしい食べ物^{あと}が後の

ほうに多く、それゆえにまたこれかわり物とも、品しながわりともいつているところがある。家にいてみんなといつしよに食べることもあるけれども、この品がわりは家からそと、飯かりりやまくうち小屋や幕の内または青空の下で、賞しょう翫がんする場合のほうが多く、それはまたわたしたちの親々の、なにか変つた仕事をする日でもあつた。いちばんよく知られているのは神を祭る日、正月と盆ぼんと彼岸ひがん、その他節供せつくといつて一年のうちに何回か、業を休んで祝う日にも品しながわりができた。こういう日の食物は、まず神々に供え、先祖せんぞの靈れいにすすめ、それと同じ物をわれも人も、ともどもに食べるから、ことに楽しかつたのである。それから家々としては婚礼の夜やお産のとき、または年祝としいわいといつて老人の長命を祝う日、いっぽうにはまた人が亡なくなつて野辺送りをする後先あとさきから、しだいに月日つきひがたつて月忌年忌げつきねんきの祭りをする日まで、身うち知合いの人々のあつまつてくるようなさいには、今でもかならずただの朝飯あさめし夕飯ゆうめしとちがつた物を調理して、食べさせなければならぬものとなつてゐる。

しかしそういう場合が、まだこの以外にもいろいろあつたことは、もう心づいた人が多いかもしれない。一年の間にやつと一度か二度、もしくは今一段と稀まれ々にしかおこらぬ事件で、人がそのために全力をふるい、精魂をつくして働かねばならぬようなさいにも、

やはりふだんとはまったく違った食べ物を用意し、かつできるならば酒もそえて、日ごろは一座で食事をすることもないような人たちと共に、あらたまった気持ちでしかも楽しく食べていたのである。かぞえあげて見るとそういう機会は多かった。戦いも昔からその一つで、いそがしくなれば食事どころではなかったろうが、出陣の始めの日とか凱旋がいせんのよろこびの日とか、そうでなくても明日あすは決戦という前の晩とかには、たいていの場合この食べ物が出た。慰労にも前祝まえいわいにも、常の通りの膳立ぜんだてでは、とても引きしまった晴れの感じにはなり切れなかったのである。日本の食事の習慣が、戦国時代と呼ばれている室町期むろまちきのおわりの頃、諸国に小さな戦争の非常に多かった百年ほどの間に、目に見えて大きく変化した理由は、まったく戦時の食べかたの常とちがっていたためであった。

六、狩と伐木と旅行

戦いくさとくらべると事はずっと小さいが、人が家々から出て大きな働きをするという点で、よく似ているものには狩かりくち倉くらがあつた。これにも働く人々の意気込みを統一し、仕事にたいする熱意をたかめるために、やはり品がわりの食い物がしたくせられた。宮みやとかご殿てんと

かの建築や船造りのために、山に木材を採りにはいるときもその一つ、それから木を運びきりけずって、いよいよ船のかわら（底材）をすえ、または新築の棟木をあげる日なども、一同があつまつてこの食事をする。屋根葺きのグシをつつむ日も、もとは同様に大切な日であつた。それとは反対にその家が火災水災にあい、多くのその人がきて働いてくれた時にも、成功不成功にかかわらず、やはり焚出しの握飯と酒とがでた。今では罹災者に給与するもののように考えられているが、本来はこの特別の労働が、かならず特別の食物を以てねぎらうべきものであつたことは、葬式の時などとも変りはないのである。

つぎに今一つ殊に大切なものは、旅行の人々にたいする給食であつた。宿屋は今でも宿泊者をお客といつて、人を招いたときと同じような饗応をするが、そういう設備のまつたくなかつた時代でも、えらい人の一行がある土地を通過するということは、附近の住民にとつては大へんなさわぎであつた。中世の記録を見ればいくらでも実例が出ているが、京都から奈良へというほどの一日路の旅でも、前以て通知があつて、昼の用意をする者がある。駄餉とも雑餉ともこれをいつて、飯は屯食という握飯で、汁は添わなかつたようであるが、そのかわりにはいろいろのご馳走が櫃や長持で持ちはこばれ、上下何十人の者が路傍の森の蔭などで、草にむしろを敷いてゆつくりとこれを食べ、馬や

車くるまうし 牛うし まだが結構まづさな秣まぐさにありついたのであった。あの時代の有力者はそれを一種の見えにして、常からそういう奉仕をする者を、ゆく先々に見つけて置いて、じゅうぶんな手当てあてをしたのであるが、そういう縁故えんこをもたぬ貧乏な旅人たびびとには、旅は誠にういものつらいものであった。昼飯ひるめしをカレイというのは枯れた飯いい、すなわち干飯ほしいを持って歩いたからである。ふつうは清水しみずのそばで水をかけて食べたのだが、涙がその上にこぼれて干飯がやわらかになったと、『伊勢物語』という本には書いてある。何日も何日も、そういうものを食べてゆく旅は苦しかったろうが、それでもこの食べ物食べ物が品しながわりの一つであつたことは、他のすべての場合と変りはないのである。つまり旅行いんぎょというものは戦いくさや狩うや建築工事などと同様に、家で朝晩に食べているものと、すっかりことなつた方式をもつて、食事をしなければならぬ人生の一部なのであつた。

七、農業と屋外の食事

家の内うちと外そとの食事、すなわち親子兄弟水入らずで、気楽に食べてしまう毎日の飯と、なにか事ある時だけにあつまつて、神さまや貴人の前で、またはよそからきた人々と共に、

はり切った気持で食べる物とは、品が当然にかわるばかりか、これを調製する女たちの心づかいもちがい、またその材料の出どころもべつであつた。朝け夕けの常の飯料は、ふつうにはげびつまたは糧米櫃、すなわち今いう米櫃の中に入れてあつて、それにはざつと二合半入りの、大きな木の椀を添えて置いて、頭かずに合わせてそれではかり出した。すなわち一日一人の扶持米を、五合と立てた計算のもとである。これにたいして屋外の食事には、前日から粳を搗くことが多く、飯を炊くにしてもこれだけは白米で、他のいっぽうの常食のいろいろ雑穀をまぜ合わせたものとは別であつた。そういう中でも田植の日の飯米などは、かたい家では早くから精げて俵にして、用意して置くものが今でもある。またはその中へ正月の三方折敷の米を、かならずくわえて炊ぐという風習ものこっている。こういう事実を知りぬいている人々は、だれでもあらたまった気持になって、これを味わわずにはいられなかつた。ことにいさましい労働の後であつたゆえに、なにがなくてもこの田植の日の、厚朴葉飯や黄粉握飯ほど、うまいと思つたのはなかつたと、村から出た人はいつまでも話の種にしている。

毎年くりかえされる農耕の作業のなかで、こういう屋外の食事をとまなうものは、土地によつて範囲が定まつておらず、夏中打ちつづくところもあり、わずかしかなところも

あるようだが、如何なる場合にも田植前後だけは、これはかならず欠くべからざるものとなつてゐる。そうなつてゐる理由はいくつもあるが、手みじかにいうならば、田植は重要な労働であると共に、また一つの祭典でもあつたからである。若い男女はこの日はみな新しい仕事着で、たすきや白手ぬぐいの泥になるのもかまわず、朝は早天から田におりて、日の出にはもう田植唄をうたつてゐた。その唄の章句はかず多くつたわつてゐるが、これにはみな田の神を田にむかえて、その神徳をたたえその御恵みにたよるということはつきり述べてゐる。お昼も近くなると一人の若い娘が、この日の食べ物を頭にのせてはこんできた。中国地方ではこれをオナリド、関東から東北一帯では昼間持ちといつてゐる。オナリドは煮焚き調理をする人ということであり、昼間はすなわちお昼の食べ物をそういうのだが、それも田植唄のなかでは長者のまな娘、どの早乙女よりも美しく化粧し着かざつて、いろいろの好い食べ物を持つてくるのが待遠だといふふうに歌われている。以前はたぶんその人に御田の神の祭りを、奉仕する役目を持たせていたのである。そういう日の昼の食べ物が、そまつない加減なものであろうはずはない。ことに田植にはユイ組といつて、ある地方では近隣のしたしい家々、またある土地では嫁婿の縁家さきなどがいい合せて、たがいにきて助けてできるだけみじかい日数に、きそつて広い田を栽えお

わろうとしていたのである。そういう人たちをよろこび勇ませ、ただ仕事の労苦をわすれしめるだけでなく、その上になお生産の前途にたいして、あかるい希望をいだかせようとするのが、この日の食事の本来の目的であつた。その起こりはよつほど古く、事によつたら他のいろいろの祝いごとよりも、前からあつたかも知れぬのである。

八、三つの変遷

日本のもつとも古い書物の中にも女が田人^{たひと}に食べ物を持って行くという話がのせられている。またそういう婦人になにかふしぎな事があつて、神に崇^{あが}めまたは塚^{つか}に祀^{まつ}つたという伝説は、今でもおりおり田舎^{いなか}にはのこっている。田植の日にお昼を田のへりで食べるという慣^{かん}習^{しゅう}の、昔からあつたという証拠は、もうならべる必要もないほど多いのである。わたしの皆さんに話して見ようとするのは、それが今日の三度の食事、または一日に六度も食べるしきたりと、どういふつながりを持つてゐるかということ、これだけは知つておくと、きつとなにかの役に立つ時がくると思う。食物をもつとも楽しくまたもつとも有効に食べるには、何回にわけ、どう割り振るのがよいかということは、これからもかなら

ず問題になり、そうしてそれをきめる人は皆さんだからである。

三つほど大きな変遷^{へんせん}が、近世になつて始まつたことにまず心づかれる。その一つはこの臨時の食物が甘くおいしく、かつだんだんと珍らしいものに移つてきたことである。第二にはそういう臨時の食物を食べる日が、しだいにかず多くなつたこと、第三にはまた一日のうちにも、その回数が一度以上、二度も三度もくり返されるようになったことである。この三つの変遷のなかで、一は原因が他にもあつたようであるが、二と三とはもつぱら田植の日の影響であつたと見えて、農業以外にはぜひともしなければならぬというきまりがない。それでこのほうを先に見てしまつてから、最後に皆さんとも関係の深い、甘い物の話をすることにしよう。

田植のあとさきには、同じように骨の折れる大きな仕事がいろいろある。二毛作^{にもうさく}といつて田にも麦を作るようになると、稲の蒔り跡^{かあと}は冬にはいるまえに、馬などを使つてさつさと起こしてしまうが、以前は春になりやつと田の水がとけるのを待つて、若い男が総出^{そうで}で一つ一つ去年の苺株^{かりかぶ}を堀りかえして行く。これが春田打ち^{はるたう}で、まず一年の農事のはじめであつた。それから苗代^{なわしろ}のこしらえがすぐにつづき、粃種^{もみだね}をまいてしまつた日にも小さい祭りがあり、種粃^{たねもみ}のあまりを焼米^{やきこめ}にして、袋に入れてもらつて子どもらはよろ

こんで囁^かんでいる。そのつぎは池^{いけ}浚^せえ溝^{みぞ}なおし、田にかかる水の路^{みち}をよく通して、土がだんだんとやわらかくなると、あらくれという大きな土の塊^{かたまり}をくだき、水が漏^もれないように田の畔^{くろ}を塗^ぬりかためて、それへ大豆^{だいず}などを蒔^まくしたくをして置くのである。いよいよ田植となつて代掻^{しろか}きえぶりすり、苗もその日の朝取るのがふつうだったが、いそがしい日には、前日の日暮れに取つて置くようになった。植えみて・さのぼりなどという祝いの日が休みで、そのわずかな期間がすぎると、ほどなく田の草取りがはじまつて、それがまた三番草四番草まで続くのである。田植を農民の重要な祭りだと氣づかなくなつて、昼間の食事をこの日だけに、かぎるわけがないと考え出したのは当然であらう。それで家々の男女のあつまつて働く日は、ユイ組の助け合いはない場合にも、やはり大田^{おおたうえ}植の日と似たような、臨時の食物をもつてねぎらう風習が、だんだんと拡張して行つたのである。

九、昼飯と昼寝

ちようどそれは日の永^{なが}い汗の出る季節でもあつたゆえに、たびたび少しづつの休憩をしないと、かえつて力^{ちから}一杯^{ばい}の働きができなかつた。多くの若い者を使つていた農家では、線^せ

香一本のたつあいだなどという、おかしいほどみじかい時間の昼寝をさえ規則にしていた。卯月うづき八日（旧四月八日）の花の日にはじまり、八月一日の八朔はつさくをおわりとして、毎日それだけの昼寝を、働くひとたちの権利のように思っている地方は今でも多く、ヒノツジという言葉が日の頂上、すなわち日盛りの意味だったのをわすれて、昼寝をヒノツジといい、八朔の日をヒノツリの取上げという人さえあった。田圃たんぼが広々と開かれて好い樹蔭こかげがなくなると、家が近ければ日の辻つじにはかえつてきて、昼間の食事だけは家でする風習も生じたのである。この休憩の時間をきつぱりと切りあげて、はやく人の手をそろえるためには、ここでもわずかな食物をしたくして、食べて立たせるようにする必要があった。それでひるねの前とそのあとの眼さましと、午後は二度まで小昼間こびるまを出すところもできたのだが、それはいずれも人をつかう家の考案で、最初の趣旨からはやや遠いものであった。ひるまがもとは日中にっちゅうというだけの意味であつたのを、いつかその中間の食物の名にしたのは、今わたしたちのつかうヒルという言葉も同じことであるが、これだけはまだ久しいあいだ、朝飯夕食のような家のなかでのきまりの食事にはなっていなかった。そのことはこれから言おうとするコビル・コビルマが、今でも屋外の臨時の食事であるのを見てもわかる。コビルマは疑いなく「ひるま」の小さいものという意味だろうが、現在この名

のおこなわれているのは、中国・四国と九州との端のほうだけで、その他の広い区域にはコビルというものがもつとも多い。東北地方の一部、紀州や北陸の二、三の土地で、これをコビリといっているのは、たぶん昼飯を「ひるいい」という古語ののこっていたためと思うが、その由来がすでに不明になって、信州ではコビレ・オコビレ、富山県ではコブレまたはコバレ、能登半島ではコベリといっている者もある。全国を見わたすと、大体は午後の休みに食べるのがこのコビルで、午前のはナカマ・オナカイリ、またはアサコビリなどの名で呼ぶ土地が多いが、中にはそうほう共にコビリで、これをヒルマデコビリとヒルカラコビリとに、言いわけている大分県のような例もあり、稀にはまた午前のだけがコビルで、午後のをわざわざヒルコビリ、もしくはユウコビリといっているところもある。土地によってややまちまちになっているのは、時をことにして始まったためかと思う。岐阜県の北部山間などでは、六月農事のもつともいそがしい時、午後に二度まで出る小昼の二回目を、オトコビルと呼ぶ名もある。そうかと思うと秋田県の雄物川すじから、津軽地方までのかなり広い区域で、ただ田植の日の豆の粉握飯、または強飯のような食べ物だけを、コビリノママという例もあるのである。

一〇、小昼飯とコバサマ

こういう序ついででないと、もう皆さんが聴きくこともあるまいと思うから話して置くが、まだこの以外にいくつかの変った名前がある。たとえば東京の周囲の村むら里さとから、北は福島・宮城の二県まで、西は甲州と信州の一部、東海道すじは愛知県の東部にかけて、コビルという名はなくてその代りにコジユウハン、またはオコジヨだのオコジだのという語が行われている。これを小中飯こじゅうはんという漢字をあてる人もあるが、じっさいは昼飯ひるめしまたはヒルイイを、しやれてチュウハンと言い出してから後の名である。そうしてこれにもまた午後こひるの小昼こひるをそういうところと、午前のものだけをコジユウハンというところとができていたのである。

次になお一つ、中国地方は鳥取・島根、また広島などの各県に、夏の農作のはげしいころ、三度のほかに出る食事をハシマという名称がある。これは箸間はしまと書き、箸はしで食べる食事のあいだのものだから、そういうのだと説明してくれる人もあるが、これはこじつけで、じっさいは昼間ひるまのマと同じく、ただ中間の食事というに過ぎぬことは、村によっては小こをつけてコバシマ、又はコバサマという人のあるのを見ても知れる。ハサマはすなわち物と

物との中間のこと、今いう間食かんしょくをアイダグイ、またはハサグイというのと元もとは一つである。これも春の彼岸ひがんから秋の彼岸まで、毎日出るところと、盆ぼんの十三日のハシマを以ておわるというところ、田植のあいだだけしか出さぬというのがあり、時刻も午後が多いが午前のをハシマという例もある。もつとめずらしいのは、後にいう茶ちゃの子こと同様に、早朝のかんたんな食事をそういつている村もあることである。しかしこの最後のものだけは思いちがいと言つてよい。つまりはハシマやコバサマが、中間の食事ということだったのを忘れて、かんたんな食物なら皆ハシマと、考えるようになってから後のことなのである。

日本の北の端、岩手県の九戸郡くのへではコワエコというのが、午前の九時ごろと午後の三時ごろ、仕事の一ぷく休みに取る食べ物のことであつた。これに対して九州の一部、たとえば佐賀県の三養基郡みやきなどでは、おなじ小昼こひるの食事をヤーノメシめし（あいの飯）ともいつている。国の両方に遠くはなれてはいるが、この二つはともにあいだの食事ということで、名をつけた起りはハシマやコバサマもかわるところはなかつたのである。ひるまのマも最初のうちは朝夕二つのケの中間ということだったのが、いつか毎日の三度の食事の一つになつてくると、もうその他の小さな間食を、マということとはできなくなつて、べつにアイ

とかハサマとかいうような、意味は同じで音おんのちがった言葉を、用いるひつようが生じたものと思われる。

一一、間食という言葉

間食という二つの漢字は、古く奈良時代のおわりごろに、書かれた本の中にもすでに使っている。日本の最初の口言葉くちことばでは、それを何といったのか明らかでないが、少なくとも今のようにかんシヨクという人はもとはなく、ケンズイと字音じおんで呼んだのが古いことであつた。食をシーまたはスイーと読むのは呉音ごおんというもので、仏教を学んだ人はみな呉音をつかつていた。たぶんは大きな寺などに行つて働いた人々が、おぼえてきてはやらせたものである。近畿地方の各府県の住民は、今でも小昼間こびるまや小バサマというかわりに、このケンズイという語を用いている。そうしてもうその語がどういふところからはじまつたかを忘れていたのである。間炊ケンスイと書いてあいだに炊く飯めしだからという者があり、または粥かゆを出すからケンズイのスイは吸うことだと思つている者もあり、または硯すずり水などとすずりみずいうとんでもない字を書いて、昔咸陽宮かんようきゅうで冬の日、硯の水が凍こおつた時に、酒をそそい

でその水をとかしたので、それから酒を硯水というなどと、ありもしない故事こじを引用した者もある。しかし中央部の多くの例れいでもわかるように、ケンズイに酒を出す場合はむしろすくなく、ただの飯の残りを出すこともあれば麦のお粥もあり、土地によつてはまた厚朴ほおの葉でつつんだ強飯こわめしや、餅饅頭もちまんじゅうの類るいだけを、そういつているところもある。そうしてこれも小屋こびるのように、午後を主として午前のを朝ケンズイ・四つケンズイといたり、あるいはまた一方を七つケンズイといたりしている。

このケンズイという言葉を、知っている区域はかなり広いが、端々はしばしではその意味が少しちがってきたことは、これも秋田県などのコビリ飯と似ている。新潟県の一部のように、小豆餡あずきあんの饅頭まんじゅうというような念の入った品がわりだけをケンズイというのは、年に一度か二度のとくべつ労働の日らしく、中国地方の西北海岸や、九州の南部から島々にかけて、ケンズイというのは親類からの見舞品で、主として大病人のあるときとか、家の普請ふしんに大工職人だいくしよくにんのはいつているときとかに、手つだいの気持で酒や米、または重詰じゅうづめの肴さかなを贈つてくることであつた。もとは家々の間食もみなケンズイだったのが、のちのちこういう見舞品に力を入れる風習が起こつて、なにか特別のものと見るようになったことは、今でもわざわざ家建やたてケンズイなどといっている地方があるのを見てもわかる。建築に専

門の職人をたのみはじめから、きゆうに間食が大層なご馳走ちそうになってきたのである。東京などの大工たちも、建て前たまえ・棟上げむねあの日に酒肴さけさかなが出て、それをケンズイということはおぼえている。ただもうそれをまちがえて、ケズリという者が多くなっているだけである。

一一、お茶の始まり

こういう職人たちに給与する間食を、現在はお茶というのがふつうになった。村ではこれと今までの小屋こびるや小ジウハンと、べつべつに見ている人もまだ多いが、農家にもおおい年季ねんきの奉公人ほうこうにんがすくなく、日雇ひやといの働き手を入れるようになると、食べさせる物も一つになり、したがって名まえもちがえる必要がなくなる。関東地方でも、千葉県などではコジャという言葉がひろくもちいられ、中国地方も隠岐島おきのしまなどは、田植の日の午前の小バサマを小茶こちや、午後に昼寝ひるねをして起きて食べるのを、立ち小茶たちおちやともいっている。広島県の漁村などには、夕食に近い間食を、孫茶まごちやという言葉もある。もちろん小茶よりも小さいものという洒落しゃれであった。京阪周囲けいはんの村々でも、ケンズイという名はもう知らぬ人が

できて、市街地同様にお茶という語がよく通じ、前茶・朝お茶・四つ茶というのが午前の茶のこと、八つ茶・七つ茶・二番茶などというのが午後のである。もう知っているひとは多いだろうが、四つ・八つ・七つはむかしの時のかぞえかたであつた。七つというのはおおよそ午後四時、八つはその前の午後二時ごろ、そうして子どもたちのオヤツという語のもとであつた。

お茶をかんたんな食事の意味につかうことは、西洋もよく似ている。人を働かせる日の間食にはかぎらず、本膳を出さぬほどの手がかるな饗応を、お茶というところは田舎には多く、ことに九州などでは婚礼の前後にもお茶、また仏事の日にもお茶といって人々をまねている。このお茶にはむろん酒が出る肴が出る。しかし名称の起こりはやはり茶を飲んだからであつた。茶は鎌倉時代の始めごろに、えらい禪宗の僧が支那から持つてかえり、九州では肥前の背振山、それから都近くの梶尾や宇治に栽えたということになつてゐるが、この説の半分はまちがつてゐる。輸入をしなくとも我邦の中央山脈には、東は東京のまわりの山々から、西は九州の南のはしまで、いたるところに自然と生えていて、焼畑を止めるとまつさきに芽を吹くのは茶の木であつた。ただ隣邦のようにこの葉を煎じて飲むということを、もとは知らなかつただけである。茶には十徳が

あると、禪宗の人たちはいうが、農民にとってはその半分はありがたいことだ、というような話も古い書物に出ている。少なくともこのおかげにあたたかい飲み物ができ、口のようなこびが一つ加わったので、今でも茶人以上に茶を多く飲むのは、じつさいは農村に働く人たちである。この流行の大きな力となっているのは、何といってもこの飲み物が、何かかんか食べる物もそえずに出なかったことであろう。最初は茶塩ちやじおけ気けといって梅干うめぼしか漬物つけもの、まれには小匙こさじ一ぱいの塩しおということもあり、そうでなくとも腹を太くするほどの多量の物はともなわずに、ただかんとんに一時の口さびくちしさをまぎらし得るということが、おそらくは茶の人望じんぼうの基もとであった。みじかい休憩の回数がそのために多くなり、一方にはまた何の仕事もせず、腹もへらない人たちまでが、たいくつだといっては盛んにお茶を飲むようになった。そうしているうちに、砂糖という曲者くせものが、いよいよ姿を現わしてきたのである。

一三、砂糖の魅力

いちばん大きな変動を受けたのが子どもたちであるが、それもずっと後のできごとであ

った。砂糖が日本にはいつてきたのは、四百年近くも前の話だけれども、始めのうちはただ名を聴いたばかりの珍物で、都会に住む人々、それもよっぽど良い暮らしの家でない
と手に入らなかつた。しかしそのころを一つの境として、甘いという味がおいおいと普及
することになったのは、やはりお茶というものの影響であろう。子どもはただ味をおぼえ
たら忘れぬというだけで、自分でさがし出すことはできないのに、砂糖以外のいろいろの
甘味が、つぎからつぎと日本の食べ物に加わつてきているのである。

茶を飲む風習が農家にはいつてから後に、はじまつたろうと思う食べ物はいくつかある。
一つ例をあげるとオケジャまたはウケジャというもの、全国諸処にあるが、名まえだけ
は同じで、物は少しずつちがつている。播磨の一部では挽割麦と蚕豆とをまぜて、塩
加減をして飯に炊いたもの、備中の吉備郡では麦と豆とを炒つてまぜて煮た米の飯、
出雲の松江附近では番茶を煮立ててそのなかに飯を入れて煮たもの、どれもこれも旨く
もなさそうだが、香氣があるのちよつと愛相になつたものであろう。越後の高田辺
でも、米と大豆をざつと炒つて飯に炊いたものがオケジャ、駿河の志太郡では飯を炒つて
味をつけたのをウケジャまたは茶菓子ともいつており、紀州の熊野などでは、炒り米と
薩摩薯とをまぜて炊いたものがオケジャである。飴や砂糖とはくらべものにもならぬが、

甘^{かん}藷^{しよ}や黒^{くろ}豆^{まめ}には少しの甘味があり、まためずらしいのでお茶の相手によかったのであらう。ともかくもただ空腹をしのぐというだけでなしに、しだいに口をよろこばすという目的がつけ加えられたことは、餠^{あんもち}餅なども同じである。

農村には今でも砂糖をあまりあてにせず、戦争中の配給から使いはじめたという家もまれではないらしい。小豆^{あずき}の餠^{あん}などはわたしたちから考えると、ただ砂糖の宿^{やど}としか見えぬのだが、その砂糖はまったくなくて、餠^{もち}だけを餅にぬって食べていた時が、ずいぶん久しいことづづいてるのである。これにはなにか特別の理由もあるらしいが、総^{そう}体^{たい}に昔の人は歯をおもんじ、咬^かみしめて味の出るものをよろこんだにたいして、このごろは舌の触觉を主にするようになっていいる。栄養という言葉は使わなかったけれども、食べて身の力になるということが、以前は食事のただ一つの目的であったのが、後にはかえって口の楽しみに引かれるようになった。ことに砂糖の食べ物が得やすくなってからは、子どもの食事などは回数が多く、茶と茶の中間にまた新たな間^{かんしよく}食^{しょく}を、ほしがる者さえできていたのであった。これも一つの習慣にはちがいないが、オヤツやお三時の起^{ぞん}こ^{がい}りは存外にあたらしいものである。以前は食べる日が一年のうちに、指をおってかぞえられるほどしかなかった。それを毎日かならずもろうことにしたのは、子どもとしては一つの大き

な歴史であつた。

一四、お菓子の歴史

おしまいに今一つだけ、お菓子の歴史というものを、このついでに話しておこう。菓子はその文字がしめしているように、もとはただの果実のことであつた。果実にも桃・梨・楊梅・覆盆子等、やわらかくて甘いものがいろいろあるが、生で食べられる日は幾日もないから、年中いつでも出るのはほして貯わえて置かれるものだけであつた。それをぼつぼつと摘まんで食べたのは、客などのきたときのただの慰みであつて、飢を凌ぐというのは始めからの目的でなかつた。家でも正月だけは集まつてこれを食べたと見えて、干柿・榧・搗栗というような、今はお菓子と叫びない昔の菓子が、三方折敷の上に鏡餅と共にかならず積みあげられる。昆布や山の薯や野老などは木の実でないが、これも早くから菓子の中に加えられていた。それよりもつとよろこばれたのは白黒の大豆の炒つたの、つぎには蚕豆という大粒の豆などで、わたしたちの小さいころには菓子というものはべつにあつて、これらを菓子とはいわなかつたが、村の子どもはじつさいは

こういうものばかり食べていた。

京都その他の大きな都会に、菓子屋^{かしや}という店のできたのは古いことであるが、最初はただ昔からの菓子、すなわち木の実や豆や昆布や薯を、味よく食べられるようにしたものだったらしい。そこへ砂糖がはいったので、さつそくとそれを利用し、今いう干菓子^{ほしがし}というもののをいろいろと考え出して売ったが、まだしばらくのあいだ、餅団子^{もちだんご}の類^{るい}はお菓子のうちには入れなかった。生菓子^{なまがし}蒸菓子^{むしがし}というような名まえは、上方^{かみがた}から西の子どもは知らなかった。餅菓子^{もちがし}というと餅と菓子と、二つをならべたもののように思っていた。菓子がやわらかな噛み^かみくだく必要のないものになったのは新しいことである。

そんならその干菓子でないほうの、今いう生菓子^{なまがし}をなんといったかという、百年前までの日本語はお茶の子^{ちやこ}であった。お茶の茶受け^{ちやうけ}は塩でも梅干でもよかったのだが、何かことのある日には念入りに、こういうものをこしらえて出したので、今でも年とった人にはまだこの言葉を知っている者が少しはある。腹にたまるまでのたくさんの分量は出さぬので、どうしても味をおいしくする必要があり、甘味なども少しずつこの方面から加わってきたのだが、それでもまだ田舎^{いなか}には、ちつとも甘くはないお茶の子、どちらかというと少しまずいお茶の子がのこっている。これから夏のはじめ頃にかけて、皆さんのように朝早

く起きる人たちは、氣のつくときがきつとあると思う。農家の若い男女は床をはなれるとすぐに、鎌を持ち馬をひいて山へ草を刈りに行くが、その時には囲炉裏の灰の中から、昨晩入れて焼いて置いた大きな団子を掘り出して、ふうふうと灰をはたき、路々かじりながら出かけるのが、多くの農村のふつうの例であつた。そうして一仕事してきてから、かえつて本ものの朝飯を食べるのであつた。この団子の大きさはメロンほどもあつて、材料は蕎麦・稗の粉、たまに土穂といつて米の調整のときに、一番あとにのこつた屑粉を粉に挽いたものもある。塩も入れないのが多いから決してうまい物でないが、若い者はよろこんでこれで空腹をみたしたのであつた。この団子の名はどこへ行つて聴いても、大ていはお茶の子であつた。すなわちもとはお茶の相手に食べたものを、後にはお茶なしに、「子」だけ食べていたのである。

一五、遅い朝飯

このお茶の子ばかりは、じつはわたしなども食べて見ようという気にはなれなかつた。それで旅からかえつてその話をする、もとは東京などの人はびつくりしたり、笑つたり

したものであった。しかしそういうのはもう歴史を忘れたので、前には江戸といった大きな都会でも、草こそは苳^かりに行かなかつたけれども、やはり早朝にこのお茶の子を食つていたのである。その証拠としては何によらず、それくらいな仕事はいと容易だ、またはちつともこまらないというような場合に、朝飯^{あさめし}前だともいえばまたお茶の子だともいつていた。すなわち二つの言葉は同じで、もと朝飯^{あさめし}を食わぬうちに、お茶の子だけで、一仕事をしていた名残^{なごり}である。『宝曆^{ほうれき}現来集^{げんらいしゅう}』という書物を見ると、今から百六、七十年前の安永^{あんえい}年間までは、朝々江戸の町を「お茶の子お茶の子」といつて売りあるく商人があつた。そのお茶の子は今いう鶯餅^{うぐいすもち}のように、餡^{あん}をつつんだ餅^{もち}に黄粉^{きなこ}をまぶしたものであつた。手のない家ではこれを買ひ取つて朝茶を飲み、それで朝飯をぬきにした人が多かつたということである。農家のように眯^{くら}いうちから起きるのでなければ、この茶の子のあとで朝飯を食べ、それからまた昼のしたくをするというのは、なるほど必要もないことであつたろう。フランス人などの生活を見ても、朝は起きぬけにコーヒーを飲みパンを少しかじるだけで、われわれが朝飯と訳している食事は十一時過ぎ、お昼の少し前になつて食べるのをふつうのようにしている。日本の田舎^{いなか}でも朝飯^{あさめし}は昨日^{きのう}の残りもの、そのほかいたつてかんとんにすませておいて、その代りには昼飯をずっと早く、十時少しすぎ

るとうち食ふるところもあるが、これなどは果して昼飯であるやら、または朝飯の時刻をおそくしたのやらわからない。というわけはこういう土地においてはきつと朝飯のことを茶の子と呼んでいるからである。そうして一方にはまたひるまの食事は屋外で食ふものとして、茶の子のつぎにくる朝飯をおそく、かつじゅうぶんに食ふ土地も、東北などにはあるのである。何もしないで一日に三度、毎回膳ぜんごしらえをして食事をするというのは、かならずしも日本のふつうの生活ではない。都会の住民でもそうしている人は、じつは半分もないのである。二度にしたからとて食料の儉約にはならず、やはり身を養う分量だけはへらせないが、それでもこれにとまなう手数と気づかいとだけは、二度にもどすことによつてはぶくことができるであらう。それがまた剛健なる古代日本人の生活でもあつた。

ただそのために急に口淋くちさびしくなる人が、年寄としよりや子どものなかに多くなることだけはお気のどくだといわなければならぬ。そういうはげしい時代なら、年寄りは多分我慢がまんをするであらう。それから小さな人たちも母の注意によつて、だんだんと間食かんしょくも少なくなる習慣をつけられている。砂糖の甘さなども、忘れてしまわねばならぬ時があるかもしれない。しかし今から二、三十年前までは、それはそれは子どもがよく食べた。一つには大

人^{とな}もなんとかかとかいって、茶を飲み甘い物を食べる回数を多くしていたからであつた。昼間^{ちゆうかん}または中の間のマという言葉をはじめとし、ハシマも小^こバサマもケンズイも、もとはすべて間食ということであつた。それがさらに進んでそのまた中間にもなにか食べるのを、中国地方ではハスワ食い、四国ではアイマ食い、九州の各地ではハザ食い、南の島ではマドモノ、中部地方になるとコバミともコマグチともいう者が多く、近畿地方ではどういうわけか、これをホウセキともヒズカシともいっていた。またタラシともいう人があるのを見ると、ヒズカシも幼児をすかす物ということであろう。越後から北^{ほく}信^{しん}地方にかけては、これをまたスサビという語があつて、古い名のように思われる。わたしなどの生まれた村では、オヤツだのお三時だのという言葉はなくて、小さい児^こはこれをナンゾといっていた。東京でナンカというと同じく、なんでもよいからくださいということから出ている。このナンゾを連発しつつ、わたしたちは成長してきたのであつたが、それとくらべると今の時代はまた大いにかわっている。

棒の歴史

一、風呂敷包み

日本人の特徴は、眼鏡めがねに風呂敷包みだと、よく外人らがもとは言ったものである。もちろんそんな特徴ばかりを見ていたからいけないのだが、なるほど考えて見るとこの二つはよく目につく。眼鏡は日本人でなくとも、少しは掛けているが、風呂敷包みのほうは、その国の者はあまり持つてあるかない。そうして眼鏡は近視眼きんしがんさえなくすれぱうんと減るが、風呂敷包みのほうはどうであらうか。皆さんは大ていカバンを掛けるようになったが、そのためには、風呂敷はちつともまだ不用になつてはいない。風呂敷とは全体みような言葉である。もとは風呂を出たときに、こんな四角しかくな布で足をふいていたからという人もあるが、それがどうして荷物を包むものになったのか、今は風呂にも敷かないのに、ど

うしてそんな名をつけたのか、その説明にはちつともなっていない。東北地方では、風呂敷は女の顔をつつむ頭巾ずきんのことで、これは風呂敷頭巾ふろしきずきんを略した言葉かもしれないが、あらでは、わたしたちほどには風呂敷包みを持つてあるかない。九州地方には風呂敷という名はなくて、平油単ひらゆたんというのがこの風呂敷のことである。油単はもと行燈あんどんなどの下に敷く敷物、のちには箆笥たんすや長持ながもちの覆いに掛けて置く布の袋のことで、それを平たくまた四角にして、べつの用に使うから平油単なのであろうが、ともかくも三百年まえには聞いたこともないものであつた。

然しからばどういふわけで、このような物が日本に始まつたのであろうか。またはこの風呂敷包みが始まるまでは、何がかわりの役をしていたものであろうか。こういうことは判わかるならば知つて置いたほうがよい。ことに昔からこの通りであつたものと思つて、あたりまえのことだとしていた人は考えたほうがよい。人によつてはもと服紗ふくさともいったものを、たれかが風呂敷などと名をかえたのだというが、この二つは同じ物ではない。服紗は絹きぬの美しい小さなもの、一方にはそまつな大風呂敷おおふろしきもあつて、物を包むだけにしか使わぬが、服紗には物を包む以外のいろいろの使いみちがあつた。あるいはまた平包みひらづつというのが、風呂敷包みのもとの名のようにいう人もあるが、それもまちがっている。平包みはただ物

を平たく包むだけで、これならば支那からくる呉服商人なども持つてあるいている。こちらの風呂敷包みは、四隅よすみを紐ひものかわりにして結ぶのである。平包みや服紗包みが前になかったら、風呂敷包みということはかんがえ出されなかったろうとまでは言うことができる。ただ、こういう包み方のできたのは新しいことで、それはまた新たな必要からであった。

二、歴史は単純でない

わたしの話の題は棒の歴史、あんな棒見たような何でもない物にも、なお人間のほうから見て、見のがせない大事な変遷へんせんがあるということを、皆さんに気づかせたいために、こんな題をつけたのだが、それは同時にまた風呂敷包みの歴史でもあるのみか、ひろくいうならばわが邦くにの、運搬方法の昔から今まで、だんだんと進んできた途筋みちすじを説くことにもなるのである。

なにかここにある物をあそこまで運んで行きたいと思う場合、鳥や獣けものや蟻あり・蜂はち・蜻蛉とんぼなども、足でつかんだり口にくわえたりして、持ちあるくことまではする。猿さるだけは手に取

つてある距離を運び得るが、手というものは、元来ほかにいろいろな用があるので、永く持つてもおられず、またそう大きな物も持てない。人は幸いにはやくから考え深く、手もさまざまの形にして利用したばかりか、なおつぎつぎに頭と背と肩とを使つて手を休ませ、また手では持ちきれない物までも遠くへはこんだ。それが今日のうちに高い空から、または海の底から、自由に送りとどけられるようになるまでに、人が人にたのまれ、もしくは牛馬駱駝や船車などを使いこなして、それはいろいろな新らしい運送方法を、近世はことに頻繁にかんがえ出していたのである。それが一つとして手数が今までよりもすくなく、効果が今までよりも大きくならなかったものは無いのは、棒の改良も風呂敷包みも皆おなじだった。これだけはだれにでも、考えて見ればすぐにわかる。

わたしたちのふしぎに思うのは、これほど改良に改良をかさね、村には手車やリヤカーが行きわたった今日、どうしてなおいくつも古風な方法、たとえば棒というならば、前からあつた三通り以上のものが、今でもなお使われているのか、または風呂敷包みのような昔からあつたわけでもないものが、何処に行つてもまだこのように流行していて、古いものと新しい方法とが、ならんで共に生きているのかということである。土地の事情というようなかந்தんな言葉でも、ひと通りは説明し得られるのかも知れぬが、つまり

わたしたちの一人一人の必要には、まだ改良のできないこまごまとしたもの、かず多くのこつていたのである。そうして現在あるものが、ともかくも今では一番つごうのよい方法であるということが、だいたいは想像し得られるのである。それを折角せっかくいろいろの新らしい便利なものがもうあたえられているのに、頑固がんこで物知らずで古いものにくつついているのだと言おうとする人もあるが、そんな事をいうのは、今すこし一つ一つのものの実際の働きを、くわしく知ってから後あとでなければならぬ。

三、荷造りと入れ物

ただし皆さんはまだそう多くのものを知っていない。村に住んで朝晩見ていると、この風呂敷包みにはかぎらず、今まで知らなかったいろいろな物の運びかたが、あったということに気がつくばかりであろう。わたしはそれをかず多くあつめて見ると、ながい間の日本の交通輸送の歴史が、だいたいにわかつてくるのだから、忘れぬようにしなければならぬということを通して見たいのである。

最初には博物はくぶつの学問もおなじように、まずじょうずな分類ということが必要であつて、

それには自分たちよりも多くの事実を知っている人の、いうことを聴^きいて見なければなら
ない。物を遠くの土地へ何^{なんにち}日もかかつて、または人をたのんで送ろうとするには、荷造
りということをしなければならぬが、それが近まわりを自分で持ちあるく場合ならば、大
した丈夫^{じやうぶ}な荷造りにもおよばず、またそうすればかえって解^とくのに手数がかかつて損な
ことも多い。わたしたちの運搬^{とんぱん}は、まずこの近まわりのほうから始まっているのである。
家の前^{とまり}うしろや隣家^{とまり}までなら、猿^{さる}も同様にむき出しでもかかえて行けるが、散つたりこぼ
れたり人に見られたりするのをいといえば、容器^{えまきもの}すなわち入れ物がほしくなる。それで入れ
物は荷造りの最初なのである。もとは貯蔵用とかねていたろうが、たいていは手製^{てせい}なのだ
から、いろいろと自分たちの必要にあわせて、べんりな大きさや形がかんがえ出され、の
ちにはそれをやや遠方への旅行にもたずさえて行けるようになった。そういう中にもいく
つとなき種類^{えまきもの}があつて、古い絵巻^{えまきもの}物などの画^えにつたわっているのは、木の櫃^{ひつ}や袋のたぐ
いであるが、二つとも手製が容易でないうえに、櫃^{ひつ}のほうは持つのに二人かかるものが多
く、袋だけはそまつなごわごわした物を入れてあるくために、絹^{きぬ}や布以外の多くの材料を
つかつたのが、今でもまだ弘^{ひろ}くもちいられている。それよりも日本という国のありがたい
ことは、竹^{かすら}と葛蔓^{のやま}とが野山^{のやま}にありあまつて、これをいろいろの容器に利用する技術が、ま

ことにらくらくと国民のあいだに進みかつひろまってきたことである。籠かごというものの古い日本語はコであつて、そのコの形状は、我わがくに邦では無数である。写真やスケッチにしてあつめて見ると、かえつて分類にまようほど千変万化せんべんばんかであるが、幸いにして使いかたが大よそきまつており、また名称もよく似たものが多いから、かんたんにその系統をたずねてみるができる。それは手に持つか腰に下げるか、頭にのせて行くか背に負うか、はた棒にくくりつけて肩になうか、これによつて大小もかつこうもきまり、また区別のために名まえもかえている。そうしてはじめは、ある一つの方法のためにできた籠または袋を、のちには第二第三の運搬用にも、使いだしたということがわかつてくるし、どの点がとくにつごうがよくて、改良をしたかということも明らかになつてくるのである。

風呂敷はつまりその改良の一つの端はしであつた。袋には底があつて出し入れにすこし不便であり、籠のほうはまたからつぽになつても、嵩かさだけはちつともすくなくならない。だから持つて行つておいてくるような品物には（イ）最初には背をやすめ、また背負いかたを手がるにするために、平包ひらづつみの布の二隅ふたすみを紐ひもに代用して、そのまま肩にかける方法がかんがえだされ、（ロ）次には下げたりかかえたりする袋や籠のかわりに、用がすめばなくなつてしまうほどの、かわいい服紗ふくさにちかい小風呂敷こふろしきというものがはじまつたのである。

だから風呂敷包みがどうしてもできなかったかを説明するのには、やっぱり今ある手と背との運搬方法を、気をつけて見る必要があるのである。

四、女と運搬

小風呂敷はもとは女のもので、これを男までがさかんに使いだしたのはいたって新らしく、明治以来といつても言いすぎでない。そんならその前にはどうしていたかということ、当然に問題になるが、これにも男女をわけてかんがえて見るのが順序である。まず男のほうには負うとかになうとか、他^{ほか}にいろいろの持ち方があり、すこし大きな物なら供^{とも}の男をつれて、持たせて行くという途^{みち}があつた。だから供という者のなくなってしまうまで、男には小風呂敷の用はなかつたのである。女も背や肩を使うことは村の内では少ししているが、遠くへゆく時には貧しい者でもあまりそれをしなかつた。その理由はべつにもうつ、頭の上にのせてゆくという技術が、かれらのあいだに発達していたからである。

それで最初にまずこの戴^{いた}きという運搬法を話して見なければならぬが、これは近世の百年か二百年のあいだに、急にすくなくなつて行こうとしている。東京の附近で、そだった

人などは、これを見ようと思えば伊豆^{いず}の大島^{おおしま}か、それから南の島々に行くよりほかはないが、わずか以前は伊豆半島の南部でも、また房州^{ぼうしゅう}にもそれがいくらかあった。京都で名物の大原^{おはら}や北山^{きたやま}の柴売女^{しばうりおんな}をべつにすると、だいたいこの風習は海近くの村^{むら}里^と、ことに魚^{うお}などを売りあるく婦人にばかり多いので、なにか職業や家筋^{いえすじ}にむすびついた特別の技術のように、かんがえている人もあるらしいがまちがっている。頭のまんなかに重いものをのせて、手ばなしであるいてくるなどということは、ちつとやそつとの巧^こ者^{うしや}ではまねられるものでない。かならず身のこなしや足の運びのように、祖母^{そぼ}から母への代々^{だいだい}の練習が、積み重なっているのである。その練習の機会がわずかでもすくなくなれば、たとえ続けるにしても、だんだんと骨折^{ほねおり}が多くなつてきて、ついにはこれで一生の暮らしを立てる人たちだけの、職業の技術のようになってしまふのである。伊豆の大島などに行つて見てもわかるし、また同じ習わしをもつアジアの国の、多くの民族の例をきいて見ても同様だが、どこでもはじめには水汲み^{みずく}から稽古^{けいこ}するのである。大島の女の子なども、わたしの行つて見たところには、学校へ来るのに本の包みまで頭にのせ、またわずかずの柴^{しば}や秣^{まぐさ}までささげていたが、親が教えるのは水汲み^{みずく}が主^{しゅ}であつたとみえて、八つ九つの小娘^{こむすめ}までが、年に似合つたちいさな水桶^{みずおけ}をこしらえてもらつて、それを頭にささげ

て遠い井戸に通つていた。朝晩時刻をきめて、女たちは一列にならび、一ばん年かさのしつかりとしたのが、水の桶を小さい子の頭に置いてやって、しまいに自分は一人でさざげて行くのであつた。降つても照つても一日に二度、この水を汲みに行かねばならぬ。家に使われる者のない小さな家庭では、これが妻や娘のふつうの役目であつたことは、もとは京都も同様であつた。その為^{ため}に多くの女たちは、頭のまんなかの毛が禿^はげていたということが、鎌倉時代の書物にも書いてある。だからそのころの女の人は、みんな頭に物をのせてあるくことができたわけである。

五、水を運ぶ技術

それが如何なるわけで今日のように、頭上運搬^{ずじょううんぱん}というものがめずらしくなったのかというと、これもわたしは飲水^{のみみず}が主たる原因であつたと思つてゐる。水道やポンプの普及するよりもまえから、横にも豎^{たて}にも水をひく工事は発達して、掘井戸^{ほりいど}は家々にちかくなり、共同の泉^{いずみ}まで汲^くみにゆくひつようが、多くの村里^{むらさと}ではなくなつてしまつた上に、さらに手桶^{ておけ}というものが発明せられて、あまり遠くない井戸からならば、これを片手にさげ

てこられるようになったのである。今からかんがえたと何でもない事のようにあるが、以前に幅の広い薄板うすいたをまげてとじた桶、または水甕みずがめをもって水をはこんでいたころには、これに手をつけてひつさげるなどということは、想像もおよばぬ話であった。それが今見るような桶おけに変わったのは、女たちにとつては大へんなできごとであった。樽屋たるや桶屋おけやの商売が我邦わがくににはじまったのは、はつきり何時いつからということとはできないが、ともかくもそう古いころのことでないらしい。これは曲物まげもの細工さいくからの改良ではなく、全然あたらしいべつな工芸であった。樽くれと称する檜ひのきや杉かの木の四つわりを、円周にそうした線で厚く堅にわり、それをけずつて円まるい形かたちにつなぎあわせ、そこから葛かつらや竹の輪でしめつけて、底を入れたものが今日こんにちの桶であり樽たるであるが、これだとごくかんたんに、手桶の手をつけることができるのであった。手桶のさげ方にもうまいとまずいとはあろうが、だいたに今はまだ形がきまつていないという感じがする。そうして三町と五町とへだたったところから、こうして水を汲んでくることは容易なわざでない。つまりは井戸が近くなつたことが、大いに手桶の利用を助けているのである。司馬江漢しばこうかんの『西遊記さいゆうき』という紀行は、今から百四、五十年前のものであるが、これには中国のある山村で、女が毎日谷川たにかわへ水を汲みにかよふことが書いてある。往復一里もある路みちを頭に桶をのせて、路々も手を休めずに苧系おいと

を續みながらあるいているとある。手桶で水をはこぶ人には、もちろんそんなことはできない。千代能ちよのうという尼あまさんは江戸期のはじめ頃に京都にいた人だが、この人が悟りを開いたときに詠よんだという有名な和歌がある。

千代能がいたたく桶の底抜けて

水たまらねば月もやどらず

すなわちこの人もまだ水桶はいたっていたのである。「松風村雨まつかぜむらさめ」という二人の女の舞まいは、『源氏物語げんじものがたり』にもとづいて作ったというが、それが二つの桶を棒の両方になつて、潮しほを汲みに行くところを舞うのは、絵空事えそらごとというものである。手桶ができて後あとならばバケツというものも考えだされようし、棒で両方に下げる担にない桶おけを、男にかつがせることも始まるであろうが、それがもしふつうであつたら、女の頭上運搬はこのように久しくは行われなかつたはずである。今となつては、なんだか気のどくな労働のように思われるけれども、近ごろまでこれの行われていた地方では、女の姿勢はすらりとし、足腰の筋肉もよく発達していて、今見る前かがみの内足うちあしなどは、むしろ小風呂敷のさかんに

用いられるようになってからのことだった。物を持ちこぶ方法は、一般に手から背へ肩へまたは腰へと、なるだけ手を明けておこうとする方針であるのに、この風呂敷包みというものだけは、新たに始まったものとしては、ふしぎに手の自由を制限しようとしているのである。

六、額を使う負いかた

女が頭と頸くびの骨とを使う運搬のしかたが、もう一つあることは知らぬ人がきわめて多いであろう。それは日本の端はしのほうの、わずかな区域だけに行われているからで、それもあ
るいは遠からず消えてしまうのではないかと思う。人が背なかに物を負う場合、力の半分
は肩に持たせるのがふつうだが、九州の南に遠くはなれて島々と、中部では八丈島はちじょうしまと、
北は北海道の前からの住民とのあいだに、負紐おいひもを額ひたいにあてて背負うものがあつて、これ
も女の運搬に多く行われている。わたしなどのめずらしいと思つてゐるのは、南の島では、
これにはつきりとした境さかいの線があつて、たとえば沖繩本島ではあの島のもつとも細くなつ
ているあたりが一つの境で、それから南では荷物を頭の上にのせる。沖繩より北の島々で

は、^{たからかいきよう}宝海峽がまた一つの境の線であつて、それから南には今もぽつぽつとそれが見られ、北は七島^{とう}から九州の内陸沿岸までは、一帯に皆頭上運搬のほうである。あるいはこの人たちも重い荷物だけは八丈島のように、もとはこうして背と額とでささえていたのが、のちに一方をやめたのでないかとも思われるが、ともかくも現在は南北の両地とも、額を使う人々のあいだにはもう頭の上にいた^{ふう}だく風は見かけない。そうして一般に棒とか大風呂敷包みとかいうような、肩を以前よりも多く使う運搬法が、だんだんとひろく行われてきている。

今からかんがえてみると、^{ふはん}負搬すなわち背で物をはこぶ方法には、べんりと言えは言われる点が二つあつた。その一つは両の手の自由につかえること、山へ登るのに木につかまり^{かや}萱をわけ、または杖^{つえ}とか少しの武器とかをとつて、急場の危害をふせぎ得られること、その二は練習と忍耐または持^{もち}前の力によつて、荷物の分量をよほどのところまで増加し得られることで、そのために人が余計な労苦をすることになつたけれども、一方にはまたこの二つの^{ちようしよ}長処を利用して、中世いろいろの^{わがくに}我邦の交通は、いちじるしく開けすすんだのであつた。手に物を下げたりかかえたりする場合はいうにおよばず、頭にのせるものもそうそう遠くまでは行けない。まれには病氣^{おつと}の夫を蒲団^{ふとん}にくるんで、京都のお医者へか

ようななどという話ものこっているが、そういうことは重さだけでなく、かさからいって
もむりな話で、その点は棒に通して肩になう場合もほぼ同じことだが、つまりは人間の
背なかだけが、あんな大きな物をはこぶ可能性をもっていたのである。車や役畜えきちくのいく
らでも利用せられるようになるまでは、どんなに骨が折れてもこの方法は世の中のために
ひつようであり、したがってまたこれを少しでも楽に軽便にするように、今でも改良はな
お少しずつづいている。しかもその改良はどれもこれも、そういちじるしいものでな
ったからであろうか。ちがった土地に行くときままだものままのところも多く、皆さんが疎そ
開かいの村里むらごとにおいて、直接見ているものをなるべくくべてみても、ほとんど昔からの変へんせ
遷せんの、すべての段階を知ることができるのである。比較ということがこういう場合にお
いて、分類について大切なことがわかる。一人でのこらず見ることのできぬ人々は、それ
をたがいに話し合つて見るために、できるだけ確実に物を観みて、書いたりおぼえたりする
習慣をつけておくと、将来つごうの好よいことがひじょうに多いであろう。

七、駄荷と歩荷

人がみずから働く昔からの運搬法のなかでは、ただこの背を使うものだけが遠方の輸送に供せられ、したがってまた職業になっていた。我邦の中央山脈では、これを横断する無数の交通路があり、いずれもこれによつて物を向う側へ送つていたと思われるが、そういう中でも北陸の各県から、主として海で採つたものを持ちこんで、麻や米麦などの内陸の産物と、交易したものがもつとも有名で、わたしたちはこれをボツカと呼んでいた。いそいで今のうちによく見ておかないと、もうこれもだんだんと少なくなり、絵や写真などにもそう残るまいと思うが、この人たちだけは遠方へ物を持って行くのだから、よつぽど村々のあいだを背負いあるく者と、ことなつたしたくをしていたのである。

ボツカは文字に書くと歩荷、古い日本語ではカチニといつていたのを、いつの頃よりかしゃれて字音で呼ぶようになっていたのである。駄荷すなわち牛や馬の背ではこぶものにしたいて、人が徒歩で負うゆえに歩荷であつた。人はもちろん牛馬のように、そう多くの重い物は負つてあるけない。それならどうして駄荷にしなかつたかと、あやしむ人があるうも知れぬが、その答えはいたつてかんたんである。つまりは山越えの路を、牛馬の通るように平らにすることは、ひじように金のかかる仕事だったからである。多くの昔からある峠路のふもとは、軽井沢という地名がまだ残っている。富士や日光山の馬

返^えしというの意味は同じで、ここまで馬の背に積んできた荷物を、この沢の口でおろして小さくして、人がかかるうことになっていたところなのである。繩^{なわ}で背なかに物をくくりつけることをカルウという言葉は多くの人がまだ知っている。奥羽^{おうう}地方へゆくと、家々の若い働き手をカリコというが、これもかるい子で、かるうのが、かれらのおもな仕事だったからである。江戸の町にも元^{もと}はカルコという者が多く住んで、引越^{ひき}しその他の運搬^{うんぱん}にやとわれていたらしく、今も軽子^{かるこ}坂^{さか}という地名^いがのこっている。ちょうど牛込^{うしごめ}見付^{みつけ}と飯田橋^いとのあいだを、北へ登^{のぼ}って行くほそい坂^{さか}道^{みち}がそれで、馬はいくらも使える江戸のような土地でも、やはり人の背を借りたほうが、べんりな場合^{ばあひ}がいくらもあつたのである。

八、連尺あきない

このついでに今一つ、江戸の古い町の名で、東京になるまでのこつていた、神田^{かんだ}の連^{れん}雀^{じゃく}町^{ちやう}という地名も、もとは運送業者の住んでいたところであつた。これは明^{めい}暦^{れき}三年の大火事に焼けて、今までそこに住んでいた人たちを、西の郊外にうつして村を立て開墾^{かい}

させた。それが三鷹みたかの駅の近くにある連雀れんじゃくという村だったということが、古い書物に書いてある。百余年以前には、村の戸数こすうが上下じょうげをあわせて百六、七十、まだその以外にも同じ火災のあとで、利根川とねがわの川口に近い新田場しんでんばへ、疎開そかいさせた家が数十戸もあった。これが全部みな連雀を職業にしていたのではなく、もうその頃にはいろいろの人が入りまじって住んでいたのかも知れぬが、ともかくも連雀は背に物を負う方法の一つであり、それがちょうどこの大火のころから、だんだんとこの大都会には、入用が少なくなろうとしていたのである。

かる子とこの連雀とのちがいははっきりとしている。これを職業にしていた者の出所でどころも、また習慣もおそらくは別であつたろう。かる子のほうはただ長い荷縄になわをもって、物を直接に背にかるう者だったにたいして、連雀も長い縄なわをもちいたことは同じだが、べつに木でつくったかんたんな枠わくのような物があつて、それへ荷物をくくりつけてから負うたのであつた。連雀はがんらい小鳥の名で、連鵲れんじゃくとも書くことがある。左右の翼つばさに一本ずつ、長い羽があつて垂れているのが、この背負い枠せおわくとすこし似ていたので、だれかがたわむれにこのような名をつけたものであるが、それも江戸になってから始まったものでなく、まだ織田信長が尾張おわりにいたころから、秀吉ひでよしの伯母おばむこ躰こになる杉原七郎左衛門すぎはらしちろうざえもんという人が、

清洲^{きよす}に住んで連尺^{れんじやく}商^{あきな}いをしていたという話があり、また「茶壺^{ちやつぽ}」という能狂^{のうきようげ}言^んでは、路傍^{ろぼう}にねむっている男の連尺^{れんじやく}へ片手を入れて、その荷物を自分の物だと、言^んいがかりをつける悪者^{わるもの}の話などもある。すなわち荷をくくった縄のあまりを前にまわして、それへ左右の手を通して負^おいあるくような、かんたんな仕掛け^{しか}をかんがえ出した者があつて、それが商^{あきな}い物などを売りあるくのに、かるいとくらべるとひじょうに便利なもので、利用する者が多かったのである。あるいは連寂衆^{れんじやくしゆう}という一種の部落があつて、こ^こで行商^{ぎようしやう}をしていたという言い伝えもある。そのためかどうかは知らぬが、農村の人たちはあまりこれを使つていなかった。

これが連雀という鳥に似ているからということ、今ではもう忘れてしまった人が多くなつた。ふつうは連尺^{れんじやく}という字を書いて、これを背負^りい棒^{ぼう}の両脇^{りやうわき}に取りつけた紐^{ひも}のことだといひ、また山林のほうで働く人たちは、連尺はただ長いロープのことだともいっている。そうなつた原因はいつの頃よりか、この連尺にまた小さな改良がくわえられ、縄のあまりを前のほうにまわして輪にするかわりに、べつにこれだけに両手を通す紐^{ひも}をつ^{ひも}け、それも肩にくい込むのをふせぐために、その部分の紐をひろく、布の古切れ^{ふるぎ}で織つたものを使いはじめたからである。それで土地によつては連尺を背負^{しよいこ}子の手ともいひ^み（三^{みやけ}）

宅島^{しま}）、あるいはまた荷繩^{になわ}のことだというものもある（佐渡^{さど}）のである。しかし連尺のべんりという点は、荷物がじかに背なかについて汗などでよごすことがなく、またおろしたり負^{しよ}つたりするのが手がかるだったことで、連尺という名はもう知らない土地でも、この両手を通す紐だけはよく採用していた。そうしてまた新しい色々の名が生まれているのである。江戸というような大きな都会では、連尺ではこぼせるような大せつな荷物がいろいろあつたが、そういう中でも最もめずらしいのは、花嫁^{はなよめ}さんをこれで運んでいたことである。駕籠^{かご}という乗物はもとはおごりであつて、中流の家庭では、嫁は家来^{けらい}に負わせてやつたが、これには連尺のひつようが大きく、そのために足をのせる木を取りつけたものもあつたという。この風習も江戸では早くなくなつたらしいが、東北の田舎^{いなか}などは百年ばかり前まで、馬に乗せないで背に負うてゆく花嫁が多かつた。それにはべつに一本の木を横にしたものをつけて、その上に腰を掛けさせたが、それをモリ木ともまたウモレ木とも呼んでいた。ウモルというのは負うという語のなまりである。そのモリ木を大せつに^{いっし}一生^{しょうがい}涯^{かい}しまつて置いて、死んだら火葬^{かそう}の薪^{まき}に使うものだった、というような話もつたわつてゐるが、それはただ一つの話かもしれない。

九、かるいの改良

大きな市街地では、もう久しい前からこの連れんじやく雀じゃくという背負いかたは見られなくなり、連れんじやく尺しゃく商あきないという言葉も忘れてしまっているが、その旅じたくの一部分は歩荷ほつかたちのなかにつたわり、一方にはまたおいおいと、村々の運送法にも影響をあたえている。戦時の物資統制がはじまる前までは、東京附近の田舎いなか、ことに千葉県なりたせんの成田線なりたせんにそう農村から、日に何百人というほどの小さな行商ぎようしよう人にんが、籠かごを背に負うて物を売りに出ていた。信州しんしゅう・飛騨ひだなどの歩荷ほつかとちがう点は、かれらの全部が婦人であることが一つ、汽車に乗ってくるので足ごしらえをしないことが一つ、それから荷物の荷造りがかんたんで、大ていはそっくり入れ物に入れてくることがまた一つであつたが、その負しよい方かただけは改良した連雀も同じで、竹籠たけかごの左右に幅のひろい裂織さきおりの紐ひもをむすびつけ、それへ両手を通して掛けかはずしを自由にしたものであつた。この竹籠ものちには長方形の、いくつも入れ子のあるよい格好のものになつていたが、五十年前にわたしなど見ていたのは、ただ農家の桑摘くわつみや落葉おちば掻かきに、つかつていた目籠めかごもおなじであつた。つまりは田のすくない新開しんかい地の女房にようぼうたちが、仕事のひまひまに畠の産物を持って、稲作いなさくのいそがしい村々へ

売りに行ったので、それにつごうのよいような籠背負かごしよいというものが、もうこの方面には始まつていたのである。

しかし以前の農村の負搬ふはんほう法というものは、これとはまったくちがったかるい縄なわ、もしくは荷縄になわ一式の仕事であつた。行きがけにはその縄ばかりを肩に引っかけて、身がるな姿で出て行くかわりに帰りには山から薪まき、野から馬の草、田畠からはいろいろの穀物の苅取かりとつたのを、山のように負うてこなければならぬのであつた。これにも荷じようずごしらえの上手へた下手はあつたろうが、ともかくも持てるかぎり多くのものを、その縄で背にくくりつけてくればよいので、歩荷ほつかや籠背負かごしよいの行商人のように、とちゅうでおろしたり、分けたりする必要はちつともなかつたのである。それがいつの頃よりか、別に木で造つた背負い道具を携たずさえて、物を負いに出かけるようになり、それも土地ごとといつてもよいほど、形と名称がいろいろとちがつているのは、つまりはこの改良がいたつて新らしく、こういう運搬の必要がなおつづいてからである。一つにはこの労働がかなり苦しいので、少しでもこれを楽にしたいという希望があつたからでもあるが、一方にはまた連尺商いや歩荷という類るいの、これを専業にした人々と接する折がなかったら、そう容易にはこの改良をかんがえ出すこともできなかつたろう。連尺商いのもう一つ前には、日本は聖ひじりまたは山臥やまぶし

という旅をする宗教家があつて、それが修行のかたわらにわずかずつの物品を地方にはこ
 んで、呉服とか小間物とかの商売を開いたと言われている。こういう人たちの永いあいだ
 の実験によつた考案が、あるいは間接に農村のほうに、働いているのかも知れないのであ
 る。

一〇、背なかうち

棒の話がいよいよおそくなるが、もう少しこの背負い道具のかわつてきた順序を談つて
 おかねばならぬ。古い絵をみると、はだかで大きな荷を負うた人もよく描いてあるが、た
 いていの荷物は突つ張つてござごそするので、夏でもかるい子は荷摺にすりという半袖腰きり
 の仕事着しごとぎをきた。これも裂織さきおりの厚ぼつたい布で、荷物にすれてもそう早くは破れなかつ
 たかわりに、着物というようなやわらかい感じのものでなかった。あるいはその荷摺は着
 ないで、藁わらでつくつた背中せなか当てを、荷物と背とのあいだにあてている人もある。わたしな
 どの知っているのは、藁を楕円形だえんけいにあんで、まわりをきれなどで飾つたものだが、とこ
 ろによつては袖そでをつけ手を通すものもあり、または木でつくつた負おい台だいのようなものもあ

るという。どういうわけか知らぬが、これを背中打ち、またはセナクチ・セナコージという地方もひろく、越後ではセナカンジ、美濃の山村にはゼンコウジという者さえある。勧進は神や仏のお姿などを背に負うて、諸国の信者に礼拝をすすめるいた人のことだから、かつてはこういうものにのせて、旅をしていたことがあるのかもしれない。たんに荷物の積みおろしのべんりだけからならば、農村では木で作ったいろいろの背負い道具などは必要がなかったはずで、むしろ今までのように荷縄だけでかるうほうが、分量も多く、またなんでも、背負うことができるのであった。それがおいおいとこのほうに変ってきたのは、たぶんは品物の種類が多くなり、なかには直接に肌^{はだ}にふれてはいけないうな、大せつなものもあつたからであろう。ということがこの背中打ちの、ひろく用いられていることから考えられる。

九州の山村などでは、藁^{わら}の背なかあてに似たものをシカタといい、道具はつかわずに縄とシカタばかりで負うことを地^じかるいといっている。ほかの地方にはべつに名はないが、この地^じかるいの方法は奈良県の吉野地方、その他、処々^{ところどころ}の山村にまでのこっている。そうして一方の木製の台は、名も形も土地ごとにことなっているのである。絵にでもしてならべて見ないと、話だけではわかりにくいが、だいたいに関西のほうではオイコ、東に

くるとシヨイコというのがこの木製の台の名で、東京のまわりだけでは背負梯子しよいばしごといって、とくに脚あしの長いものが多い。脚の長いのは立って休むのにつづうがよいようだが、それは平地ひらちの多い場所のことで、左右が傾斜になった山路やまみちをゆくには、脚はかえってじやまになるのである。越中えつちゅう・越後えちごなどのボツカたちは、太い野球の棒のような、頭が撞木しゅもくになり、もしくは二股ふたまたになったものを杖つえに突いていて、休む時にはそれで背の荷をささえる。それを荷股にまたともニンボウとも、またニズンボウともいろいろの名で呼んでいる。東北地方などには、もとは路傍に休み石というものが、かれらの休憩のために処々に置いてあった。それを近ごろはのけてしまった土地が多いので、荷持にもちは一段くるしい労働になり、したがってまた沢山たくさんは運べなくなつた。そうして少しずつ何度にもかやうのがふつうになり、以前のように一日の仕事のおわりに、うんと背負ってかえつてくるという、農夫の働きぶりはしだいに見られなくなつた。

それから他の一方にはべつに、いろいろの容器を作つて、物を入れて負うという方法もさかんになつてゐる。袋や竹籠たけかごの類るいは前からあつて、これも背なかに負うものが多かつたが、それらはかくべつ重いものでなく、なにか荷物ができればその上に小附こづけしてくるのだつたが、後には仕事によつて、それぞれの容器をかんがえ出し、それにも新らしい

ろいろの名ができてゐる。中国地方のトノスは鳥の巢に似ており、福島県から北ではそれに近いものをタガラといつてゐる。その他土や砂利じやりなどを背ではこぶ木の箱の、立つてゐて蓋ふたの綱をひき、なかの物をあけるしかけなども、だれがかんがえ出したのか、このごろは始まつてゐる。総体に荷繩になわの使用をすくなく、といたり結んだりする手数をはぶき、背せ板いたの両端に鉤かぎをつけて引っかけたり、また下の方に枝をのこしてのせる台にしたりしてゐる。近ごろはまた朝鮮風ちようせんふうの一つの背負い方も、チゲという名まえと共にはいつてきてゐる。

こうしてだんだんに荷繩を儉約した最後の形が、大風呂敷おおぶろしきというものであつた。これだけはまだ農民はもちいないが、村にはいつてくる商人にはこれを利用する者が多い。すなわち平包ひらづつみの布の二隅ふたすみを引出ひきだして、これを紐ひものかわりにして背に負うもので、これは両腕の上部に力の半分を持たせるから、今までの荷負においのように手を自由に使うことができな。すなわち道路の危害の少なくなつた今の世でなくては、発達し得ない一つの運搬法であつた。

一一、棒の始め

そこで最後に棒というものの歴史になつてくるのだが、棒の発達は歴史としては新らしいもので、道路の改良ということがその一つの条件となつてゐる。昔の交通は坂路が主であつて、棒を運搬の用に供するばあいが、絶無ではなかったが、はなはだしく限られていたのである。棒はあるいは半分は武器であつたと、いうほうがあつてゐるかも知れない。そくぎに敵をふせいで荷物を保護し得るといふ、たつた一つの長 処をのぞいては、以前さかに行われた背負繩の運搬の、かわりになるだけの力をもつていなかったのである。それがどういふわけで古いころから、ともかくも交通の用に供せられていたかといふと、人の背なかでは運びにくいものがいくつあつて、それだけは棒が引受けていたのである。たとえば大きな櫃長持の類、なかにはいった物をかたむけたり曲げたりしてはならぬ場合、ことに清 淨をたもつて雑人の身に近づけたくない品物などは、しばしば六尺よりもつと長い棒のなかほどにゆわえつけて、平らにして持ち運ぶひつようがあつた。神の御輿とか貴人の手輿とかになると、二本の棒をあわせてその上にのせて昇き、できるだけ土から遠くしようとしており、今でも物によると天井持といつて、棒の下に通して昇くことがまれにはある。もちろんこれには二人以上、ときとしては四人も六人

もの力をあわせるので、一人ですむということはぜったいになかったのみならず、急な坂だったら前がつかえるので、こういう運搬はまず不可能で、利用の道ははじめからかぎられていたのである。

次に今一つ、棒の片方^{かたほう}の端^{はし}に荷物をしかとくくりつけて、それをななめに肩にかけることがあった。これなら背に負うても同じことのように思われるが、物を背に負う者が一歩一歩、足をふみしめて道をあらく習いであるに反して、このほうは奇妙に^{はやあし}早足で行くことができた。もちろんこれは荷物のかるい時ばかりで、またそういう物を運ぶために、走る練習をさせたものかも知れぬが、昔の大名^{だいみょうぎょうれつ}行列^{はさみばこも}の挾箱持ちは、馬とおなじ速力でついて行かねばならず、飛脚^{ひきやく}という者などは、状箱^{じょうばこ}を肩にかけて、街道を走り通さねばならなかった。明治の御代^{みよ}になつてもややしばらくのあいだは、郵便脚夫^{ゆうびんきやくふ}といふ者が、これも棒の片はしに荷をゆわえつけて走っていたほかに、東北地方^{いちは}の市場^{いちば}に行つて見ると、村と浜べとから交易に出てくる男女が、やはりこういう荷物を肩にして、いずれもいそぎ足で町のほうへ出てくるのが見られた。

和歌山・高知等の諸県においては、この棒の片荷^{かたに}で物をはこぶことを、クジユウといっている。クジユウとになうとののはつきりしたがいはい、この方は荷繩^{になわ}をもって棒のはしに

しつかと縛りつけることであつた。肩にかたげて手で持つときには、棒はななめになつてゐるので、こうして置かないと、荷物がずれさがってくるからである。どうしてクジユウというのかはまだよくは判らぬが、地方によつてはこれをコジヨウともいつてゐるから、小背負こぜおいかも知れない。とにかく棒はこの他の場合には、すべて平らにしてかたげるので、クジユウは要するに棒をななめにして肩に置くことであつた。

十二、杵と杓

棒という文字は支那のほうにもあるけれども、それと我々のボウとは、少しばかり物がちがうようである。そうして国内でもまだこの語を使わずに、もう一つ古い名を用いてゐる人が多いのである。現在もつともひろく知られてゐる名は大よそ三つ、その一つはオコまたはオーコ、これには木扁きへんに力という字をあててゐるが、杓おこは日本でつくつた新字しんじというものであつた。オコはわたしたちの杵ほこといつてゐるもの、および杓むくという木の名などとの関係のある言葉らしい。昔の辞書にはアフコ、と仮名で書き、またアフコと詠よんだ古歌こかもあるが、それはたまたまそれに近い発音をした土地もあつたというまでで、元来が杓おことも

つとも縁のとおいい人たちの書いたものだから、それが正しいとまでは信用することができない。それから後の^{のち}記録にはオコが多く、今も全国にわたって皆オコかオーコであり、北九州のほうにはボーコというところもあり、薩摩^{さつま}の甕^{こしきじま}島などははつきりとホコと呼んでいる。漢字で銚^{ほこ}と書くものはすべて刃物にかぎるようだが、日本で木屨にかえてはいる^{ほこ}杵^{ほこ}のなかには、明らかに銚^{ほこ}をつけない、ただの木竹の杵^{もくちく}もふくまれていた。旗の竿^{さお}を幡^{はたほ}杵^こというのもその一つの例であり、草屋根^{くさやね}を葺^ふくにつかう杵^こにも、隅^{ぐもく}ぼく・縫^{ぬい}いぼくなどといろいろのボクがある。木の株や太い部分をボクまたはボクトというのも、木という漢字の音^{おん}ではなかった。つまりは木で作ったこういう長いものが、我^{わがくに}邦ではすべてホコまたはムホコであったのを、武器にはホコといい、他の杵はオコといって区別をしたので、棕^{むく}を削^{むく}つてホコにするのにてきた木だったからこの名があり、現にまた、これをホコと呼ぶ例もある。杵^こという漢字をあてているけれども、ボウも、ことによるとホコという日本語から、わかれて出た言葉かも知れぬのである。ともかくも、昔は我邦にボウという言葉はなくて、こういう物だけはたしかにあり、それをホコともオコとも謂^いっていたのである。山で手ごろな細い真直ぐな木を伐^きつて、それを利用して獵^いの獲物などを、持つてくることは今でもする。そういうのがこの道具のはじまりではなかったろうかと、わたし

は考えているのである。

こんな細かなことは、皆さんには入用がないように見えるが、棒の歴史の、これが第一章なのだから、やつぱりひと通りは聴^きいて置かなければならない。国の文化がすすむということは、こんな何でもないものが、だんだんと改良せられてくることである。それも現在まだどしどしと進んでいるものなら、人がなにかにつけて、その起原を考えずにいないだろうが、棒などはいったん広く用いられてのちに、今ではまた用が無くなってしまおうとしているのである。もし、このままにして置いたら、たいていの人は忘れるであろう。そうして前代日本人の、いろいろの苦心と経^{けい}験^{けん}とが、わからなくなるであろう。それは困るから歴史は学^{れきし}ぶのである。

一三、棒の分類

木^き扁^{へん}に力と書いてオコとよんでいるもの以外に、地方ではまた棒をサスという者と、天^て秤^ん棒^{ぼう}という者がある。東京などはその第三の天秤棒のほうであって、これが棒という言葉のふつうになったものであった。この三つの名称は、三つとも使っているところはや

や少なく、多くはそのうちの一つ、または二つを知っていて、それで間に合うもののように思っている。つまりは棒の使いみちがいくらもあり、そのこしらえもそれぞれに、ちがつていることに気がつかぬのであった。村にはいつて住んでいると、このちがいは注意せずにはいられない。現在もとても多く見かけるのは、棒の両端^{りようはし}をずっと細くしたもののだが、これにも二通りあつてただ先を尖^{とが}らしたものと、ツクと称する小さな突起を二つ、木または金属でつくつて嵌^はめこんだものがある。この二つは、共に比較的あたらしい改良であつて、以前はなるべく平^{たい}らな、まつすぐな棒を、少しもけずらずに使うのが枋^{おこ}であった。重い大きな荷物をこの枋のなかほどにゆわえつけ、二人で両端^{りようはし}を肩にのせて行くのを中担^{ちゆうにな}い、または差担^{さしにな}いともいつていた。小さい二人の兄弟が、こうして水をはこび、または親子で棒をやや前下^{まえさが}りに、荷物をなただけうしろのほうへ引取つて、かつぐ練習をさせるのもよく見られ、今でも道普請^{みちぶしん}の土運び^{つちはこ}には、これがふつうである。地方によつては中取り^{なかどり}といつて、こうして物を運ぶのをいやがるところもあると聴くが、それはただ荷物を棒にくくりつけるものだけで、多分はかんたんな葬式と、形がにているのが、いまわしいからで、綱を長く下げて棒に通すものまできらつたのでは、せつかく平らな広い路ができて、大きな重い物は運ばれないことになるから、そのほうは構^{かま}わずに

やっているのであろう。

しかし人がふたり以上話しあつた上でないと、物が運べないのでは杣の効能は小さい。

一人でも力のある男はそれを一方のはしに引掛ひっかけ、または分けられる物ならば半分ずつ両り端ようはしにつけて、まんなかをかたがて運ぼうとするようになったのは自然のことである。

一人で持つならばよつほどの山坂やまさかでも、杖つえを突き足もとに氣をつけて持つてくることのできた。関東・東北の働き人たちが、荷縄になわばかりを背にかけて山に行き、田畠に行くにたいて、もとは西国さいごくでは杣をかかえて出かける風ふうがあつた。これは九州ではヤンモコ、すなわち山杣やまおこといい、またはヤマコとも山行き杣やまいおこともいつていた。山杣のさきには鎌かまをゆわえ、それにオコノコという長い荷縄をそえてかたがているのが、作男さくおとこや小百こびやくしよ姓うの常の出立ちいでたであつたともいわれている。ところが、いつの間にかそれもまた變つて、他の地方ではサスといい、またはトギリ杣おことも（岡山）トガラシ杣おことも（大和）チヨガシ杣おことも（熊野）という棒を、山杣とよぶ村々もできてきたようである。

十四、サスとノメシ棒

棒の両端りようはしをとがらしたものを、東京の近在ではまたノメシ棒ともいつている。ノメシというのはなま惰け者のことで、荷縄で棒にくくりつけるめんどろをいやがり、じかに荷物のなかへ棒のはしを刺しこんでになつて帰るから、そういうたわむれの名をつけたのだが、これも、じつはじゆうぶんにその便利を知つた人の言葉であつた。これだと荷縄を掛けるための時間は、はぶかれるが、そのかわりには柴しばとか萱かやとか稲束いなたばとか、ぜひともしつかりと束たばにむすんだもので、棒を刺しても損じない物でなければならぬ。そうして、またそれらの物の束たばねかた、およびそれに使う縄なわとか蔓つるとかの材料も、問題になつてくるのだが、実際のところ村里むらやとには、こうして束ねたようなかんたんな荷物ばかりが多かつたのである。此方法このが始まると、いちいち長い縄で棒にくくりつけることがむだな手数のように考えられ、今までの山枌やまおこだけでなく地じかるいというような背で負う荷造りまで、なるべく荷縄をすくなく使おうとして、背板せいたや背負せおい梯子はしこの類るいにあらためられることにもなつたものらしい。

サスという棒の名は、束に突き刺すからサスだと思ふ人が、今では農民の中にも多くなつてゐるが、それだけは誤りである。尖とがつた棒でもなおオコという土地が多いというのみでなく、サスはがんらい横にわたすという意味で、すなわち斜めにして肩にのせるクジユ

ウという動詞に対する語であつた。直径をサシワタシというのと同じように、二人で棒の両はしをか昇くことを、今でもサシニナイ、またはサシアイ持ちというのが常である。しかし、ノメシ棒やチヨガシおこ杓も、なんだか変だから、これからはさきの尖つた杓だけを、サスということにするのは便利かもしれない。ただそのために、一方のこれをオコという人を、笑うことはできないだけである。まちがいをなくしようと思えば、このほうをサスオコ、ほかの昔からあつた尖らない杓のほうを、熊野くまの地方のようにマルオコと呼ぶのがよいかも知れない。

しかしまだこの以外に、わたしのこれから言おうとする天秤てんびん棒のことを、サスと呼び、オコといつて居る地方もあるが、これだけはまぎらわしいから区別を明らかにして置かなければならない。天秤棒もまことに変な名まえで、変だからまた覚えやすかつたのかも知らぬが、天秤はがんらいはかりの器械のことであつた。ふつうの衡器こうきは、棒の根もとに近いところは衡はかりの緒おがあり、それを下げていて他の一方の端はしのほうへ、分銅ぶんどうを送つて行くしかけであつたが、薬や金銀のような少しの物を量はかる天秤というものだけは、中央に支柱が立っていて、両方の皿さらが権衡けんこうを取るようになってゐる。それがこの棒をもって物になう形と似ているので、天秤棒という名が始まつたのである。その天秤が今ではただ、

両^{りょう}天^{てん}秤^{びん}などという言葉だけをのこして、だんだん使われなくなってきたために、説明がむづかしくなった。そうして、また、このいわゆる天秤棒には、何かかわった名をつけてでも、区別しなければならぬ大きな特徴があつたのである。

一五、天秤棒の特色

この発明は、あるいは支那にはじまったものかとも思うが、かりに外国から学んだとしても、その便利をただちに理解して、これだけまでひろく国内に普及させたことは、なお我々の祖先のてがらと言わなければならぬ。同じく両^{りょう}端^{はし}をほそくした棒でも、束^{たば}に突きさすだけの尖^{とが}らし杓^{おこ}と、この天秤棒^{てんびんぼう}とはけずり方がちがひ、またよく見るとこのほうは、まんなかのところもやや平^{たい}らめにけずつてある。これはになつて行く者の足取り^{あしど}について、両^{りょう}端^{はし}が少しずつ上^{じやう}下^げにうごき、そのわずかのあいだだけ、肩を休めるようにできているので、そういう動作のために、荷物の吊^{つり}縄^{なわ}がすべり落ちないように、丈夫^{じやうぶ}な小さい突起が、棒の両端についているのである。この突起をツクといい、またツコともチコともいう人があるが、ツクのほうは古い日本語であつて、小舟^{こぶね}の櫓^ろなどにも古くから

ツクがついていた。つまり天秤棒はこのツクのあるおかげに、サスとはちがつて棒がよっぽどかたむいても、荷物はずり落ちてしまわないのだから、肩で加減をすれば、そうほうの荷が平均しくとも、そのままになつて行くことができる。その点がまた衡器こうきの天秤とよく似ていたのである。

このいわゆる天秤棒のことを、長崎地方ではまたツクオーコというので、このほうがむしろよく当あたつている。伊予いよの宇和島うわじまでは、これをカリコ棒、このカリコは東北からもつてきた言葉であらうが、この地方ではかる子も縄をもつて背にかるわずにツクのある棒になつていたのである。伊賀うえのの上野あたりでは、タビヨコというのが天秤棒のことであつた。タビヨコはすなわち旅たび枋おこであつて、こういうにない方をすれば相応に重い荷物でも、かなりの速力で遠くまで持つて行くことができたので、旅あきなの商いをする人たちが、まずこれを利用し始めたのである。東京の市中で見ていると、多くの商人は手て車くるまを曳ひくようになつたが、今でも天秤棒をかついでくるのは豆腐屋に金魚売り、その他液体のはいった容器をになう者に多い。農村のほうでも水を汲くむとか、下水を田畠にはこぶとかには、他の方法だつたら容易のわざでないのを、タゴおけという桶おけならばよほどかんたんになるので、この特別の棒を早くから採用し、そのために畠作などはいちじるしい進歩をしたのであつた。

しかしそれも今日こんにちはもう歴史である。是これから先さきはどう變つて行くか、私たちはまた一つの新しい經驗を積まなければならぬのである。

町では天秤棒を生活の要具としていたのは、今までは八百屋やおやと肴屋さかなやとが主しゅであつた。配給の時代には問題はなかつたが、その前にもすでに八百屋は車になつていた。肴屋のほうは走らないと新鮮だという感じが出ないので、また各地方で天秤棒をかついでいるが、これもだんだんと汽車電車などに乗る故に、長い棒がじやまにされて、しまいには亜鉛トタンの板で張つた四角しかくの箱を、カンカラといつてまた背負いあるくようになってゐる。水汲みずくみを手桶ておけになり、にない桶になり、また水道になつた結果、女の頭の上に物をのせる練習が足りなくなつたことは、もう前に話をしてしまつたが、これを専門に魚さかななどを売りあるいた女たちも、いよいよこの運送法へんせんの變遷へんせんのために、あの古風こふうな形をやめなければならぬ時に、出あつてゐる。中国地方ではこの魚売りさかなうの女をカネリ、またはカベリといつていた。カベルと被かぶるというのとの一つの言葉である。その周囲の四国でも、九州でも、また北陸地方でも、まだイタダキという昔の名を持つてゐる。しかもその戴いたきが、すでに天秤棒をかつぎ、またはリヤカアを引張ひっぱつてあるいてゐる土地は、もうだんだんと多くなつてゐるのである。

青空文庫情報

底本：「いども風土記・母の手毬歌」岩波文庫、岩波書店

1976（昭和51）年12月16日第1刷発行

2009（平成21）年7月9日第12刷発行

底本の親本：「母の手毬歌」少年少女知識文庫、ポプラ社

1952（昭和27）年10月5日刊

初出：母の手毬歌「週刊小国民 第四卷一号」

1945（昭和20）年1月

親棄山「少女の友 三八卷二・三号」

1945（昭和20）年1月、2月

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年5月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母の手毬歌

柳田国男

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>